

Oracle9i Warehouse Builder

インストレーションおよび構成ガイド

リリース 9.2

部品番号 : J07818-01

2003 年 10 月

ORACLE®

Oracle9i Warehouse Builder インストレーションおよび構成ガイド, リリース 9.2

部品番号 : J07818-01

原本名 : Oracle9i Warehouse Builder Installation and Configuration Guide, Release 9.2

原本部品番号 : B11000-01

原本著者 : Julia M. Stein

原本協力者 : Srinivasa Ganti, Helen Kang, Adrian Scott, Ron Gonzalez, Dick Whittington, Geoff Watters, Edwin Meijer, Yu Gong, Mark Van De Wiel, John Potter, Barry Cook, Mark Rovers, Elina Sternik, Adrian Scott, Anil Menon

Copyright © 1996, 2003 Oracle. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム (ソフトウェアおよびドキュメントを含む) の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、**Oracle Corporation** (米国オラクル) または日本オラクル株式会社 (日本オラクル) を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である **Oracle Corporation** (米国オラクル) およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『**Restricted Rights**』と共に提供してください。この場合次の **Notice** が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	v
目的	vi
対象読者	vi
マニュアルの構成	vii
リリース 9.2 の新機能	viii
リリース 9.0.4 の追加機能	xii
表記規則	xviii
関連資料	xix

1 Oracle9i Warehouse Builder インストール要件

1.1	Oracle9i Warehouse Builder のインストールのクイック・ステップ	1-2
1.2	Oracle9i Warehouse Builder のインストール・コンポーネントの概要	1-4
1.2.1	Oracle9i Warehouse Builder について	1-4
1.2.2	Oracle9i Warehouse Builder のインストール・コンポーネント	1-4
1.3	ハードウェア要件	1-8
1.4	動作環境のソフトウェア要件	1-8
1.5	Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのソフトウェア要件	1-12
1.6	動作要件	1-13
1.7	共存 : ORACLE_HOME に関する考慮事項	1-13
1.8	インストール準備作業	1-14
1.8.1	一般チェックリスト	1-15
1.8.2	ロケールの設定	1-15
1.8.3	環境変数の設定 (UNIX のみ)	1-16
1.8.4	UNIX アカウントおよびグループの作成 (UNIX のみ)	1-17
1.8.5	インストールに必要な情報	1-19

1.9	Oracle Universal Installer について	1-19
1.9.1	インベントリ・ディレクトリ	1-19
1.9.2	Oracle Universal Installer の起動	1-20

2 Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのインストール

2.1	Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントとそのインストールの概要	2-2
2.1.1	Oracle9i Warehouse Builder のアーキテクチャ・コンポーネント	2-2
2.1.2	Oracle Universal Installer でインストールされるコンポーネント	2-4
2.1.3	SYSDBA ユーザーへのアクセス権	2-7
2.2	ステップ 1. Oracle Universal Installer での「OWB Design Time Install」の実行	2-8
2.2.1	root.sh スクリプトの実行 (UNIX のみ)	2-10
2.3	ステップ 2. Repository Assistant での Design Repository のインストール	2-10
2.4	ステップ 3. Oracle9i Warehouse Builder Design Browser Client の有効化	2-16
2.5	ステップ 4. Oracle Universal Installer での「OWB Server Side Install」の実行	2-17
2.5.1	root.sh スクリプトの実行 (UNIX のみ)	2-19
2.6	ステップ 5. Runtime Assistant でのランタイム・オブジェクトのインストール	2-20
2.6.1	Runtime Repository と Runtime Access User のインストール	2-21
2.6.2	Oracle9i Warehouse Builder ターゲット・スキーマのインストール	2-25
2.7	ステップ 6. Design Browser および Runtime Audit Browser 用の Web ブラウザの構成	2-28
2.7.1	Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リストへの 「LOCALHOST」の追加	2-28
2.7.2	Web ブラウザのキャッシュ管理の構成	2-29
2.7.3	ネット・サービス名を使用した Oracle9i Warehouse Builder の構成	2-29
2.7.4	UNIX 上の Netscape の場合 : displayURL.sh の権限の設定	2-30
2.8	ステップ 7. (オプション) Oracle9iAS への Oracle9i Warehouse Builder Browser の統合	2-30
2.8.1	Design Browser と Runtime Audit Browser を Oracle9iAS に統合する理由	2-30
2.8.2	Browser Assistant での Oracle9i Warehouse Builder Browser のインストール	2-31
2.8.3	Oracle9i Warehouse Builder Design Browser の構成	2-34
2.8.4	Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser の構成	2-35
2.9	ステップ 8. (オプション) サードパーティの Name and Address データのインストール ...	2-44

3 リリース 9.2 へのアップグレードとデータの移行

3.1	概要	3-2
3.2	別の ORACLE_HOME への Oracle9i Warehouse Builder のインストール	3-3
3.3	既存の Oracle9i Warehouse Builder Design Repository からのメタデータのエクスポート	3-3

3.4	設計メタデータのインポートまたはアップグレード	3-4
3.4.1	新しい Oracle9i Warehouse Builder Design Repository へのメタデータのインポート	3-5
3.5	新しいターゲット・スキーマへのデータの移行	3-7
3.5.1	オプション 1. Oracle9i Warehouse Builder インタフェースでの データベース・オブジェクトの再生成	3-7
3.5.2	オプション 2. Oracle データベース・サーバーでの データベース・オブジェクトのエクスポートとインポート	3-9
3.5.3	オプション 3. 新しいターゲット・スキーマでの元のオブジェクトのシノニムの作成	3-10
3.6	新しいターゲット・スキーマへのマッピングの配布	3-11
3.7	新機能を利用するためのマッピング構成の更新	3-11
3.8	オプション : Oracle9i Warehouse Builder の旧バージョンの削除	3-12

4 Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントの削除

4.1	ステップ 1. Oracle9iAS からの Design Browser および Runtime Audit Browser の削除	4-2
4.2	ステップ 2. Oracle9i Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・オブジェクトの削除	4-3
4.3	ステップ 3. Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository オブジェクトの削除	4-4
4.4	ステップ 4. Oracle9i Warehouse Builder Design Repository オブジェクトの削除	4-5
4.5	ステップ 5. Oracle9i Warehouse Builder や他の Oracle ソフトウェアの削除	4-5

A Oracle9i Database および Oracle8i R8.1.7 の準備

A.1	Design Repository データベース・インスタンスの初期化パラメータ	A-2
A.2	Runtime Repository データベース・インスタンスの初期化パラメータ	A-3
A.3	Oracle9iAS Metadata Repository の初期化パラメータ (オプション)	A-6

B Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow のインストール

B.1	Oracle Enterprise Manager の構成	B-2
B.1.1	ステップ 1: Oracle Enterprise Manager リポジトリの作成	B-2
B.1.2	ステップ 2: Windows ユーザーの作成	B-4
B.1.3	ステップ 3: 優先接続情報の構成	B-5
B.1.4	Oracle Enterprise Manager と Intelligent Agent のデータベース互換性マトリックス	B-7
B.2	Oracle Workflow のインストール	B-8
B.2.1	Oracle Workflow Server のインストール	B-8
B.2.2	Oracle Workflow Client のインストール (オプション)	B-8

C MDL File Upgrade Utility を使用したメタデータのアップグレード

C.0.1	MDL File Upgrade Utility について	C-2
C.0.2	MDL File Upgrade Utility の使用	C-2
C.0.3	コマンドラインからの MDL File Upgrade Utility の実行	C-5

D 診断およびデバッグ

D.1	デバッグ	D-2
D.1.1	ログ・ファイルのロケーション	D-2
D.1.2	Oracle9i Warehouse Builder のフリーズまたはハングアップ	D-2
D.1.3	エラーおよびその他の予期せぬ動作についての詳細なエラー・ロギング	D-3
D.1.4	Runtime Platform Service の管理	D-5
D.1.5	HP-UX へのインストール時に発生するデータベース・サーバー問題の検出	D-6
D.2	診断	D-6

索引

はじめに

ここでは、次の項目について説明します。

- [目的](#) (vi ページ)
- [対象読者](#) (vi ページ)
- [マニュアルの構成](#) (vii ページ)
- [リリース 9.2 の新機能](#) (viii ページ)
- [リリース 9.0.4 の追加機能](#) (xii ページ)
- [表記規則](#) (xviii ページ)
- [関連資料](#) (xix ページ)

目的

Oracle9i Warehouse Builder は、データの移動や変換、ビジネス・インテリジェンス・システムの開発および実装、メタデータの管理、Oracle データベースおよびメタデータの作成と管理を行う専門家のための包括的なツールセットです。このマニュアルでは、Oracle9i Warehouse Builder および主要な関連製品のインストール方法を説明します。Windows マシンまたは UNIX マシンに Oracle9i Warehouse Builder Client、サーバー、および Oracle9i Warehouse Builder Design Repository をインストールする場合に、このマニュアルを使用してください。

ここに記載するインストール手順は、ハードウェアおよびソフトウェアの構成内容、または Oracle9i Warehouse Builder とともにインストールする製品に対応して変更できます。詳細は、『Oracle9i Warehouse Builder リリース・ノート リリース 9.2』を参照してください。

対象読者

このマニュアルは、次にあげる Oracle9i Warehouse Builder のインストール担当者を対象にしています。

- ビジネス・インテリジェンス・アプリケーション開発者
- ウェアハウス管理者
- システム管理者
- その他の MIS（経営情報システム）担当者

Oracle9i Warehouse Builder をインストールするには、Oracle9i のインストールについての知識が必要です。

マニュアルの構成

このマニュアルは、次の内容で構成されています。

- [第 1 章「Oracle9i Warehouse Builder インストール要件」](#) では、Oracle9i Warehouse Builder のインストール要件について記載します。Oracle9i Warehouse Builder のクライアント、サーバーおよびリポジトリのインストールに必要なシステム要件を確認してください。
- [第 2 章「Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのインストール」](#) では、Oracle9i Warehouse Builder のクライアント、サーバー、ブラウザ、Design Repository および Runtime Repository の典型的なインストール方法を説明します。
- [第 3 章「リリース 9.2 へのアップグレードとデータの移行」](#) では、以前のバージョンの Oracle9i Warehouse Builder から Oracle9i Warehouse Builder にメタデータをアップグレードする方法を説明します。
- [第 4 章「Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントの削除」](#) では、Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントの削除方法を説明します。
- [付録 A「Oracle9i Database および Oracle8i R8.1.7 の準備」](#) では、Oracle9i Warehouse Builder のデータベースの準備に必要な初期化パラメータの変更内容を記載します。
- [付録 B「Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow のインストール」](#) では、ジョブのスケジュールとジョブ依存性の管理のために、Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow を Oracle9i Warehouse Builder とともにインストールおよび構成する際のガイドラインを記載します。
- [付録 C「MDL File Upgrade Utility を使用したメタデータのアップグレード」](#) では、メタデータを MDL インポートの自動処理としてアップグレードするのではなく、個別にアップグレードする場合の MDL File Upgrade Utility の使用方法を説明します。
- [付録 D「診断およびデバッグ」](#) では、トラブルシューティングのガイドラインを記載します。

リリース 9.2 の新機能

Oracle9i Warehouse Builder のインストールおよびアップグレードの変更

- **Oracle9i Warehouse Builder が HP-UX および AIX で使用可能**: このリリースからは、UNIX (HP-UX および AIX) プラットフォームで Oracle9i Warehouse Builder が使用可能になります。これは、以前のリリースから使用可能だった UNIX (Solaris および Linux) プラットフォーム、Windows (NT、2000 および XP) プラットフォームに加えて使用可能になりました (MITI Bridge の機能は、Windows プラットフォームでのみ有効になり、Name and Address Server は、Windows と Solaris プラットフォームでのみ使用できることに注意してください)。
- **MDL File Upgrade Utility が実行不要**: 以前のバージョンの Oracle9i Warehouse Builder からエクスポートしたメタデータは、Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 にインポートするときに自動的にアップグレードされます。Oracle9i Warehouse Builder の Graphical User Interface (GUI) では、MDL インポートを実行すると、インポート・ファイルのバージョンが検出され、アップグレード・ファイル名とログを指定する画面が表示されます。OMB Scripting Language では、OMBIMPORT FROM MDL_FILE スクリプト・コマンドに、自動アップグレードを行わない NO_UPGRADE オプションが追加されました。Oracle9i Warehouse Builder Public API では、新しい setAutoUpgrade パラメータを「T」に設定すると、インポート・ファイルがアップグレードされます。コマンドライン・インタフェースでは、AUTOUPGRADE パラメータを「Y」に設定すると、インポート・ファイルがアップグレードされます。以前のバージョンの Oracle9i Warehouse Builder では、MDL File Upgrade Utility を使用して MDL ファイルを個別にアップグレードしてから、新しいバージョンの Oracle9i Warehouse Builder にインポートする必要がありました。
- **MDL インポートの UI では、インポート用に指定された MDL ファイルが以前の MDL リリースのものであるかどうか確認されます**。このファイルが以前の MDL リリースのものである場合は、アップグレード用の出力ファイル名とアップグレード・ログ・ファイル名を指定する画面が表示されます。アップグレードが正常に完了すると、アップグレードによって作成されたファイルがインポートされます。

マッピング・エディタの拡張

マッピング・デバッガ: このリリースの Oracle9i Warehouse Builder では、マッピング・エディタ内からのマッピング用に、拡張的なデバッグ機能が提供されます。マッピング・デバッガを使用して、マッピング内の論理設計エラーを見つけます。この新機能では、ブレイク・ポイントやウォッチの設定、テスト・データの対話的変更などの包括的なデバッグ機能を使用して、マッピングのデータ・フローを順を追って確認できます。

複数ターゲットのサポートの拡張

関連コミット: このリリースでは、複数のターゲットを含むマッピングに使用する新しいコミット方法が導入されます。以前のリリースの Oracle9i Warehouse Builder では、独立したコミットが実行されました。つまり、Oracle9i Warehouse Builder では、他のターゲットに関係なく、各ターゲットがコミットおよびロールバックされていました。このオプションに加え、このリリースの Oracle9i Warehouse Builder では関連コミットも実行されます。つまり、すべてのターゲットをひとまとまりと見なして、ターゲット全体で一様にデータをコミットまたはロールバックします。ソース内の各行が、すべての関連ターゲットに一様に影響を与えるようにするには、関連コミットを使用します。

パーティション交換ロードの拡張

ダイレクト・パーティション交換ロード: 以前のリリースの Oracle9i Warehouse Builder では、ソース・データの追加処理が必要なマッピング用に一時表がデフォルトで作成され、その後パーティションが交換されていました。このような状態は、マッピングにリモート・ソースまたは結合した複数のソースが含まれた場合に発生しました。このリリースでは、一時表を作成する必要はなく、ソースを直接ターゲットに交換できます。マッピングでダイレクト・パーティション交換ロードを使用して、前に実行されたマッピングでロードしたファクト表を即座にパブリッシュします。

データの品質に関する機能

- **複数の Name and Address ソフトウェア・プロバイダ:** このリリースからは、動作保証された複数の Name and Address ソフトウェア・プロバイダと Oracle9i Warehouse Builder が連携できるようになります。サード・パーティ・ベンダーに許諾された Name and Address ソフトウェアを Oracle9i Warehouse Builder で使用できます。これによって、プロジェクトに最適な Name and Address プロバイダを選択できるようになります。
- **Name and Address 演算子ウィザード:** 以前のリリースでは、マッピング・キャンバスと演算子の構成プロパティ・シートを使用して、Name and Address 演算子を定義していました。このリリースの Oracle9i Warehouse Builder では、使い易さを考慮して、ウィザードおよび演算子エディタで Name and Address 演算子を作成および編集できるようになりました。
- **Match-Merge 演算子:** Oracle Pure Integrate で使用していたデータの品質に関する機能が、Oracle9i Warehouse Builder に組み込まれました。マッピング・エディタで Match-Merge 演算子を使用して、レコードの一致とマージに関するビジネス・ルールを定義できます。Match-Merge 演算子を Name and Address 演算子とともに使用すると、Name and Address データで一意的なハウスホールドを識別するプロセスがサポートされます。

メタデータ変更管理

以前のリリースでは、OMB Plus スクリプト・ユーティリティを使用してメタデータ変更管理を実行していました。このリリースからは、Oracle9i Warehouse Builder Client ユーザー・インタフェースで同様の機能を実行できます。メタデータ変更管理によって、メタデータ・オブジェクトのスナップショットを取得したり、バックアップや履歴管理にスナップショットを使用したりできます。ナビゲーション・ツリーの任意のオブジェクトでスナップショットがサポートされます。スナップショットにはオブジェクト自身の情報（表やモジュールなど）や、オブジェクト内のオブジェクト（モジュール内の表など）の情報が格納されます。

Oracle9i Warehouse Builder 機能の拡張

- **セキュリティ**：このリリースの Oracle9i Warehouse Builder では、セキュリティ要件に応じて採用するリポジトリ・セキュリティと監査のオプションが拡張されます。拡張されたセキュリティ・オプションは次のとおりです。

プロアクティブ・セキュリティ：Oracle9i Warehouse Builder では、カスタマイズされた PL/SQL のセキュリティ実装パッケージを Oracle9i Warehouse Builder Design Repository にプラグインして、ユーザーの組織で定義されたセキュリティ・ルールに応じたアクセス制御をユーザーに提供できます。

リアクティブ・セキュリティ：Oracle9i Warehouse Builder では、メタデータ履歴に基づいて監査情報を追跡し、このような監査情報によってセキュリティ・ポリシーを決定できます。

データ管理：Oracle9i Warehouse Builder では、技術管理者ではなく、ユーザーまたはグループがメタデータの一部を所有できます。したがって、メタデータの所有権は、メタデータのセキュリティ管理において重要です。

- **RAC のサポート**：Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 では、RAC 機能のサポートが拡張されます。このリリースの Oracle9i Warehouse Builder では、実行時にネット・サービス名を使用できるようになります。これによって、ランタイム環境を再構成せずに、クラスタ内のノードの保守計画を立てることができます。また、Oracle9i Warehouse Builder では、ランタイム・サービスの可用性も拡張されます。たとえば、サービス・インスタンスまたは関連のノードが失敗するか、サービスが停止すると、別のノードにあるランタイム・サービス・インスタンスをかわりに実行できます。Oracle9i Warehouse Builder Design Repository も RAC クラスタで使用できますが、このリリースでは RAC のフェイル・オーバー機能は利用できません。

フラット・ファイル・サポートの拡張

- **ZONED データ型のサポート**: このリリースの Oracle9i Warehouse Builder では、ゾーン 10 進データを含む固定形式のデータ・ファイルをロードできるようになります。フラット・ファイル・サンプル・ウィザードで、インポートするフラット・ファイルに ZONED データ型を指定します。ゾーン化データの形式は、10 進数の文字列（1 バイトに 1 桁）で、最終バイトに記号が含まれています（COBOL では、SIGN TRAILING フィールドになります）。このフィールドの長さは、指定した精度（桁数）と同じです。小数点以下の桁数であるスケールも指定できます。
- **DECIMAL データ型のサポート**: 10 進データはパック化された 10 進形式で、1 桁と記号を含む最終バイトを除いて、1 バイトに 2 桁ずつ含まれています。DECIMAL データ型には、精度とスケールが含まれているので、端数値が示されます。

データベース接続性の拡張

このリリースでは、パブリック・データベース・リンクを作成して、データベース全体で共有できるようになります。リポジトリの所有者や、CREATE PUBLIC DATABASE LINK 権限を持つ他のユーザーは、パブリック・データベース・リンクを作成できます。

Public API

このリリースでは、Public API が Oracle9i Warehouse Builder に組み込まれました。Public API にアクセスするには、次のファイルを解凍し、ローカル・マシン上のフォルダに展開します。

```
<owb home directory>%owb%lib%int%pubapi_javadoc.jar
```

ファイル index.html をダブルクリックします。API の使用方法については、「ヘルプ」リンクを選択します。

リリース 9.0.4 の追加機能

Oracle9i Warehouse Builder では、次の新機能が導入されました。

Oracle9i Warehouse Builder のインストールの変更

- **Oracle9i Warehouse Builder が UNIX で使用可能:** このリリースからは、Windows (NT、2000 および XP) プラットフォームに加え、UNIX (Solaris および Linux) プラットフォームで Oracle9i Warehouse Builder が使用可能になります。これは、Oracle9i Warehouse Builder のすべてのコンポーネントに該当します (OLAP Bridge の機能は、Windows プラットフォームでのみ有効になり、Name and Address Server は、Windows と Solaris プラットフォームでのみ使用できることに注意してください)。
- **Oracle Workflow Client がインストール不要:** Oracle9i Warehouse Builder を完全にインストールするには Oracle Workflow のランタイム・コンポーネントが必要ですが、Oracle Workflow Client の機能は、Oracle9i Warehouse Builder のプロセス・フロー・エディタに引き継がれています。Oracle Workflow Client をインストールすると、Oracle Workflow に配布された Oracle9i Warehouse Builder プロセスを表示できます。
- **Oracle9i Warehouse Builder Workflow Queue Listener がインストール不要:** Workflow Queue Listener は、Oracle9i Warehouse Builder の新機能である Runtime Platform Service に置き換えられました。

- **Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser Client:** このリリースには、Runtime Audit Browser のクライアント・バージョンがあり、これを Oracle9iAS とは別に構成できます。Oracle9iAS とともに Runtime Audit Browser の統合バージョンをインストールすることもできますが、これはもう不要です。

Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser Client は、Runtime Repository に事前にインストールされています。ユーザーは、Oracle9i Database インスタンス上で Oracle HTTP Server をセットアップするだけです。

- **Oracle9i Warehouse Builder Design Browser Client:** このリリースには、Design Browser のクライアント・バージョンがあり、これを Oracle9iAS とは別に構成できます。Oracle9iAS とともに Design Browser の統合バージョンをインストールすることもできますが、これは必須ではありません。

Oracle9i Warehouse Builder Design Browser Client は、Design Repository に事前にインストールされています。ユーザーは、Oracle9i Database インスタンス上で Oracle HTTP Server をセットアップするだけです。

- **Oracle9i Application Server との統合 (オプション) :** Oracle9iAS と、Oracle9i Warehouse Builder Design Browser および Runtime Audit Browser を統合できますが、これは必須ではありません。

Oracle9i Warehouse Builder コンソールの変更

- **拡張ナビゲーション・ツリー**: Oracle9i Warehouse Builder コンソールに表示されるナビゲーション・ツリーが拡張されたため、プロジェクト間のナビゲーションが改善され、メタデータ・リポジトリ・オブジェクトに直接アクセスしやすくなりました。以前は一度に1つのプロジェクトしか表示できませんでしたが、すべてのプロジェクトをツリーで表示できるようになりました。プロジェクト・ノードを開いて、アクティブなプロジェクトの内容を表示できます。モジュール・ツリーは、別のウィンドウに表示されなくなりました。
- **ウィザード、エディタ、プロパティ・シート**: Oracle9i Warehouse Builder のウィザード、エディタおよびプロパティ・シートはすべて、ナビゲーション・ツリーから起動できます。
- **ビジネス・エリアからコレクションに名前変更**: 以前のリリースでは、ウェアハウス・モジュールでビジネス・エリアを作成して、Oracle9i Warehouse Builder のオブジェクトを編成し、Oracle9iAS Discoverer などのツールにメタデータをエクスポートできました。このリリースからは、すべての機能でビジネス・エリアがコレクションに変更され、コレクションへのメタデータのインポート、コレクションからのメタデータのエクスポートなどの機能が拡張されています。
- **ファクト表からキューブに名前変更**: OLAP の業界標準に対応するために、このリリースからファクトおよびファクト表という用語がキューブに変更されています。
- **論理名からビジネス名に名前変更**: このリリースから、オブジェクトの論理名への参照がビジネス名に変更されています。
- **Oracle9i Warehouse Builder コンソールのツールバー**: 最も重要な機能を1箇所にまとめるために、ユーティリティ・ドローワが削除され、Oracle9i Warehouse Builder コンソールの横および上部のツールバーが上部でマージされました。

配布の拡張

- **配布管理オブジェクトの追加**: このリリースでは、配布のソースおよびターゲットへの接続管理に役立つ3つのオブジェクト・タイプが導入されています。これらは、ロケーション、コネクタ、ランタイム・リポジトリ接続の3つです。ロケーションでは、配布の物理的なロケーションが定義されます。コネクタでは、ロケーション間のリレーションシップが定義されます。ランタイム・リポジトリ接続では、Runtime Repository に関する情報が提供されます。これらのオブジェクトを使用すると、同一のターゲット設計に関して複数の配布ターゲットを作成できます。
- **単一の配布管理インタフェース**: デプロイメント・マネージャでは、単一のインタフェースを使用して、すべてのオブジェクトの配布や、配布されたマッピング、配布された変換、配布されたプロセス・フローの実行を管理できます。また、以前に配布されたオブジェクトの履歴にも直ちにアクセスできます。デプロイメント・マネージャによってこれらすべてのタスクを1つのインタフェースから実行できるだけでなく、Oracle9i Warehouse Builder ではランタイム・メタデータの追跡が行われ、以前に配布されたオブジェクトの履歴を確認できます。

Oracle9i Warehouse Builder メタデータ・ブラウザの拡張

- **設計メタデータの参照** : Oracle9i Warehouse Builder Design Browser が拡張され、外部表、ロケーション、コネクタなど、新しく公開されたオブジェクトがすべて表示されます。また、Design Browser をスタンドアロンの実行可能ファイルで起動できるようになりました。シングル・ユーザーで使用する場合は、Oracle9iAS をインストールする必要はありません。
- **ランタイム・メタデータの参照** : Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Viewer が Runtime Audit Browser に変更され、Web ベースのレポート作成が可能になりました。Runtime Audit Browser を使用すると、以前のリリースに比べ、配布および実行の監査レポートが拡張されます。この監査データは、Runtime Repository に格納されている情報から取得されたもので、配布と実行の両方のデータが含まれています。

Oracle9i Warehouse Builder のプログラムで規定されたアクセスの拡張

- **Oracle9i Warehouse Builder Public API** : このリリースの Oracle9i Warehouse Builder では、Oracle9i Warehouse Builder の機能にプログラムで規定されたアクセスを行う方法として、アプリケーション・プログラマに一連の Public Java API が提供されるようになります。アプリケーション・プログラマは Public Java API を使用して、自分のアプリケーションに Oracle9i Warehouse Builder の機能およびサービスを埋め込むことができます。
- **Oracle9i Warehouse Builder スクリプト言語** : Oracle MetaBase (OMB) Scripting Language を使用すると、Oracle9i Warehouse Builder の Graphical User Interface (GUI) を使用せずに、Oracle9i Warehouse Builder のすべての機能にアクセスできます。ユーザーは Oracle9i Warehouse Builder のスクリプト・ユーティリティである OMB Plus を使用して、Oracle9i Warehouse Builder のメタデータおよび機能にアクセスできます。これにより、開発者は、Oracle9i Warehouse Builder をプログラマ的に使用し、必要に応じて機能を拡張できるようになります。OMB Scripting Language の詳細は、『Oracle9i Warehouse Builder スクリプト・リファレンス』を参照してください。

メタデータ管理の拡張

- **セキュリティ** : このリリースの Oracle9i Warehouse Builder では、セキュリティ要件に応じて採用するリポジトリ・セキュリティと監査システムのオプションが提供されます。複数の識別可能なユーザーが同一の Oracle9i Warehouse Builder Design Repository にアクセスできるように、マルチ・ユーザー・アカウント・システムを作成できます。また、Oracle9i Warehouse Builder では、カスタマイズされた PL/SQL のセキュリティ実装パッケージを Oracle9i Warehouse Builder Design Repository にプラグインして、ユーザーの組織で定義されたセキュリティ・ルールに応じたアクセス制御をユーザーに提供できます。

- **メタデータ変更管理（メタデータのスナップショット）**：このリリースから、メタデータ・オブジェクトのスナップショットを取得したり、バックアップや履歴管理にスナップショットを使用したりできます。ナビゲーション・ツリーの任意のオブジェクトでスナップショットがサポートされます。スナップショットには、オブジェクト自身の情報（表やモジュールなど）や、オブジェクト内のオブジェクト（モジュール内の表など）の情報が格納されます。
- **複数言語サポート（MLS）**：この機能を使用すると、表示されているビジネス名や記述を、リポジトリの基本言語以外の言語で格納できます。ビジネス名や記述のさまざまな翻訳を使用して、ターゲット・ユーザーの言語で EUL に配布できます。
- **ユーザー定義プロパティによる拡張性**：Oracle9i Warehouse Builder OMB Plus スクリプト・ユーティリティを使用すると、任意の Oracle9i Warehouse Builder オブジェクトに追加のプロパティを定義できます。スクリプトでユーザー定義プロパティを定義した後、ユーザー・インタフェース、Oracle MetaBase (OMB) Scripting Language、Oracle9i Warehouse Builder Public API および Oracle9i Warehouse Builder Design Browser で、これらのプロパティにアクセスできます。これによって Oracle9i Warehouse Builder がさらに拡張され、他のビジネス・インテリジェンス製品との統合が簡単になります。
- **Metadata Loader（インポートおよびエクスポート）の柔軟性の拡張**：この領域を拡張するために、2つの新機能が追加されました。1つ目は、メタデータをコレクションから直接エクスポートする機能です。2つ目の機能は、Metadata Loader コマンドライン・ユーティリティで使用できます。これにより、ファーストクラス・オブジェクトのインポート時に適用するアクションのタイプを柔軟に指定できます。

プロセス・フロー・エディタ

このリリースからは、Oracle9i Warehouse Builder でプロセス・フロー・エディタを使用して、プロセス・フローを作成および定義できます。以前マッピングで定義した外部プロセス演算子は、ユーザー定義プロセスにアップグレードされ、プロセス・フロー・モジュールに含まれます。プロセス・フローは、同じ Oracle9i Warehouse Builder 設計環境に統合されるので、Oracle Workflow 設計クライアントでこれらの機能を実行する必要はありません。Oracle9i Warehouse Builder プロセス・フロー・エディタでは、マッピングのセマンティックが固有の方法で解釈されます。プロセス・フロー・エディタで、FTP、電子メールなどのアクティビティをモデル化できます。

パフォーマンスの改善

- **マッピング・ユーザー・インタフェース**：「マッピング」という事前定義された表示セットが、このリリースで新たに追加されました。この表示セットを選択すると、「マッピング」では、事実上マップまたは使用されている列のみが表示されます。
- **マッピング圧縮**：この機能では、指定されたマッピング内にある、演算子と属性の間の未使用接続が検出され、リポジトリから削除されます。これにより、大量のデータ・フローを要する大規模なマッピングをロードおよび格納する際のパフォーマンスが劇的に改善されます。

- **Metadata Loader (インポートおよびエクスポート) :** インポートおよびエクスポートの機能では、各マッピングに使用可能な新しい圧縮機能が利用されます。つまり、Metadata Loader では、実際に使用されているマッピング・オブジェクトのみがエクスポートおよびインポートされます。

Oracle9i Database の統合

- **OLAP の統合 :** Oracle9i Warehouse Builder を使用すると、多次元 OLAP オブジェクトを ROLAP モデルまたは MOLAP モデルとして、さまざまなデータ・ソースから設計、配布およびロードできます。データをロードしたら、BI ツールおよびアプリケーションを使用して、ビジネス上の疑問に対応する複雑な分析問合せを実行できます。Oracle9i Warehouse Builder を使用すると、リレーショナル・オブジェクトと多次元オブジェクトの両方を、同じキューブおよびディメンションの設計から作成および管理できます。
- **アドバンスト・キュー (AQ) の統合 :** Oracle9i Warehouse Builder では、アドバンスト・キューの定義をインポートしたり、データ・ウェアハウスを設計する際のデータ・ソースおよびターゲットとして AQ を使用したりできます。アドバンスト・キュー機能を Messaging Gateway と組み合わせることで、Oracle9i Warehouse Builder では、MQ Series および Tibco で、メッセージング・アプリケーションを Oracle9i Warehouse Builder データ・ソースとしてサポートできます。AQ を使用すると、Oracle9i Database のチェンジ・データ・キャプチャ機能によってキャプチャされた変更データをソース・システムからターゲットへ伝播することもできます。AQ を統合する機能は、将来リアル・タイムのデータ・ウェアハウスを提供する基盤となります。
- **外部表 :** このリリースから、外部表を使用して、非リレーショナルのファイル・ソースのデータを、リレーショナルの読取り専用形式で表現できます。Oracle9i Database から既存の外部表をインポートできます。あるいは、フラット・ファイル定義に基づいて、Oracle9i Warehouse Builder で外部表を作成できます。Oracle9i Warehouse Builder では、外部表を Oracle9i Database に配布するための DDL が生成されます。
- **マルチ・テーブル・インサート :** Oracle9i Warehouse Builder では、ターゲット・データベースが Oracle9i Database である場合に、Oracle9i Database 機能を利用して、マルチ・テーブル・インサート文が生成されます。これにより、マッピングを最適化して、1 つの操作で複数の表にデータを挿入できます。
- **テーブル・ファンクション :** Oracle9i Warehouse Builder では、ターゲット・システムのロード時にパフォーマンスを改善できるようにテーブル・ファンクション演算子が導入されました。一連の入力行を操作し、可能な限り異なるカーディナリティの別の一連の行を返すカスタム・コードを開発する場合に、この演算子を使用します。従来のファンクションとは異なり、テーブル・ファンクションでは物理表のように問合せ可能な一連の行が出力されます。

フラット・ファイル・サポートの拡張

- **ターゲットとしての非バインドのフラット・ファイル:** このリリースでは、マッピングの作成時に、新しい非バインドのフラット・ファイル・オブジェクトを作成できます。Oracle9i Warehouse Builder では、指定のロケーションに、新しいカンマ区切りのシングル・レコード・タイプのフラット・ファイルが作成されます。この機能により、リレーショナル・オブジェクトの内容をフラット・ファイルに簡単にロードできます。
- **フラット・ファイルのアウトバウンド調整:** アウトバウンド調整により、マッピング・フラット・ファイルから新しいリポジトリ・オブジェクトを作成できます。この結果、フラット・ファイルがリポジトリにとって新規である場合、新しいカンマ区切りファイルが指定のロケーションに作成されます。この機能により、リレーショナル・オブジェクトの内容をフラット・ファイルに即座にダンプできます。
- **デリミタ付きファイルの論理レコード:** フラット・ファイル・サンプル・ウィザードのユーザー・インタフェースが改善され、デリミタ付きファイルの論理レコードを定義できるようになりました。
- **位置ベースのマスター・ディテールのロード:** 追加のマッピング演算子を使用すると、位置ベースのマスター・ディテール・フラット・ファイルを簡単にロードできます。
- **SQL プロパティの拡張:** Oracle9i Warehouse Builder にインポートするフラット・ファイルの SQL プロパティを指定できます。これにより、フラット・ファイルの各フィールドの SQL プロパティ値を事前に定義できます。したがって、フラット・ファイル・ソースをリレーショナル・ターゲットにマッピングする場合、ターゲットの列は、デフォルトでこれらの事前に定義された SQL プロパティ値になります。これらの値は、リレーショナル・ターゲットの列を構築する場合や、外部表の列を作成する場合に使用されます。

マッピング・エディタの拡張

- **マッピング・ユーザー・インタフェース:** 新しい一連のプロパティ・タブを使用して、マッピング演算子や属性プロパティを迅速に作成および編集できます。
- **ピボット演算子とアンピボット演算子:** このリリースから、ピボット演算子やアンピボット演算子をマッピングに追加できます。ピボット演算子を使用すると、単一行の属性を複数行に変換できます。アンピボット演算子では、複数の入力行が 1 つの出力行に変換されます。
- **Name and Address 演算子の拡張:** Name and Address 演算子が拡張され、新しい入力ロールと出力属性が追加されました。United States Postal Service Code Accuracy Support System (CASS) レポートも、このリリースからサポートされます。

表記規則

このマニュアルでは、Windows NT、Windows 2000 および Windows XP オペレーティング・システムを総称して Windows と記載します。Oracle9i Database の SQL*Plus インタフェースは、SQL と記載する場合があります。

例の中では、特に記載がない限り、各行末に暗黙の改行があります。入力行末では [Return] キーを押す必要があります。

このマニュアルでは、次の表記規則も使用します。

表記規則	意味
.	例の中の縦の省略記号は、その例に直接関係のない情報が省略されていることを示します。
...	文またはコマンド中の横の省略記号は、その例に直接関係のない文やコマンドの一部が省略されていることを示します。
太字テキスト	テキスト中の太字は、インタフェース・ボタンまたはリンクを示します。太字は、主題を強調する目的でも使用します。
イタリック・テキスト	イタリック・テキストは、新出用語に使用します。イタリック・テキストは、重要な概念を強調する目的でも使用します。
Unicode テキスト	Unicode テキストは、コード自体、ファイルのディレクトリや名前、リテラル・コマンドを示します。
イタリックの Unicode テキスト	イタリックの Unicode テキストは、ユーザーが値を指定するパラメータを示します。
[]	大カッコは、1 つを選択するか、選択しなくてもよい任意の句を囲みます。

関連資料

次のマニュアルがあります。

- 『Oracle9i Warehouse Builder インストレーションおよび構成ガイド』
- 『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle9i Warehouse Builder トランスフォーメーション・ガイド』
- 『Oracle9i Warehouse Builder スクリプト・リファレンス』
- 『Oracle9i Warehouse Builder リリース・ノート』
- 『Oracle9i データ・ウェアハウス・ガイド』

Oracle9i Warehouse Builder インストール要件

この章では、Oracle9i Warehouse Builder のインストールに必要なハードウェアおよびソフトウェアの要件について説明します。この章では、次の項目について説明します。

- [Oracle9i Warehouse Builder のインストールのクイック・ステップ](#) (1-2 ページ)
- [Oracle9i Warehouse Builder のインストール・コンポーネントの概要](#) (1-4 ページ)
- [ハードウェア要件](#) (1-8 ページ)
- [動作環境のソフトウェア要件](#) (1-8 ページ)
- [Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのソフトウェア要件](#) (1-12 ページ)
- [動作要件](#) (1-13 ページ)
- [共存 : ORACLE_HOME に関する考慮事項](#) (1-13 ページ)
- [インストール準備作業](#) (1-14 ページ)
- [Oracle Universal Installer について](#) (1-19 ページ)

1.1 Oracle9i Warehouse Builder のインストールのクイック・ステップ

このインストール手順の概略は、Oracle9i Warehouse Builder のインストールの上級者向けです。Oracle9i Warehouse Builder をインストールした経験があり、使用しているシステムのハードウェアおよびソフトウェアがすでに Oracle9i Warehouse Builder のインストール要件を満たしている場合は、この項の手順に従い、このマニュアルの他の部分は参照用のみに使用してかまいません。

注意： インストールのクイック・ステップは、初めてインストールする方にはお薦めしません。Oracle9i Warehouse Builder のインストール経験が十分でない場合は、この章全体を読んで、使用しているシステムが Oracle9i Warehouse Builder のインストール要件を満たしていることを確認して、第 2 章「[Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのインストール](#)」に進んで、適切なインストール方法を選択してください。

この項では、インストール手順について簡単に説明します。この章の残りの部分では、Oracle9i Warehouse Builder を正常にインストールするための、システムおよび環境の要件について説明します。各パラメータの詳細情報や、オプションのコンポーネントのインストール方法については、第 2 章「[Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのインストール](#)」のインストールに関する詳細な手順を参照してください。

Oracle9i Warehouse Builder のインストール手順の概略：

ステップ 1. Oracle Universal Installer での「OWB Design Time Install」の実行：

1. CD をマウントするか、ソフトウェアをダウンロードしている場合は `setup.exe` を実行します。
2. ソース・ファイルのロケーションと、ORACLE_HOME のインストール先を指定します。
3. 「インストール・タイプ」で「OWB Design Time Install」を選択して、Oracle Universal Installer の指示に従います。

ステップ 2. Repository Assistant での Design Repository のインストール：

1. Oracle9i Warehouse Builder のプログラム・グループから Repository Assistant を起動します。
2. インストール先のシステムの接続情報を入力します。ここで指定するユーザー名には、SYSDBA 権限が必要です。
3. 新規の Oracle9i Warehouse Builder Design Repository を作成します。
4. 新規の Design Repository スキーマのユーザー名とパスワードを入力し、Repository Assistant の指示に従います。

ステップ 3. Oracle9i Warehouse Builder Design Browser Client の有効化:

1. 使用している Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リストに「LOCALHOST」を追加します。
2. Oracle9i Warehouse Builder Design Repository と同じホスト上で、データベースとともにインストールされた Oracle HTTP Server が起動していることを確認します。
3. 各 Oracle9i Warehouse Builder Design Repository を指すデータベース・アクセス記述子を 1 つ追加します。各データベース・アクセス記述子は、対象の Design Repository と同じ名前にする必要があります。

`http://hostname:port/` に接続します。

`port` は、UNIX プラットフォームの場合は 7777、Windows プラットフォームの場合は 80 がデフォルトであり、インストール中に指定することもできます。同じホスト上に Oracle HTTP Server が複数インストールされている場合、通常は、インストール数が 1 つ増えるごとに 1 ずつ、ポート番号が大きくなります。詳細は、Oracle HTTP Server のドキュメントを参照してください。

「Mod_plsql Configuration Menu」→「ゲートウェイ Database Access Descriptor 設定」→「デフォルトの追加（空白構成）」を選択します。

「Database Access Descriptor 名」に入力します。Oracle9i Warehouse Builder Design Repository スキーマ名を使用します。「データベース接続情報」で、Design Repository があるスキーマのユーザー名とパスワードを入力します。「Oracle 接続文字列」で、Oracle9i Warehouse Builder Design Repository インスタンスを指す `HOST:PORT:SID` を入力します。その他のフィールドは空白のままにします。

ステップ 4. Oracle Universal Installer での「OWB Server Side Install」の実行:

1. CD をマウントするか、ソフトウェアをダウンロードしている場合は `setup.exe` を実行します。
2. ソース・ファイルのロケーションと、ORACLE_HOME のインストール先を指定します。
3. 「インストール・タイプ」で「OWB Server Side Install」を選択して、Oracle Universal Installer の指示に従います。

ステップ 5. Runtime Assistant でのランタイム・オブジェクトのインストール:

1. Oracle9i Warehouse Builder のプログラム・グループから Runtime Assistant を起動します（Oracle Universal Installer が終了すると、自動的に起動します）。
2. ランタイム・オブジェクトのインストール先のシステムの接続情報を入力します。ここで指定するユーザー名には、SYSDBA 権限が必要です。
3. 「Runtime Repository」を選択します。「新規 Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository の作成」を選択します。次に「新規ユーザ・スキーマを作成し、そこにインストール」を選択して、Runtime Assistant の指示に従います。

- 4. Runtime Repository のインストールが終了した後、「新規 Oracle9i Warehouse Builder ターゲット・スキーマの作成」を選択して、Runtime Assistant の指示に従います。

ステップ 6. Design Browser および Runtime Audit Browser 用の Web ブラウザの構成：

- 1. 使用している Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リストに「localhost」を追加します。
- 2. Web ブラウザのキャッシュ管理を構成します。

1.2 Oracle9i Warehouse Builder のインストール・コンポーネントの概要

1.2.1 Oracle9i Warehouse Builder について

Oracle9i Warehouse Builder は、全社規模のデータ・ウェアハウスやデータ・マートの設計、実装および管理を目的とした統合システムです。Oracle9i Warehouse Builder は、独自のデータ・ウェアハウスを作成し、既存の Oracle 製品や Oracle 以外のデータ・ソースからそのデータ・ウェアハウスに移入するためのフレームワークを提供します。Oracle9i Warehouse Builder を使用して、データ・ウェアハウスの論理モデルを作成し、作成したデータ・ウェアハウスに対してデータの抽出、変換およびロードを実行するコードを生成できます。

Oracle9i Warehouse Builder のアーキテクチャは、2-3 ページの図 2-1 に示すコンポーネントで構成されます。この図の詳細は、2-2 ページの第 2.1.1 項「Oracle9i Warehouse Builder のアーキテクチャ・コンポーネント」にあります。

1.2.2 Oracle9i Warehouse Builder のインストール・コンポーネント

Oracle9i Warehouse Builder の完全な稼動環境には、表 1-1 に示すソフトウェアおよびコンポーネントが含まれます。

表 1-1 Oracle9i Warehouse Builder 環境

ソフトウェア	コンポーネント
Oracle R8.1.7 または Oracle9i Database (必須)	Oracle9i Database サーバー (Oracle XML ツールキット・オプションを含む) Oracle Agent TNS Listener
Oracle HTTP Server (オプション)	Oracle9i Warehouse Builder Design Browser Client

表 1-1 Oracle9i Warehouse Builder 環境 (続き)

ソフトウェア	コンポーネント
Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) (オプション)	Oracle9iAS Portal
	Oracle HTTP Server
	XML Developer's Kit
	OC4J
Oracle9i Warehouse Builder (必須)	Oracle9i Warehouse Builder Client
	Repository Assistant
	Runtime Assistant
	Browser Assistant
Oracle Enterprise Manager (OEM) (オプション)	Oracle9i Warehouse Builder Runtime Platform Service
	Oracle Management Server (OMS)
	Client Console
	WEB Console (オプション)

これらのコンポーネントは、Oracle Universal Installer (OUI) を使用して任意の順番でインストールできます。インストール時の推奨事項は次のとおりです。

- 該当するインストール・ガイドに記載された手順に従って、すべての製品をインストールしてください。このガイドは、Oracle9i Warehouse Builder のインストール手順を説明するものであり、Oracle9i Warehouse Builder 以外のソフトウェアに関しては、インストールの際の一般的なガイドラインのみが記載されています。詳細は、各製品のインストール・ガイドを参照してください。
- システム、ポート、ORACLE_HOME およびサービス名は、各自のインストール要件に合わせて必ず変更してください。
- Oracle9i Warehouse Builder Design Browser および Runtime Audit Browser を Oracle9iAS に統合する場合に、これらのいずれかのブラウザのデフォルトの Design Repository または Runtime Repository をインストール時に登録するには、Oracle9i Warehouse Builder Browser Assistant を最後に実行してください。

1.2.2.1 Oracle9i Database または Oracle8i R8.1.7

Oracle9i Warehouse Builder Design Repository、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository、およびオプションとして OEM リポジトリをインストールするには、Oracle9i Database または Oracle8i R8.1.7 が必要です。

Oracle9i Warehouse Builder Design Client または Runtime Audit Browser を使用するには、次の作業が必要です。

- Oracle XML ツールキット・オプションを含めた、Oracle9i Database をインストールします。Oracle 8.1.7 または Oracle9i リリース 2 (9.0.2) に付属の XML ツールキットを使用してください。Oracle9i リリース 1 (9.0.1) に付属の XML ツールキットは使用しないでください。
- Oracle9i Database サーバーと同じホスト上で、Oracle HTTP Server をインストールおよび構成します。

注意： 通常、Oracle9iAS は Oracle Database サーバーと同じインスタンスにはインストールされません。ただし、Oracle9i Warehouse Builder Design Browser または Runtime Audit Browser を Oracle9iAS に統合する場合は、ブラウザ・スキーマが Portal (Oracle9iAS) インスタンスに存在する必要があります。

1.2.2.2 Oracle9i Application Server (オプション)

Oracle9i Warehouse Builder Design Brower または Runtime Audit Browser をアプリケーション・サーバー上で実行する場合に、Oracle9i Application Server (Oracle9iAS) をインストールします。Oracle9iAS の必須コンポーネントは次のとおりです。

- Oracle9iAS Portal
- Oracle Container for J2EE (OC4J) - Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser の場合のみ
- XML Developer's Kit

Oracle9i Warehouse Builder Design Browser または Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser を統合する場合にのみ、これらのコンポーネントが必要になります。Design Browser を使用すると、メタデータの表示やメタデータ Web レポートの実行ができます。Runtime Audit Browser を使用すると、ランタイム監査結果を表示できます。

Oracle9iAS と、Design Brower および Runtime Audit Browser の統合は、オプションです。Oracle9i Warehouse Builder には、クライアント・バージョンの Design Browser および Runtime Audit Browser もあります。これらのクライアント・バージョンの Oracle9i Warehouse Builder Design Browser および Runtime Audit Browser は Oracle9i Warehouse Builder Design Repository に含まれ、必要なセットアップ手順はわずかです。

1.2.2.3 Oracle9i Warehouse Builder Client

Oracle9i Warehouse Builder Client ソフトウェアには、クライアント側のリポジトリおよびブラウザが含まれます。インストールの際は、Oracle9i Warehouse Builder Design Repository、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository および Oracle9i Warehouse Builder Browser 表をデータベースに作成できます。

Oracle9i Warehouse Builder Client は、次のツールで構成されます。

- **Design Client:** 後でランタイムに配布する ETL プロセスの設計に使用するツール。Design Client には、次のツールが含まれます。
 - Repository Assistant:** Oracle9i Warehouse Builder Design Repository を作成できます。
 - Runtime Assistant:** Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository を作成できます。
 - Browser Assistant:** Oracle9iAS Metabase Repository に Oracle9i Warehouse Builder Browser 表を作成できます。これはオプションです。
 - Oracle Metabase (OMB) Plus:** Graphical User Interface (GUI) を使用せずに、スクリプト・コマンドによって Oracle9i Warehouse Builder の機能を使用できます。
- **Design Browser Client:** Design Repository でのレポート作成に使用するツール。クライアント・バージョンは、Oracle9iAS に関係なく構成できます。Oracle9iAS に統合しない場合は、Design Browser Client に特別にインストールする必要はありません。Oracle9i Warehouse Builder Design Time をインストールするときに自動的にインストールされます。
- **Runtime Audit Browser Client:** Runtime Repository でのレポート作成に使用するツール。クライアント・バージョンは、Oracle9iAS に関係なくインストールできます。Runtime Audit Browser Client に特別にインストールする必要はありません。Oracle9i Warehouse Builder Design Time をインストールするときに自動的にインストールされます。

1.2.2.4 (オプション) Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow

Oracle Enterprise Manager (OEM) ではジョブのスケジュール、Oracle Workflow (OWF) ではジョブ依存性の管理を行うことができます。OEM Change Management Pack は、データ・ウェアハウスのライフ・サイクル・マネジメントにも使用されます。このパックは、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository Assistant を実行するときに、Runtime Repository の一部としてインストールされます。

1.3 ハードウェア要件

Oracle9i Warehouse Builder Design Time および Oracle9i Warehouse Builder Server Side コンポーネントをインストールするには、表 1-2 の要件を満たす必要があります。

表 1-2 Oracle9i Warehouse Builder ハードウェア要件

インストールの タイプ	ディスク 領域	メモリー	ページ・ファイル・サイズ、 TMP またはスワップ領域
Windows 上の Design Time コンポー ネント	503MB	384MB	Windows 上の Design Time とラ ンタイムの合計： 384MB
Windows 上のランタイム・コンポー ネント	390MB	256MB	Windows 上の Design Time とラ ンタイムの合計： 384MB
UNIX 上の Design Time コンポーネ ント	694MB	384MB	UNIX 上の Design Time とラン タイムの合計： 500MB
UNIX 上のランタイム・コンポーネ ント	586MB	256MB	UNIX 上の Design Time とラン タイムの合計： 500MB

必要なメモリーは、実行されている機能とユーザー数によって増加します。十分なスワップ領域があることも確認してください。

1.4 動作環境のソフトウェア要件

この項では、Oracle9i Warehouse Builder の動作が保証された各オペレーティング・システム
のソフトウェア要件について説明します。この項には次の項目があります。

- [Windows 動作環境のソフトウェア要件](#) (1-9 ページ)
- [Solaris 動作環境のソフトウェア要件](#) (1-9 ページ)
- [HP-UX 動作環境のソフトウェア要件](#) (1-11 ページ)
- [Linux 動作環境のソフトウェア要件](#) (1-11 ページ)
- [AIX 動作環境のソフトウェア要件](#) (1-12 ページ)

表 1-3 では、Oracle9i Warehouse Builder をインストールする際の、Windows 動作環境のソ
フトウェア要件を記載します。

表 1-3 Windows 動作環境のソフトウェア要件

ソフトウェア	要件
Windows 動作環境	■ Microsoft Windows NT 4.0 (Service Pack 6 以上) ■ Microsoft Windows 2000 ■ Microsoft Windows XP Professional Edition

表 1-4 では、Oracle9i Warehouse Builder をインストールする際の、Solaris 動作環境のソフトウェア要件を記載します。Solaris 動作環境のパッチは、次の URL からダウンロードできます。

<http://sunsolve.sun.com>

表 1-4 Solaris 動作環境のソフトウェア要件

ソフトウェア	要件
Solaris 2.6	■ j2sdk-1_3_1_02-solsparc-5_6_patch.tar ■ Linker パッチ : 107733-09 以上 ■ /usr/lib/libthread.so.1 パッチ : 105568-22 以上 ■ libaio、libc、wtachmalloc パッチ : 105210-38 以上 ■ X Input & Output Method パッチ : 106040-16 以上 ■ Linker パッチ : 105490-07 以上 ■ OpenWindows 3.6: Xsun パッチ : 105633-56 以上 (このパッチはアジアの各ロケールで必要) ■ 中国語 TrueType フォント : 106409-01 以上 (このパッチはアジアの各ロケールで必要) ■ SunOS 5.6: ssJDK1.2.1_03 が ISO8859-01 ロケールで致命的エラーにより失敗 : 108091-03 以上 (このパッチはアジアの各ロケールで必要) ■ CDE 1.2: libDtSvc パッチ (推奨) : 105669-10 以上 ■ Motif 1.2.7 ランタイム・ライブラリ・パッチ : 105284-41 以上 ■ SunOS 5.6: Kernal 更新パッチ : 105181-26 以上 ■ Patchadd および patchrm パッチ : 106125-11 以上 ■ /kernel/drv/mm パッチ : 106429-02 以上 ■ C++ 共有ライブラリ・パッチ : 105591-09 以上 ■ ユーロ・サポート・パッチ : 106842-09 以上および 106841-01 以上

表 1-4 Solaris 動作環境のソフトウェア要件（続き）

ソフトウェア	要件
Solaris 7 (2.7)	■ j2sdk-1_3_1_02-solsparc-5_7_patch.tar ■ Libthread パッチ : 106980-16 以上 ■ Kernal 更新パッチ : 106541-16 以上 ■ /kernal/fs/sockfs パッチ : 109104-04 以上 ■ /usr/lib/fs/fsck パッチ : 107544-03 以上 ■ Motif ランタイム・ライブラリ・パッチ : 107081-33 以上 ■ X Input & Output Method パッチ : 107636-07 以上 ■ OpenWindows 3.6.1 Xsun パッチ : 108376-24 以上 (このパッチはアジアの各ロケールが必要) ■ CDE ウィンドウ・マネージャ・パッチ : 107226-17 以上 ■ CDE 1.3 libDT ウィジェット・パッチ : 108374-05 以上 ■ zh.GBK ロケールの不良フォントの置換パッチ : 107153-01 以上 ■ Linker パッチ : 106950-13 以上 ■ C++ 共有ライブラリ・パッチ : 106300-09 以上および 106327-08 以上 ■ Open Windows 3.6.1 libX+Patch: 107656-07 以上 ■ CDE 1.3: dtsession パッチ : 107702-07 以上
Solaris 8 (2.8)	■ j2sdk-1_3_1_02-solsparc-5_8_patch.tar ■ Xsun パッチ : 108652-33 以上 ■ CDE dtwm パッチ : 108921-12 以上 ■ Motif 2.1 パッチ : 108940-24 以上 ■ Netscape が /usr/local/bin にない場合は、Netscape のパスを実行パスに含めます。

表 1-5 では、Oracle9i Warehouse Builder をインストールする際の、HP-UX 動作環境のソフトウェア要件を記載します。HP-UX 動作環境のパッチは、次の URL からダウンロードできます。

<http://www.hp.com>

表 1-5 HP-UX 動作環境のソフトウェア要件

ソフトウェア	要件
HP-UX 動作環境	■ HP-UX 11.0
オペレーティング・システムのパッチ	■ Sept 2002 QPK1100
ソフトウェア	■ Java 2 SDK 1.3.1 (PA-RISC 版) (Java 2 SDK 1.3.1 (PA-RISC 版) に必要な HP-UX 11.0 パッチは、 http://www.hp.com/products1/unix/java/java2/sdkrte1_3/index.html にあります)
実行可能ファイル (必須)	■ /usr/ccs/bin/make と、実行可能ファイル cc、ar および as が、Oracle Universal Installer を起動するユーザーの \$PATH に存在する必要があります。

表 1-6 では、Oracle9i Warehouse Builder をインストールする際の、Linux 動作環境のソフトウェア要件を記載します。Red Hat パッチは <http://www.redhat.com> からダウンロードできます。

表 1-6 Linux 動作環境のソフトウェア要件

ソフトウェア	要件
Linux 動作環境	■ Red Hat Enterprise Linux AS 2.1
オペレーティング・システムのパッチ	■ Errata 12 (Kernel 2.4.9-e.12)
実行可能ファイル (必須)	■ /usr/bin/make、/usr/bin/ar および /usr/bin/as と、 実行可能ファイル cc および gcc が、Oracle Universal Installer を起動するユーザーの \$PATH に存在する必要があります。 ■ \$PATH の中で、/usr/bin は /usr/local/bin の前に追加 します。
ソフトウェア	■ XFree86 Development 3.3.3.1 以上 ■ Open Motif 2.1.30 以上

表 1-7 では、Oracle9i Warehouse Builder をインストールする際の、AIX 動作環境のソフトウェア要件を記載します。

表 1-7 AIX 動作環境のソフトウェア要件

ソフトウェア	要件
AIX 動作環境	AIX 4.3.3 または AIX 5.1
オペレーティング・システムのパッチ	- AIX 4.3.3: Maintenance Level 09 および IY24568、IY25282、IY27614、IY30151。ダウンロード元： http://techsupport.services.ibm.com/server/fixes。 - AIX 5.1: AIX 5L リリース 5.1 ML01+（IY22854）、IY26778、IY28766、IY28949、IY29965、IY30150。ダウンロード元： http://techsupport.services.ibm.com/server/fixes。
実行可能ファイル（必須）	make、ar、ld、nm

1.5 Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのソフトウェア要件

表 1-8 では、Oracle9i Warehouse Builder の各コンポーネントのソフトウェア要件を記載します。

表 1-8 Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのソフトウェア要件

Oracle9i Warehouse Builder コンポーネント	ソフトウェア要件
Oracle9i Warehouse Builder Design Time（クライアント・ソフトウェア）	Oracle9i Warehouse Builder Repository には、Oracle8i R8.1.7 Enterprise Edition、Oracle9i Database Release 2（9.0.1.3）Enterprise Edition または Release 2（9.2.0）Enterprise Edition のいずれかが必要です。 注意：新しく作成された Oracle9i Warehouse Builder Repository でのみこのリリースを使用してください。このリリースの製品では、以前に作成した Oracle9i Warehouse Builder Repository を使用しないでください。
Oracle9i Warehouse Builder Server Side（Runtime Platform Service）	サーバー側の環境には、Oracle8i R8.1.7 Enterprise Edition、Oracle9i Database Release 2（9.0.1.3）Enterprise Edition または Release 2（9.2.0）Enterprise Edition のいずれかが必要です。インストール前に、付録 A「Oracle9i Database および Oracle8i R8.1.7 の準備」を参照して、Oracle9i Database で推奨される初期化パラメータを確認してください。

表 1-8 Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのソフトウェア要件 (続き)

Oracle9i Warehouse Builder コンポーネント	ソフトウェア要件
Oracle9i Warehouse Builder Design Browser Client	Oracle9i Warehouse Builder Design Browser Client の要件は、Web ブラウザをインストールしていること、および Design Repository をホスティングするデータベース・インスタンス上で Oracle HTTP Server を実行していることです。
Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser Client	Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser Client の要件は、Web ブラウザをインストールしていることです。
Oracle9i Warehouse Builder Design Browser (Oracle9i Application Server (Oracle9iAS) に統合する場合)	Design Browser と Oracle9i Application Server との統合はオプションです。統合する場合、Oracle9i Warehouse Builder Design Browser には Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) または Oracle Application Server 10g が必要です。
Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser (Oracle9i Application Server (Oracle9iAS) に統合する場合)	Runtime Audit Browser と Oracle9i Application Server との統合はオプションです。統合する場合、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser には Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) または Oracle Application Server 10g が必要です。

1.6 動作要件

Oracle9i Warehouse Builder に関する最新情報は、次の URL をご確認ください。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

1.7 共存 : ORACLE_HOME に関する考慮事項

この項では、1 つの ORACLE_HOME での Oracle 製品の共存に関する情報と、複数の Oracle 製品を 1 台のマシンにインストールする場合のガイドラインを提供します。ORACLE_HOME は、Oracle ソフトウェアのインストール先であるルート・ディレクトリです。

- Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 を新規の ORACLE_HOME にインストールします。
- Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 は、Oracle9i Database リリース 2 などの Oracle データベースと同じ ORACLE_HOME を共有できません。

- UNIX のみ : Oracle9i Warehouse Builder のインストール先であるマシン上に、すでに設定されている ORACLE_HOME がある場合は、1-16 ページの「[環境変数の設定 \(UNIX のみ\)](#)」を参照してください。
- Oracle9i Warehouse Builder を削除しても、パス `OWB_HOME¥owb¥j2ee¥owbb` が残っている場合は、owbb ディレクトリを削除します。
- Oracle9i Developer Suite (Oracle9iDS) リリース 2 (9.0.2) から Oracle Application Server 10g にアップグレードする場合は、次の点に注意してください。

Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) をインストールすると、Oracle9i Warehouse Builder が自動的にインストールされます。Oracle Application Server 10g のインストールには Oracle9i Warehouse Builder が含まれないため、新しいバージョンの Oracle9i Warehouse Builder を使用するには、個別にインストールする必要があります。

Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) は、Oracle Application Server 10g とは別の ORACLE_HOME にインストールする必要があります。これによって、Oracle9iDS の ORACLE_HOME が 2 つになります。Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) に含まれている Oracle9i Warehouse Builder を使用するか、または Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 を Oracle9iDS とは別の ORACLE_HOME にインストールすることができます。

1.8 インストール準備作業

Oracle9i Warehouse Builder をインストールする前に、『Oracle9i Warehouse Builder リリース・ノート』をお読みください。『Oracle9i Warehouse Builder リリース・ノート』は、Oracle9i Warehouse Builder CD-ROM に収録されています。最新のリリース・ノートおよびリリース・ノート補足資料は、次の Oracle Technology Network で入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp/>

Oracle9i Warehouse Builder のインストール準備作業は、次の項目に分類できます。

- [一般チェックリスト](#) (1-15 ページ)
- [ロケールの設定](#) (1-15 ページ)
- [環境変数の設定 \(UNIX のみ\)](#) (1-16 ページ)
- [UNIX アカウントおよびグループの作成 \(UNIX のみ\)](#) (1-17 ページ)
- [インストールに必要な情報](#) (1-19 ページ)

1.8.1 一般チェックリスト

- ❑ Windows NT、Windows 2000、Windows XP Professional を実行している場合は、ローカル・マシンの管理者グループのメンバーとしてシステムにログインしていることを確認します。
- ❑ UNIX では、Oracle Universal Installer の起動時に、root ユーザーとしてログインしていないことを確認します。root ユーザーとしてログインした場合は、Oracle9i Warehouse Builder を管理する権限が root ユーザーのみに与えられます。詳細は、第 1.8.4 項「UNIX アカウントおよびグループの作成」を参照してください。
- ❑ 次の環境変数が 1,024 文字以内であることを確認します。この制限を超えると、インストール中に「環境変数が長すぎます。」のようなエラーが生成されることがあります。

PATH

CLASSPATH

LD_LIBRARY_PATH (UNIX のみ)

SHLIB_PATH (HP-UX のみ)

- ❑ 他の開いているアプリケーションをすべて閉じます。

1.8.2 ロケールの設定

Oracle Universal Installer および Oracle9i Warehouse Builder Client は、マシンのロケールに依存します。

- Windows プラットフォームの場合、デフォルトのロケールは動作環境から継承されます。
- UNIX プラットフォームの場合、デフォルトのロケールは NLS_LANG の値によって初期化されます。

Oracle Universal Installer および Oracle9i Warehouse Builder Client では、現在のロケールで指定されている言語でインストーラのユーザー・インタフェースが表示されます。必ず、ロケールを設定してからインストーラを起動してください。

1.8.3 環境変数の設定（UNIX のみ）

この項で説明する作業は、UNIX プラットフォームでのみ必要です。

1.8.3.1 ORACLE_HOME

既存の ORACLE_HOME 内のソフトウェアと、Oracle9i Warehouse Builder との競合を避けるために、使用する環境で、ORACLE_HOME に対する参照をすべて削除する必要があります。その後、ORACLE_HOME 環境変数を設定します。

他の ORACLE_HOME との競合を避けるため、次の環境変数を編集し、既存の ORACLE_HOME の値を使用しないようにします。

- PATH
- CLASSPATH
- LD_LIBRARY_PATH
- SHLIB_PATH (HP-UX のみ)

ORACLE_HOME 環境変数を設定するには：

次のコマンドを使用します（*full_path* は、Oracle9i Warehouse Builder のインストール先のパスです）。

- C シェルの場合：prompt> setenv ORACLE_HOME *full_path*
- Korn シェルの場合：prompt> export ORACLE_HOME=*full_path*
- Bourne シェルの場合：prompt> ORACLE_HOME=*full_path*; export ORACLE_HOME

1.8.3.2 DISPLAY

DISPLAY 環境変数を設定すると、ローカルのワークステーションからリモートで Oracle Universal Installer を実行できます。

Oracle Universal Installer を実行するシステム上で、DISPLAY を、ローカルのワークステーションのシステム名または IP アドレスに設定します。

注意： PC X エミュレータが PseudoColor カラー・モデルまたは PseudoColor ビジュアルをサポートする場合は、PC X エミュレータを使用してインストールを実行できます。PseudoColor ビジュアルを使用するように PC X エミュレータを設定してから、インストーラを起動します。カラー・モデルまたはビジュアル設定を変更する方法については、X エミュレータのドキュメントを参照してください。

インストーラの起動時に「Failed to connect to server」、「Connection refused by server」または「Can't open display」のような Xlib エラーが表示される場合は、[表 1-9](#) に示すコマンドをローカルワークステーションで実行します。

表 1-9 Xlib エラー発生時に実行するコマンド

シェル・タイプ	インストーラを実行しているサーバー上	ワークステーション上
C シェル	prompt> setenv DISPLAY hostname:0.0	prompt> xhost +server_name
Bourne シェル	prompt> export DISPLAY= hostname:0.0	prompt> xhost +server_name
Korn シェル	prompt> export DISPLAY= hostname:0.0	prompt> xhost +server_name

1.8.3.3 TMP

Oracle Universal Installer では、インストール中、スワップ領域に一時ディレクトリが使用されます。Oracle9i Warehouse Builder をインストールするには、このディレクトリが[表 1-2](#) に示す環境要件を満たす必要があります。十分な領域がないと、インストールが失敗する可能性があります。インストーラでは TMP 環境変数がチェックされ、一時ディレクトリのロケーションが特定されます。この環境変数がない場合、インストーラでは /tmp ディレクトリが使用されます。

表 1-10 TMP 環境変数の設定方法

C シェル	Bourne/Korn シェル
prompt> setenv TMP full_path	prompt> export TMP= full_path

1.8.4 UNIX アカウントおよびグループの作成（UNIX のみ）

この項で説明する作業は、UNIX プラットフォームでのみ必要です。

1.8.4.1 Oracle Universal Installer インベントリの UNIX グループ名

オペレーティング・システムに含まれているユーティリティを使用して、oinstall という名前のグループを作成します。次に例を示します。

- Solaris では、admintool ユーティリティまたは groupadd ユーティリティを使用できます。
- HP-UX では、SAM ユーティリティを使用できます。
- Linux では、YaST2 ユーティリティを使用できます。
- AIX では、smit ユーティリティを使用できます。

これらのユーティリティの詳細は、使用しているオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

oinstall グループは、Oracle Universal Installer の oraInventory ディレクトリを所有します。インストールを実行する oracle ユーザー・アカウントでは、oinstall グループをプライマリ・グループにする必要があります。

1.8.4.2 Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウント

oracle アカウントは、使用しているシステムの Oracle ソフトウェアを所有する UNIX アカウントです。Oracle Universal Installer は、このアカウントから実行する必要があります。

表 1-11 に示すプロパティを使用して oracle アカウントを作成します。

表 1-11 Oracle アカウントのプロパティ

変数	プロパティ
ログイン名	アカウントにアクセスする名前を選択します。このドキュメントでは、この名前を oracle アカウントとします。
グループ識別子	oinstall グループ。
ホーム・ディレクトリ	他のユーザーのホーム・ディレクトリと一致するホーム・ディレクトリを選択します。oracle アカウントのホーム・ディレクトリは、ORACLE_HOME ディレクトリと同じにする必要はありません。
ログイン・シェル	C、Bourne、Korn のいずれかのシェルをデフォルトのシェルに指定できます。

Oracle ソフトウェアをインストールおよび管理する場合にのみ oracle アカウントを使用してください。Oracle Universal Installer に関係ない場合には決して使用しないでください。root は、oracle アカウントとして使用しないでください。

1.8.5 インストールに必要な情報

Oracle Universal Installer では、インストール画面が順番に表示されます。動作環境や、選択するインストール・オプションに応じて、表 1-12 に示す情報が必要です。

表 1-12 インストールに必要な情報

項目	インストールのタイプ	例
Oracle9i Warehouse Builder の ORACLE_HOME 名およびパス (詳細は 1-13 ページの「共存：ORACLE_HOME に関する考慮事項」を参照)	すべて (Windows および UNIX)	D:\¥Oracle9iWB または /private/oracle
UNIX グループ名	すべて (UNIX のみ)	oinstall

1.9 Oracle Universal Installer について

Oracle9i Warehouse Builder では、Oracle Universal Installer を使用して、コンポーネントがインストールされ、環境変数が構成されます。インストーラは、インストール手順を順に指示します。

インストーラには、次のタスクを実行する機能があります。

- 製品のインストール・オプションの表示
- 事前設定された環境変数および構成設定の検出
- インストール中の環境変数および構成の設定
- 製品の削除

1.9.1 インベントリ・ディレクトリ

マシン上で最初にインストーラを実行すると、Inventory ディレクトリまたは oraInventory ディレクトリが作成されます。インベントリ・ディレクトリには、インストーラによってマシンにインストールされた製品の記録とともに、その他のインストール情報も格納されます。以前に Oracle 製品をインストールしたことがある場合は、インベントリ・ディレクトリがすでに存在する場合があります。

- インベントリ・ディレクトリやその内容を削除したり、手動で変更したりしないでください。そのようなことをすると、インストーラでは、マシンにインストールされた製品を検索できなくなります。
- Windows の場合、Inventory ディレクトリのデフォルトのロケーションは ¥Program Files¥Oracle¥Inventory になります。

- Solaris および HP-UX の場合、`oraInventory` のロケーションは `/var/opt/oracle/oraInst.loc` に定義されます。
- Linux の場合、`oraInventory` のロケーションは `/etc/oraInst.loc` に定義されます。
- AIX の場合、`oraInventory` のロケーションは `/etc/oraInst.loc` に定義されます。
- 最新のログ・ファイルは `Inventory_location¥logs¥installActionsDATE_TIME.log` (Windows) または `oraInventory_location/logs/installActionsDATE_TIME.log` (UNIX) です。インストール・セッションのログ・ファイル名は、名前に日付と時間が付加されます。
- UNIX グループ名を指定すると、そのグループに、`oraInventory` ディレクトリに対する書込み権限が付与されます。他のグループがインストーラを実行する場合、そのグループでは、`oraInventory` ディレクトリに対する書込み権限が必要です。この権限がない場合、インストールが失敗します。

1.9.2 Oracle Universal Installer の起動

次の各手順に従って Oracle Universal Installer を起動し、Oracle9i Warehouse Builder をインストールします。

1.9.2.1 Windows ユーザーの場合

Oracle Universal Installer を起動するには：

1. Oracle9i Warehouse Builder CD-ROM を挿入します。
2. 使用しているマシンに自動実行機能がない場合は、CD-ROM のルート・ディレクトリで実行可能ファイル `setup.exe` を見つけます。`setup.exe` プログラムを使用して、インストーラを起動します。
3. 使用しているマシンに自動実行機能がある場合は、自動実行ウィンドウで Oracle9i Warehouse Builder のインストールが自動的に開始されます。

以降の手順は、[第 2 章「Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのインストール」](#)を参照してください。

1.9.2.2 UNIX ユーザーの場合

注意： root アカウントへのアクセス権が必要です。

動作環境で CD-ROM の自動マウントがサポートされていない場合は、Oracle9i Warehouse Builder のインストール CD-ROM を手動でマウントする必要があります。CD-ROM をマウントまたはアンマウントするには、root 権限が必要です。CD-ROM は、必ずアンマウントした後で、ドライブから取り出すようにしてください。

CD-ROM をマウントするには：

1. インストール CD-ROM をマウントします。

Oracle9i Warehouse Builder のインストール CD-ROM は、RockRidge 形式です。

次のうち、使用しているプラットフォームに該当する項をお読みください。

- [CD-ROM のマウント \(Solaris の場合\)](#) (1-21 ページ)
- [CD-ROM のマウント \(HP-UX の場合\)](#) (1-22 ページ)
- [CD-ROM のマウント \(Linux の場合\)](#) (1-22 ページ)

1.9.2.2.1 CD-ROM のマウント (Solaris の場合) Solaris Volume Management ソフトウェア (Solaris 動作環境にデフォルトでインストールされる) を使用している場合、CD-ROM は、ディスク・ドライブに挿入したときに、自動的に cdrom/Disk1 にマウントされます。

Solaris Volume Management ソフトウェアを使用していない場合は、CD-ROM を手動でマウントする必要があります。

Solaris で CD-ROM を手動でマウントするには：

1. Oracle9i Warehouse Builder CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインします。
3. CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

```
prompt> mkdir mount_point
```

4. マウント・ポイント・ディレクトリに CD-ROM ドライブをマウントします。

```
prompt> mount options device_name mount_point
```

次の例では、Solaris Volume Management ソフトウェアを使用せずに、CD-ROM が手動で /cdrom にマウントされます。root ユーザーとして、次のコマンドを実行します。

```
prompt> mkdir /cdrom
prompt> mount -r -F hsfs device_name /cdrom
```

5. root ユーザーとしてログアウトします。
6. 1-24 ページの「[Oracle Universal Installer の実行](#)」に進みます。

1.9.2.2.2 CD-ROM のマウント (HP-UX の場合) 次の手順に従って、HP-UX で CD-ROM をマウントします。

HP-UX で CD-ROM を手動でマウントするには:

1. 次のコマンドを使用して、device_file を特定します。

```
prompt> ioscan -fun -C disk
```

2. CD-ROM デバイスの /etc/pfs_fstab ファイルにエントリが存在しない場合は、エントリを追加する必要があります。root ユーザーとして、システム・エディタを使用して、次の書式に従って /etc/pfs_fstab ファイルに行を追加します。

```
device_file mount_point filesystem_type translation_method
```

前述の書式では、最初のエントリは CD-ROM デバイス、2 番目のエントリはマウント・ポイントを示し、3 番目のエントリは、マウントされる CD-ROM が Rockridge 拡張機能を持つ ISO9660 形式であることを示しています。たとえば、CD-ROM デバイスのパスが /dev/dsk/c4t2d0 である場合、次のように入力します。

```
/dev/dsk/c4t2d0 /SD_CDROM pfs-rrip xlat=unix 1 0
```

3. root ユーザーとしてログインします。
4. 次のコマンドを入力します。

```
prompt> nohup /usr/sbin/pfs_mountd &
prompt> nohup /usr/sbin/pfsd &
```
5. Oracle9i Warehouse Builder CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入し、次のコマンドを入力して CD-ROM をマウントします。

```
prompt> /usr/sbin/pfs_mount /SD_CDROM
```

6. root ユーザーとしてログアウトします。
7. 1-24 ページの「[Oracle Universal Installer の実行](#)」に進みます。

1.9.2.2.3 CD-ROM のマウント (Linux の場合) 自動マウント・ソフトウェアを使用している場合、Disk 1 を CD-ROM ドライブに挿入したときに、CD-ROM は自動マウント構成で指定されているディレクトリに自動的にマウントされます。

自動マウント・ソフトウェアを使用していない場合は、CD-ROM を手動でマウントする必要があります。

CD-ROM を手動でマウントするには:

1. Oracle9i Warehouse Builder CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインします。
3. 必要に応じて、次のコマンドを使用して CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

```
prompt> mkdir mount_point
```

4. マウント・ポイント・ディレクトリに CD-ROM ドライブをマウントします。

```
prompt> mount options device_name mount_point
```

次の例では、Linux の自動マウント・ソフトウェアを使用せずに、CD-ROM が手動で /cdrom にマウントされます。root ユーザーとして、次のコマンドを実行します。

```
prompt> mkdir /cdrom
prompt> mount -t iso9660 device_name /cdrom
```

5. root ユーザーとしてログアウトします。
6. 1-24 ページの「[Oracle Universal Installer の実行](#)」に進みます。

1.9.2.2.4 CD-ROM のマウント (AIX の場合) Disk 1 をマウントしてインストールを開始します。他のディスクは、指示に従ってマウントします。次の手順に従って、Oracle9i CD-ROM を手動でマウントします。

CD-ROM を手動でマウントするには:

1. Oracle9i CD-ROM の Disk 1 を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインし、CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリがない場合は、次のコマンドを使用して作成します。

```
$ su root
# mkdir cdrom_mount_point_directory
```

3. 次のコマンドを使用して device_name を特定します。

```
# lsdev -Cc cdrom
```

次のように出力されます。

```
cd0 Available 10-60-00-4, 0 SCSI Multimedia CD-ROM Drive
```

4. マウント・ポイント・ディレクトリに CD-ROM ドライブをマウントし、次のコマンドを使用して root アカウントを終了します。

```
# mount options device_name cdrom_mount_point_directory
# exit
```

例 1-1 では、AIX CD-ROM を手動でマウントする方法を示します。

例 1-1 AIX CD-ROM の手動マウント

```
$ su root
# mkdir /cdrom
# mount -rv cdrfs /dev/cd0 /cdrom
# exit
```

前述の出力では、/dev/cd0 は CD-ROM デバイスです。

1.9.2.3 Oracle Universal Installer の実行

インストール CD-ROM をマウントした後、CD-ROM から Oracle Universal Installer を実行できます。CD-ROM ディレクトリが現行のディレクトリとなっている状態では、インストーラを実行しないでください。この状態でインストーラを実行すると、指示があっても次の CD-ROM をアンマウントできなくなります。

注意： Oracle Universal Installer の起動時には、root ユーザーとしてログインしていないことを確認します。root ユーザーとしてログインした場合は、Oracle9i Warehouse Builder を管理する権限が root ユーザーのみに与えられます。

CD-ROM から Oracle Universal Installer を実行するには：

1. oracle ユーザーとしてログインします。
2. プロンプトで次のコマンドを入力して、インストーラを起動します。

```
mount_point/runInstaller
```

Oracle Universal Installer が起動します。これにより、Oracle9i Warehouse Builder をインストールできます。以降の手順は、第 2 章「Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのインストール」を参照してください。

Oracle9i Warehouse Builder コンポーネント のインストール

この章では、Oracle9i Warehouse Builder のクライアント・コンポーネントとサーバー・コンポーネントのインストール手順を説明します。第 1.1 項「[Oracle9i Warehouse Builder のインストールのクイック・ステップ](#)」では手順の概略を説明しましたが、この章では、インストール全体について手順を詳細に説明します。

注意： Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 にアップグレードする場合は、この章で説明するインストール手順を実行する前に第 3 章「[リリース 9.2 へのアップグレードとデータの移行](#)」をお読みください。

この章では、次の項目について説明します。

- [Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントとそのインストールの概要](#) (2-2 ページ)
- [ステップ 1. Oracle Universal Installer での「OWB Design Time Install」の実行](#) (2-8 ページ)
- [ステップ 2. Repository Assistant での Design Repository のインストール](#) (2-10 ページ)
- [ステップ 3. Oracle9i Warehouse Builder Design Browser Client の有効化](#) (2-16 ページ)
- [ステップ 4. Oracle Universal Installer での「OWB Server Side Install」の実行](#) (2-17 ページ)
- [ステップ 5. Runtime Assistant でのランタイム・オブジェクトのインストール](#) (2-20 ページ)
- [ステップ 6. Design Browser および Runtime Audit Browser 用の Web ブラウザの構成](#) (2-28 ページ)
- [ステップ 7. \(オプション\) Oracle9iAS への Oracle9i Warehouse Builder Browser の統合](#) (2-30 ページ)
- [ステップ 8. \(オプション\) サードパーティの Name and Address データのインストール](#) (2-44 ページ)

2.1 Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントとそのインストールの概要

この項では、Oracle9i Warehouse Builder のコンポーネントとそのインストールの概要を説明します。

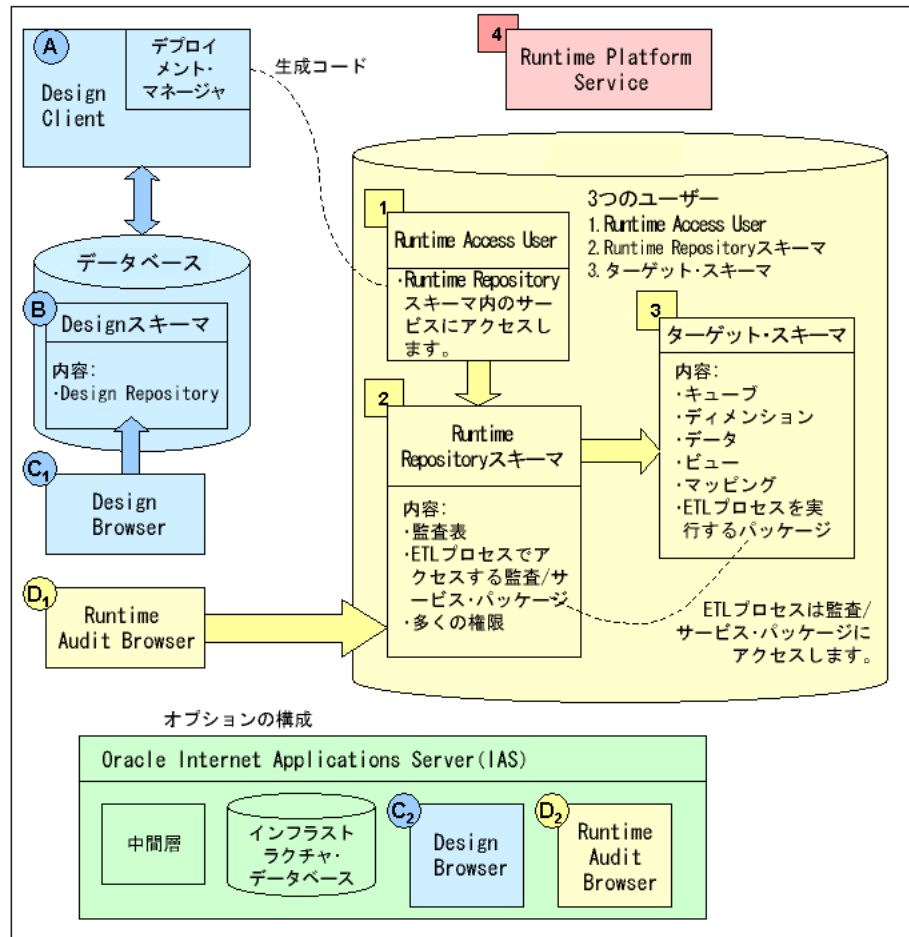
2.1.1 Oracle9i Warehouse Builder のアーキテクチャ・コンポーネント

Oracle9i Warehouse Builder のアーキテクチャは、[図 2-1](#) に示すコンポーネントで構成されます。この図には、次のものが示されています。

- ラベル「A」の四角形は、Design Client を表します。これには、デプロイメント・マネージャが含まれます。デプロイメント・マネージャで生成されたコードが Runtime Access User（ラベル「1」）に渡されます。
- Design スキーマ（ラベル「B」）を含むデータベースと Design Client との通信は双方向です。Design スキーマに含まれる Design Repository は、Design Browser Client（ラベル「C₁」）からの通信を受信します。
- 別のデータベースには 3 つのユーザーが含まれています。これらは、Runtime Access User（ラベル「1」）、Runtime Repository スキーマ（ラベル「2」）、ターゲット・スキーマ（ラベル「3」）です。
- Runtime Repository スキーマでは、多くの（ほぼすべての）DBA 権限が必要です。Runtime Repository スキーマを誤って使用しないように、権限はないものの、複数のユーザーが Runtime Repository を使用できるようにする別のユーザー（Runtime Access User）を作成します。Oracle9i Warehouse Builder のコンテキストでは、Runtime Access User は、オブジェクトと ETL プロセスを配布および実行できますが、SQL*Plus からは、Runtime Access User に属していないオブジェクトが見えません。したがって、Runtime Access User はセキュリティ対策に使用できます。Runtime Access User は、デプロイメント・マネージャから生成されたコードを受け取り、Runtime Repository スキーマ内のサービスにアクセスします。
- Runtime Repository スキーマは、ターゲット・スキーマでアクセスされる監査表および監査 / サービス・パッケージを所有します。Runtime Repository スキーマは、ターゲット・スキーマ内の各種ターゲットとの接続を管理する、システム内の中心的なユーザーです。
- また、Runtime Audit Browser Client（ラベル「D₁」）も、ランタイム・レポートを有効にするために Runtime Repository スキーマと通信します。
- 一方、ターゲット・スキーマには、Runtime Repository スキーマ内の監査 / サービス・パッケージにアクセスする ETL プロセスを実行するパッケージが含まれます。ターゲット・スキーマは、実際のターゲットであり、ターゲット・データと、キューブ、ディメンション、ビュー、マッピングなどのデータ・オブジェクトを含みます。複数のターゲットを 1 つの Runtime Repository に関連付けることができます。実行情報や配布情報など、このターゲットに関連するすべての情報が、Runtime Repository に格納されます。

- 3つのユーザーをホスティングするデータベースに加え、Runtime Platform Service（ラベル「4」）も実行されます。Design Browser や Runtime Audit Browser を Oracle9iAS に統合する、オプションのブラウザ構成も、他のコンポーネントとは別に描かれています。Design Browser（ラベル「C₂」）と Runtime Audit Browser（ラベル「D₂」）は、中間層およびインフラストラクチャ・データベースとともに、Oracle9iAS にインストールされます。

図 2-1 Oracle9i Warehouse Builder のアーキテクチャ



2.1.2 Oracle Universal Installer でインストールされるコンポーネント

Oracle9i Warehouse Builder の Oracle Universal Installer には、「OWB Design Time Install」、「OWB Server Side Install」、「Custom」の3つのオプションがあります。通常、「OWB Design Time Install」と「OWB Server Side Install」は、別々のマシンにインストールされます。両方のコンポーネントを同じマシンにインストールする場合は、別々の ORACLE_HOME にインストールする必要があります。

2.1.2.1 OWB Design Time Install

「OWB Design Time install」には次のコンポーネントが含まれます。

- Oracle9i Warehouse Builder Design Client (図 2-1 の「A」)。
- Design Browser Client (図 2-1 の「C₁」)。Design Browser Client バージョンは、Oracle9iAS に依存せず、特別な構成手順なしで Design Time Install 時に自動的にインストールされます。第 2.8.1 項「[Design Browser と Runtime Audit Browser を Oracle9iAS に統合する理由](#)」では、統合の利点について説明します。
- Runtime Audit Browser Client (図 2-1 の「D₁」)。Runtime Audit Browser Client バージョンは、Oracle9iAS に依存せず、特別な構成手順なしで Design Time Install 時に自動的にインストールされます。第 2.8.1 項「[Design Browser と Runtime Audit Browser を Oracle9iAS に統合する理由](#)」では、統合の利点について説明します。
- MDL File Upgrade Utility
- Oracle9i Warehouse Builder Oracle Metabase (OMB) Plus
- インストール後に他のアーキテクチャ・コンポーネントを作成できるようにするアシスタント：

Repository Assistant: Design Repository (図 2-1 の「B」)を作成できます。

Browser Assistant (オプション) : Design Browser を Oracle9iAS (図 2-1 の「C₂」)に統合できます。統合の利点は、第 2.8.1 項「[Design Browser と Runtime Audit Browser を Oracle9iAS に統合する理由](#)」を参照してください。

- Oracle9i Warehouse Builder Public API

この項で説明するクライアント・インストールを完了すると、次の Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントを起動できます。

Oracle9i Warehouse Builder Browser Assistant メタデータの表示、Web レポートの実行、およびメタデータでの系統および影響分析の実行のために、Oracle9i Warehouse Builder Design Browser を構成できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」→「Windows」→「OWB_HOME」(Oracle9i Warehouse Builder のインストール先として指定したディレクトリ名)→「Oracle9i Warehouse Builder」→「OWB Browser Assistant」を選択します。

- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`browsersst.sh` を実行します。

Oracle9i Warehouse Builder Client ソースの定義とターゲットおよび ETL プロセスの設計に使用するグラフィカル・インタフェースを提供します。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「Windows」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Client」 を選択します。
- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`owbclient.sh` を実行します。

Oracle9i Warehouse Builder Design Browser メタデータの表示、Web レポートの実行、およびメタデータでの系統および影響分析の実行のために、Oracle9i Warehouse Builder Design Browser Client を起動できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「Windows」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Design Browser」 を選択します。
- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`openDB.sh` を実行します。

Oracle9i Warehouse Builder MDL File Upgrade Utility 以前のバージョンの Oracle9i Warehouse Builder から Oracle9i Warehouse Builder にメタデータをアップグレードできます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「Windows」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB MDL File Upgrade Utility」 を選択します。
- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`mdlconvertui.sh` を実行します。

Oracle9i Warehouse Builder OMB Plus Oracle Metabase (OMB) Plus スクリプト・ユーティリティを起動できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「Windows」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB OMB Plus」 を選択します。
- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`OMBPlus.sh` を実行します。

Oracle9i Warehouse Builder Repository Assistant データ・ウェアハウスを記述するメタデータ定義を格納するため、Oracle9i Warehouse Builder Design Repository をデータベースに作成できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「Windows」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Repository Assistant」 を選択します。
- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`reposinst.sh` を実行します。

Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant 配布情報やランタイム監査 / エラー情報を格納および保守するため、Runtime Repository とターゲット・スキーマを作成できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「Windows」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Runtime Assistant」を選択します。
- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`runtimeinst.sh` を実行します。

Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser を起動できます。Runtime Audit Browser では、ETL ターゲットのロードおよびリフレッシュを行うジョブの実行時に取得した監査情報およびエラー情報について、レポートを実行できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「Windows」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Runtime Audit Browser」を選択します。
- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`openRAB.sh` を実行します。

Start Local RTP Service デスクトップ・マシンでローカルの Runtime Platform Service (図 2-1 の「4」) を起動できます。本来、Runtime Platform Service は、データベースから管理できるようにサーバー・マシンにインストールする必要があります。ただし、サーバー・マシンにアクセスできないというまれな状況では、このコマンドを使用して、デスクトップ・マシンで Runtime Platform Service を実行できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「Start Local RTP Service」を選択し、Runtime Repository への接続情報を指定します。
- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`local_service_login.sh -startup ORACLE_HOME` を実行します。

Start Oracle9i Warehouse Builder OC4J Instance Design Browser Client および Runtime Audit Browser Client に対してサーバーを起動できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「Windows」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「Start OWB OC4J Instance」を選択します。
- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`startOwbbInst.sh` を実行します。

Stop Local RTP Service デスクトップ・マシンで実行しているローカルの Runtime Platform Service (図 2-1 の「4」) を停止できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「Stop Local RTP Service」を選択し、Runtime Repository への接続情報を指定します。

- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`local_service_login.sh -closedown ORACLE_HOME` を実行します。

Stop Oracle9i Warehouse Builder OC4J Instance Design Browser Client および Runtime Audit Browser Client に対してサーバーを停止できます。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「Windows」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「Stop OWB OC4J Instance」を選択します。
- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix` に移動し、`stopOWBBInst.sh` を実行します。

2.1.2.2 OWB Server Side Install

「OWB Server Side Install」には次のコンポーネントが含まれます。

- **Runtime Platform Service** (図 2-1 の「4」)。Oracle9i Warehouse Builder の Name and Address コンポーネントが含まれます。ランタイム環境で何らかのアクティビティを実行するには、Runtime Platform Service をアクティブにする必要があります。Runtime Platform Service は、ネイティブ実行や、リモート実行のための Oracle Enterprise Manager へのコールを管理します。Runtime Platform Service は、データベース・ジョブによって起動されます。データベース・ジョブは、データベースの起動時に開始され、データベースのシャットダウン時にシャットダウンされます。
- **Runtime Assistant**。Runtime Access User (図 2-1 の「1」)、Runtime Repository スキーマ (図 2-1 の「2」)、ターゲット・スキーマ (図 2-1 の「3」) を作成できます。

2.1.2.3 Custom

「Custom」では、前述の 2 項であげたコンポーネントから、インストールするコンポーネントを選択できます。

2.1.3 SYSDBA ユーザーへのアクセス権

事前に、SYSDBA 権限を持つユーザーへのアクセス権が必要です。これは、Oracle9i Warehouse Builder の各 Assistant において、Oracle9i Warehouse Builder Design Repository または Runtime Repository コンポーネントをインストールするときに、SYSDBA 接続情報を入力する必要があるためです。

Oracle9i Warehouse Builder の Oracle9i パラメータ設定の詳細は、付録 A 「Oracle9i Database および Oracle8i R8.1.7 の準備」と Oracle9i Database サーバーのドキュメントを参照してください。SYSDBA 権限を持つユーザーへのアクセスで問題が発生した場合は、付録 D 「診断およびデバッグ」を参照してください。

2.2 ステップ 1. Oracle Universal Installer での「OWB Design Time Install」の実行

このステップでは、Oracle9i Warehouse Builder Design Client（2-3 ページの図 2-1 の「A」）をインストールします。

Design Time コンポーネントをインストールするには：

1. Oracle Universal Installer を起動します。1-19 ページの第 1.9 項「[Oracle Universal Installer について](#)」で、インストール要件、CD のマウント手順、各種プラットフォームでの Oracle Universal Installer の実行方法を参照してください。
2. 「Oracle Universal Installer: ようこそ」ページで、「次へ」をクリックします。
3. そのマシンに初めてインストールする場合のみ、「ファイルの場所」画面が表示されます。この画面で、インストール・ファイルのベース・ディレクトリを確認できます。ベース・ディレクトリでは、製品ごとの恒久的なファイルがサブディレクトリに格納されます。このコンピュータで製品をインストールまたは削除するユーザーに対し、ベース・ディレクトリを書込み可能にする必要があります。ベース・ディレクトリについては、デフォルトを選択したり、別の値を入力したりできます。

Windows の場合：デフォルトのベース・ディレクトリは、
C:¥Program Files¥Oracle¥Inventory です。製品ごとのインストール・ファイルは、ベース・ディレクトリのサブディレクトリ（たとえば、C:¥Program Files¥Oracle¥Inventory¥Components）に自動的に格納されます。

UNIX の場合：ベース・ディレクトリの場所（たとえば、/private1）を入力します。製品ごとのインストール・ファイルは、ベース・ディレクトリのサブディレクトリ（たとえば、/private1/Components）に自動的に格納されます。

「OK」をクリックして先に進みます。

4. **UNIX のみ：**初回インストールでは、そのマシンで Oracle Universal Installer を初めて実行したときに、「UNIX グループ名」画面が表示されます。この画面では、指定したグループに、oraInventory ディレクトリに対する権限が付与されます。Oracle9i Warehouse Builder のインストールを構成する権限を持つユーザーの UNIX グループ名を入力します。これは、第 1.8.4 項「[UNIX アカウントおよびグループの作成（UNIX のみ）](#)」で作成した UNIX グループ名です。

インストーラを起動した UNIX プロンプトで次のコマンドを入力して、グループ名を確認します。

```
prompt> id
```

「次へ」をクリックします。

5. root 権限を持つ特定のアクションは、インストールを続行する前に実行する必要があります。orainstRoot.sh ファイルに格納された、root 権限を持つシェル・スクリプトを実行する必要があります (orainstRoot.sh の前に「./」と入力して、シェル・スクリプトを実行する必要がある場合もあります)。Root.sh のインストール画面では、orainstRoot.sh ファイルのロケーションが表示されます。このスクリプトは、インストーラが各コンポーネントをシステムにインストールするときに、各コンポーネントへのポインタを作成します。このポインタは、その後のインストール手順でコンポーネントを識別するために使用されます。スクリプトは、/var/opt/oracle/oraInst.loc ファイルを作成します。このファイルは、oraInventory ディレクトリへのポインタを提供します。

Bourne シェル・スクリプトを実行した後、インストール処理を続行します。OUI の「ファイルの場所」ページが表示されます。

6. 「ファイルの場所」ページで、インストールするファイルのパス、Oracle9i Warehouse Builder 製品ファイルの場所とインストール先を確認します。

ソース : Oracle9i Warehouse Builder のインストール CD を使用してインストールする場合は、デフォルトの指定を使用します。それ以外の場合は、インストール・ファイルのソースを参照してください。

名前 : Oracle9i Warehouse Builder をインストールする ORACLE_HOME の名前を入力します。デフォルトの名前を使用することも、別の名前を選択することもできます。

パス : 「参照」をクリックして、Oracle9i Warehouse Builder をインストールする ORACLE_HOME のフルパスを検索します。ORACLE_HOME のパスは、実在の絶対パスにする必要があります。このパスには、環境変数名や空白を含めることができません。デフォルトのパスを使用するか、別のパスを選択することができます。詳細は、1-13 ページの第 1.7 項「共存 : ORACLE_HOME に関する考慮事項」と 1-16 ページの第 1.8.3 項「環境変数の設定 (UNIX のみ)」を参照してください。

「次へ」をクリックします。

7. 「インストール・タイプ」画面で「OWB Design Time Install」を選択し、2-2 ページの「Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントとそのインストールの概要」で説明したクライアント・コンポーネントをインストールします。

これらの Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントを個別にインストールする場合は、「カスタム」も選択できます。

「次へ」をクリックします。

8. 「コンポーネントの場所」ダイアログが表示される場合があります。Oracle Universal Installer と JRE のデフォルトのインストール・ロケーションを変更できます。

デフォルトの指定を使用し、「次へ」をクリックします。

9. 「サマリー」ページで、インストール・パラメータを確認します。ディスク領域が不足している場合は、「必要な領域」に赤色でその旨が示されます。

「インストール」をクリックし、通常の Oracle9i Warehouse Builder のインストールを実行します。インストール情報のログを表示する場合は、1-19 ページの[第 1.9.1 項「インベントリ・ディレクトリ」](#)を参照してください。

2.2.1 root.sh スクリプトの実行（UNIX のみ）

必要なファイルがコピーされたら、インストーラによって、root.sh スクリプトを実行するよう指示されます。root.sh スクリプトによって次の値が検出されます。

- ORACLE_OWNER、ORACLE_HOME、ORACLE_SID の各環境変数の設定。
- ローカルの bin ディレクトリのフルパス。デフォルトの指定を使用したり、別のローカルの bin ディレクトリに変更したりできます。

ORACLE_HOME の詳細は、1-16 ページの[第 1.8.3 項「環境変数の設定（UNIX のみ）」](#)を参照してください。

root.sh スクリプトを実行するには：

1. root ユーザーとしてログオンします。
2. 次のように入力し、ORACLE_HOME ディレクトリで root.sh スクリプトを実行します。
prompt> \$ORACLE_HOME/root.sh
3. 「Finished running generic part of the root.sh script」と「Now product-specific root actions will be performed」が表示されたら、root ユーザーを終了し、「インストール」画面に戻ります。

2.3 ステップ 2. Repository Assistant での Design Repository のインストール

このステップでは、Oracle9i Warehouse Builder Design Repository（2-3 ページの[図 2-1](#)の「B」）をインストールします。Oracle9i Warehouse Builder Design Client にログインするには、データベースのスキーマ内に新しい Oracle9i Warehouse Builder Design Repository を作成する必要があります。Oracle9i Warehouse Builder Design Repository には、データ・ウェアハウスの移入用に作成されたすべてのオブジェクトのメタデータ定義が格納されます。Oracle9i Warehouse Builder Repository Assistant を使用して、新しいリポジトリを作成します。

このインストールによって、リポジトリ所有者に Create Public Database Link 権限が自動的に付与されます。

新規リポジトリは、新規または既存のスキーマに作成できます。Repository Assistant では、既存の Oracle9i Warehouse Builder Design Repository も削除できます。

Oracle9i Warehouse Builder Design Repository をインストールするには:

1. Oracle9i Warehouse Builder Repository Assistant を起動します。

Windows の場合: 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Repository Assistant」を選択します。

UNIX の場合: シェルを起動し、次のロケーションに移動します。
OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix。たとえば、次のように入力します。
cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix
次に reposinst.sh を実行します。

2. 「OWB Repository Assistant: ようこそ」 ページでインストール手順を確認し、「次へ」をクリックします。
3. 「OWB Repository Assistant: サーバーおよび SYSDBA 情報」 ページで、Oracle9i Warehouse Builder リポジトリ・オブジェクトをインストールするデータベースの接続情報を入力します。

ユーザー名: SYSDBA 権限を持つユーザーの名前。Oracle9i Warehouse Builder Design Repository スキーマにアクセスするか、これを作成するには、SYS アカウントか、SYSDBA 権限を持つ任意のアカウントを使用する必要があります。Oracle9i Warehouse Builder Design Repository ユーザーには特定の動的パフォーマンス・ビューへのアクセス権が必要で、これらの権限はリポジトリ作成時に SYSDBA アカウントによって付与されます。V\$PWFILE_USERS ビューには、SYSDBA 権限を持つユーザーがすべて示されます。Oracle9i パラメータの設定の詳細は、[付録 A 「Oracle9i Database および Oracle8i R8.1.7 の準備」](#) と [付録 D 「診断 およびデバッグ」](#) を参照してください。

パスワード: SYSDBA ユーザーに対応するパスワード。

ホスト名: Design Repository をホスティングする（あるいは、ホスティングする予定の）データベースを実行しているシステムの名前。

ポート番号: Oracle9i Warehouse Builder がホスト・システム上のデータベースにアクセスするときに使用するポート番号。デフォルトは 1521 です。

Oracle サービス名: TNS 接続記述子に含まれるネットワーク・アドレスにマッピングされる、短縮された便利な名前。ユーザーは、該当するサービス名を知っていれば、TNS 接続を実行できます。

「次へ」をクリックします。

4. 「OWB Repository Assistant: 作成または削除」 ページで、「新規 Oracle9i Warehouse Builder リポジトリを作成」を選択します（初回インストールの場合）。初回インストールでない場合は、新しい Oracle9i Warehouse Builder Design Repository の作成、既存の Oracle9i Warehouse Builder Design Repository の削除、言語の追加によるオブジェクト翻訳のサポートのいずれかを選択します。

「次へ」をクリックします。

5. 「OWB Repository Assistant: 新規または既存ユーザー」ページで、「新規ユーザー・スキーマを作成し、そこにインストール」を選択します（初回インストールの場合）。初回インストールでない場合は、新しいスキーマの作成、既存のユーザー・スキーマへのリポジトリのインストールのいずれかを選択します。

「次へ」をクリックします。

6. 「OWB Repository Assistant: ユーザ名およびパスワード（新規または既存）」ページで、新しいスキーマまたは既存のスキーマの**ユーザー名とパスワード**を指定します。
Oracle9i Warehouse Builder Design Repository にログインする際は、ここで指定したユーザー名とパスワードを使用します。

このステップでは、追加ユーザーではなく、Design Repository 所有者のスキーマを作成します。追加ユーザーは、Oracle9i Warehouse Builder のセキュリティ機能を使用して作成できます。この機能による追加ユーザーの作成方法の詳細は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

「次へ」をクリックします。

7. 使用しているマシンが、推奨されるインストール・パラメータを満たさない場合は、「データベース構成警告」が表示されることがあります。

「OK」をクリックして先に進みます。

インストールを中止します。推奨されるパラメータの詳細は、[付録 A 「Oracle9i Database および Oracle8i R8.1.7 の準備」](#)を参照してください。

データベースの準備ができれば、インストールを実行します。

8. 「OWB Repository Assistant: 表領域」ページで、リポジトリ・データベースで使用可能な表領域のうち、次の表領域を選択します。

データの表領域を選択します。: データの表領域には、表、ビュー、順序、さらに、クライアントのメタデータを格納するために Oracle9i Warehouse Builder で作成される PL/SQL パッケージが格納されます。設計メタデータで系統影響分析のレポートを実行する場合は、ローカル管理されていて Segment Management 句が AUTO に設定されている表領域を選択しないでください。デフォルトは USERS です（推奨: 50MB 以上）。

索引の表領域を選択します。: 索引のデフォルト表領域には、Oracle9i Warehouse Builder のパフォーマンスを高めるためにそのリレーショナル構造のほかに作成される索引が格納されます。デフォルトは INDX です（推奨: 50MB 以上）。

一時データの表領域を選択します。: 一時表領域は、ディスク上に用意される作業領域です。ここには、大量のソートの実行に必要な一時セグメントや、Structured Query Language (SQL) 文の処理で作成される一時表または一時索引が格納されます。デフォルトは TEMP です。

スナップショットのデフォルトの表領域を選択します。: スナップショットのデフォルト表領域には、メタデータ変更管理のために作成するメタデータのスナップショットが格納されます。メタデータのスナップショットによって、Design Repository にある選択オブジェクトの、スナップショット作成時の情報が取得されます。メタデータのスナップショットは、取得する情報の種類によってサイズが変わります（スナップショット機能を使用しない場合の推奨は 5MB 以上。使用する場合の推奨は 60MB 以上）。メタデータのスナップショットの詳細は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

「次へ」をクリックします。

9. 「OWB Repository Assistant: 言語の定義」ページで、複数言語サポート (MLS) オプションを選択します。言語の選択を後から取り消すことはできません。言語をリストに追加するには、Repository Assistant を再び実行し、「OWB Repository Assistant: 作成または削除」ページで「オブジェクト変換をサポートする言語を追加します。」を選択します。

各言語の国際標準 ID は、2-13 ページの表 2-1 を参照してください。

MLS ベース言語の選択: データベースのベース言語。

MLS その他の言語の選択: Oracle9i Warehouse Builder で作成したオブジェクトのビジネス名や説明を編集および表示する際に使用する言語。MLS 言語は、「使用可能な言語の選択」フィールドで選択します。矢印をクリックすると、「選択した言語」フィールドに選択した言語が移動します。[Ctrl] キーまたは [Shift] キーを押しながら選択すると、複数の言語を同時に選択できます。

「次へ」をクリックします。

10. 「OWB Repository Assistant: サマリー」ページで「終了」をクリックします。

表 2-1 は、各言語の国際標準 ID を示します。

表 2-1 サポート言語の ISO ID

ISOID	言語
en_US	米語
ar_AE	アラビア語
as_IN	アッサム語
bn_IN	ベンガル語
pt_BR	ポルトガル語 (ブラジル)
bg_BG	ブルガリア語
fr_CA	フランス語 (カナダ)
ca_ES	カタロニア語

表 2-1 サポート言語の ISO ID (続き)

ISOID	言語
hr_HR	クロアチア語
cs_CZ	チェコ語
da_DK	デンマーク語
nl_NL	オランダ語
#ar_EG	エジプト語
ar_EG	エジプト語 (アラビア)
en_GB	英語
et_EE	エストニア語
fi_FI	フィンランド語
fr_FR	フランス語
de_DE	ドイツ語
el_GR	ギリシア語
gu_IN	グジャラト語
he_IL	ヘブライ語
hi_IN	ヒンディー語
hu_HU	ハンガリー語
is_IS	アイスランド語
in_ID	インドネシア語
it_IT	イタリア語
ja_JP	日本語
kn_IN	カンナダ語
ko_KR	韓国語
es_US	スペイン語 (南米)
lv_LV	ラトビア語
lt_LT	リトアニア語
ms_MY	マレー語

表 2-1 サポート言語の ISO ID（続き）

ISOID	言語
ml_IN	マラーラム語
mr_IN	マラーティー語
es_MX	スペイン語（メキシコ）
no_NO	ノルウェー語
or_IN	オーリヤ語
pl_PL	ポーランド語
pt_PT	ポルトガル語
pa_IN	パンジャブ語
ro_RO	ルーマニア語
ru_RU	ロシア語
zh_CN	簡体字中国語
sk_SK	スロバキア語
sl_SI	スロベニア語
es_ES	スペイン語
sv_SE	スウェーデン語
ta_IN	タミル語
te_IN	テルグ語
th_TH	タイ語
zh_TW	繁体字中国語
tr_TR	トルコ語
uk_UA	ウクライナ語
vi_VN	ベトナム語

2.4 ステップ 3. Oracle9i Warehouse Builder Design Browser Client の有効化

Oracle9i Warehouse Builder Design Browser Client (2-3 ページの図 2-1 の「C₁」) を有効にするには、Oracle9i Warehouse Builder Design Repository を指すデータベース・アクセス記述子を追加します。このデータベース・アクセス記述子は、リポジトリと同じ名前にする必要があります。Repository Assistant を使用してリポジトリをインストールした後で、このステップを実行できます。リポジトリが複数ある場合は、複数のデータベース・アクセス記述子を作成する必要があります。

Oracle9i Warehouse Builder Design Repository と同じホスト上で、データベースとともにインストールされた Oracle HTTP Server が起動していることを確認します。

- **Windows の場合:** 「スタート」 → 「プログラム」 → 「ORACLE_HOME」 → 「Oracle HTTP Server」 → 「Start HTTP Server powered by Apache」をクリックします。
- **UNIX の場合:** ORACLE_HOME/Apache/Apache/bin から `apachectl start` を実行します (停止するには、`apachectl stop` を実行します)。

Oracle9i Warehouse Builder Design Browser Client を有効にするには:

1. `http://hostname:port/` に接続します。

`port` は、UNIX プラットフォームの場合は 7777、Windows プラットフォームの場合は 80 がデフォルトであり、インストール中に指定することもできます。同じホスト上に Oracle HTTP Server が複数インストールされている場合、通常はインストール数が 1 つ増えるごとに 1 ずつ、ポート番号が大きくなります。詳細は、Oracle HTTP Server のドキュメントを参照してください。

2. 「Mod_plsql Configuration Menu」 → 「ゲートウェイ Database Access Descriptor 設定」 → 「デフォルトの追加 (空白構成)」を選択します。
3. 「Database Access Descriptor 名」に入力します。Oracle9i Warehouse Builder Design Repository スキーマ名を使用します。
4. 「データベース接続情報」では、「Oracle ユーザ名」フィールドと「Oracle パスワード」フィールドを空白のままにします。「Oracle Connect String」で、Oracle9i Warehouse Builder Design Repository インスタンスを指す `HOST:PORT:SID` を入力します。

データベース・インスタンスで SID がサポートされない場合は、`(HOST=your_host) (PORT=1521) (CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=your_oracle_service_name))` の形式で、完全な TNS 接続文字列を使用します。

5. その他のフィールドは空白のままにします。
6. 「OK」をクリックして入力内容を保存します。
7. 「閉じる」をクリックします。

2.5 ステップ 4. Oracle Universal Installer での「OWB Server Side Install」の実行

Oracle データベース・サーバーがインストールされたマシンに、OWB Server Side コンポーネントをインストールします。

OWB Design Time をインストールすると、ランタイム・コンポーネントもインストールされます。したがって、OWB Design Time をインストールしたマシンに OWB Server Side をインストールすると、ランタイム・コンポーネントが 2 度インストールされることになります。OWB Design Time と OWB Server Side を同じマシンにインストールする場合は、必ず別々の ORACLE_HOME を指定します。

「OWB Server Side Install」には、次のコンポーネントが含まれます。

- **Runtime Platform Service** (2-3 ページの図 2-1 の「4」)。Oracle9i Warehouse Builder の Name and Address コンポーネントが含まれます。本来、Runtime Platform Service は、データベースから管理できるようにサーバー・マシンにインストールする必要があります。ただし、サーバー・マシンにアクセスできないというまれな状況では、デスクトップ・マシン上でローカル・バージョンを使用できます。
- **Runtime Assistant。Runtime Access User** (2-3 ページの図 2-1 の「1」)、**Runtime Repository スキーマ** (図 2-1 の「2」)、**ターゲット・スキーマ** (図 2-1 の「3」) を作成できます。
- **SQL スクリプトおよびテンプレート**。このインストールによって、ORACLE_HOME\owb\rtpl\sql ディレクトリに SQL スクリプトが追加されます。これらのスクリプトを使用して、Runtime Platform Service で操作を行うことができます。テンプレートには、ジョブを OEM ジョブとして定義する方法や、ジョブを SQL*Plus から起動する方法が示されます。これらのテンプレートでは、WB_RT_API_EXEC パッケージを使用して、Runtime Platform Service で提供される実行サービスにアクセスします。

「OWB Server Side Install」を実行するには：

1. Oracle Universal Installer を起動します。1-19 ページの第 1.9 項「[Oracle Universal Installer について](#)」で、インストール要件、CD のマウント手順、各種プラットフォームでの Oracle Universal Installer の実行方法を参照してください。
2. 「Oracle Universal Installer: ようこそ」ページで、「次へ」をクリックします。
3. 初めてインストールする場合のみ、「ファイルの場所」画面が表示されます。この画面で、インストール・ファイルのベース・ディレクトリを確認できます。ベース・ディレクトリでは、製品ごとの恒久的なファイルがサブディレクトリに格納されます。このコンピュータで製品をインストールまたは削除するユーザーに対し、ベース・ディレクトリを書込み可能にする必要があります。ベース・ディレクトリについては、デフォルトを選択したり、別の値を入力したりできます。

Windows の場合: デフォルトのベース・ディレクトリは、
C:\Program Files\Oracle\Inventory です。製品ごとのインストール・ファイルは、ベース・ディレクトリのサブディレクトリ（たとえば、C:\Program Files\Oracle\Inventory\Components）に自動的に格納されます。

UNIX の場合: ベース・ディレクトリのロケーション（たとえば、/private1）を入力します。製品ごとのインストール・ファイルは、ベース・ディレクトリのサブディレクトリ（たとえば、/private1/Components）に自動的に格納されます。

「OK」をクリックします。

4. **UNIX のみ:** マシンで Oracle Universal Installer を初めて実行したときに、「UNIX Group Name」画面が表示されます。この画面では、指定したグループに、oraInventory ディレクトリに対する権限が付与されます。

Oracle9i Warehouse Builder のインストールを構成する権限を持つユーザーの UNIX グループ名を入力します。これは、[第 1.8.4 項「UNIX アカウントおよびグループの作成 \(UNIX のみ\)」](#) で作成した UNIX グループ名と同じです。

インストーラを起動した UNIX プロンプトで `prompt> id` とコマンドを入力して、グループ名を確認します。

「次へ」をクリックします。

5. **root 権限を持つ特定のアクションは、インストールを続行する前に実行する必要があります。** oraInstRoot.sh ファイルに格納された、root 権限を持つシェル・スクリプトを実行する必要があります (oraInstRoot.sh の前に「./」と入力して、シェル・スクリプトを実行する場合もあります)。Root.sh のインストール画面では、oraInstRoot.sh ファイルのロケーションが表示されます。このスクリプトは、インストーラが各コンポーネントをシステムにインストールするときに、各コンポーネントへのポインタを作成します。このポインタは、その後のインストール手順でコンポーネントを識別するために使用されます。スクリプトは、
/var/opt/oracle/oraInst.loc ファイルを作成します。このファイルは、oraInventory ディレクトリへのポインタを提供します。

Bourne シェル・スクリプトを実行したら、インストール処理を続行します。

6. 「ファイルの場所」ページで、インストールするファイルのパス、Oracle9i Warehouse Builder 製品ファイルのロケーションとインストール先を確認します。

ソース: Oracle9i Warehouse Builder のインストール CD を使用してインストールする場合は、デフォルトの指定を使用します。それ以外の場合は、インストール・ファイルのソースを参照してください。

名前: Oracle9i Warehouse Builder をインストールする ORACLE_HOME の名前を入力します。デフォルトの名前を使用するか、別の名前を選択することができます。

パス:「参照」をクリックして、Oracle9i Warehouse Builder をインストールする ORACLE_HOME のフルパスを検索します。ORACLE_HOME のパスは、実在の絶対パスにする必要があります。このパスには、環境変数名や空白を含めることができません。デフォルトのパスを使用するか、別のパスを選択することができます。詳細は、1-13 ページの第 1.7 項「共存: ORACLE_HOME に関する考慮事項」と 1-16 ページの第 1.8.3 項「環境変数の設定 (UNIX のみ)」を参照してください。

「次へ」をクリックします。

7. 「インストール・タイプ」画面で「OWB Server Side Install」を選択し、2-2 ページの「Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントとそのインストールの概要」で説明したサーバー・サイド・コンポーネントをインストールします。

これらの Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントを個別にインストールする場合は、「カスタム」も選択できます。

「次へ」をクリックします。

8. 「コンポーネントの場所」ダイアログが表示される場合があります。Oracle Universal Installer と JRE のデフォルトのインストール・ロケーションを変更できます。

デフォルトの指定を使用し、「次へ」をクリックします。

9. 「サマリー」ページで、インストール・パラメータを確認します。ディスク領域が不足している場合は、「必要な領域」に赤色でその旨が示されます。

「インストール」をクリックし、通常の Oracle9i Warehouse Builder のインストールを実行します。

インストール情報のログを表示する場合は、1-19 ページの第 1.9.1 項「インベントリ・ディレクトリ」を参照してください。

2.5.1 root.sh スクリプトの実行 (UNIX のみ)

必要なファイルがコピーされたら、インストーラによって、root.sh スクリプトを実行するよう指示されます。root.sh スクリプトによって次の値が検出されます。

- ORACLE_OWNER、ORACLE_HOME、ORACLE_SID の各環境変数の設定。
- ローカルの bin ディレクトリのフルパス。デフォルトの指定を使用したり、別のローカルの bin ディレクトリに変更したりできます。

root.sh スクリプトを実行するには:

1. root ユーザーとしてログオンします。
2. ORACLE_HOME ディレクトリで root.sh スクリプトを実行します。ORACLE_HOME の詳細は、1-16 ページの第 1.8.3 項「環境変数の設定 (UNIX のみ)」を参照してください。

3. prompt> \$ORACLE_HOME/root.sh

「Finished running generic part of the root.sh script」と「Now product-specific root actions will be performed」が表示されたら、root ユーザーを終了し、「インストール」画面に戻ります。

「構成ツール」ページで、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant が自動的に起動します。ランタイム・オブジェクトのインストールを完了することも、ウィザードを取り消し、後でデスクトップ・マシンから Runtime Assistant を実行することもできます。

2.6 ステップ 5. Runtime Assistant でのランタイム・オブジェクトのインストール

ターゲット・インスタンスにウェアハウス・オブジェクトを配布し、ウェアハウス・ジョブを実行するには、ランタイム・オブジェクトをセットアップする必要があります。ターゲットとなるそれぞれのウェアハウス・スキーマに対してランタイム・オブジェクトを作成するには、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant を実行する必要があります。「OWB Server Side Install」の実行直後に、「OWB Server Side Install」を実行したマシン上で、Runtime Assistant を実行します。

このステップでは、まず Runtime Assistant を使用して、Runtime Repository スキーマ（2-3 ページの図 2-1 の「2」）と Runtime Access User（2-3 ページの図 2-1 の「1」）をインストールします。次に Runtime Assistant を使用して、ターゲット・スキーマ（2-3 ページの図 2-1 の「3」）をインストールします。

注意：

- Oracle9i Warehouse Builder ランタイムをインストールするには、Oracle9i Database が稼働中であり、Oracle JVM がインストールされ、初期化パラメータ java_pool_size が最低 20MB に設定されている必要があります。
 - 既存のリポジトリ・ユーザーを削除する場合は、まず Runtime Assistant を使用して、Runtime Repository 自体を削除する必要があります。その後、SQL*Plus を使用してユーザーを削除できます。
-
-

Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant によって、次のコンポーネントがインストールされます。

- **owbrt_sys:** このユーザーには、ランタイム・ソフトウェアと Runtime Platform Service の、データベース上のロケーションが格納されます。Real Application Cluster (RAC) 環境にインストールする場合は、クラスタ内のインスタンスごとの Runtime Platform Service のロケーションが、このユーザーに格納されます。

- **Name and Address Server のパッケージ:** Oracle9i Warehouse Builder の Name and Address (データ・クレンジングを実行できる製品) に Oracle9i Warehouse Builder を統合できます。この追加製品を選択し、Name and Address Server のパッケージをここでインストールすると、ETL プロセスの一環としてデータ・クレンジングを実行できるようになります。

Runtime Assistant を初めて実行するときは、リモートでは実行できません。これは、Runtime Assistant によって検索される Java コードのロケーションが、まだ Runtime Repository に登録されていないためです。一般的に、Runtime Assistant をリモートで実行することはお薦めしません。

2.6.1 Runtime Repository と Runtime Access User のインストール

このステップでは、Runtime Assistant を使用して、Runtime Repository スキーマ (2-3 ページの図 2-1 の「2」) と Runtime Access User (2-3 ページの図 2-1 の「1」) をインストールします。

Runtime Repository スキーマでは、多くの (ほぼすべての) DBA 権限が必要です。Runtime Repository スキーマを誤って使用しないように、権限はないものの、複数のユーザーが Runtime Repository を使用できるようにする別のユーザー (Runtime Access User) を作成します。Oracle9i Warehouse Builder のコンテキストでは、Runtime Access User は、オブジェクトと ETL プロセスを配布および実行できますが、SQL*Plus からは Runtime Access User に属していないオブジェクトが見えません。したがって、Runtime Access User はセキュリティ対策に使用できます。Runtime Access User は、デプロイメント・マネージャから生成されたコードを受け取り、Runtime Repository スキーマ内のサービスにアクセスします。

Runtime Repository スキーマは、ターゲット・スキーマでアクセスされる監査表および監査 / サービス・パッケージを所有します。Runtime Repository スキーマは、ターゲット・スキーマ内の各種ターゲットとの接続を管理する、システム内の中心的なユーザーです。また、第 2.2 項でインストールした Runtime Audit Browser Client も、実行時レポートを有効にするために Runtime Repository スキーマと通信します。

Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant では、ターゲット・インスタンス内に新規スキーマを作成したり、ターゲット・インスタンスにある既存のスキーマを使用し、そのスキーマを Oracle9i Warehouse Builder ランタイム・オブジェクトで初期化したりします。Oracle9i Warehouse Builder ランタイム・コンポーネントは、これらのオブジェクトを使用して、ターゲット・インスタンス内にウェアハウス・オブジェクトを配布したり、ターゲット・インスタンスをロードおよびリフレッシュするジョブの実行時に取得した監査情報やエラー情報をログに記録したりします。監査情報およびエラー情報は、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser を使用して表示できます。詳細は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Oracle9i Warehouse Builder ランタイムを Real Application Cluster (RAC) 環境にインストールする場合は、クラスタ内の Runtime Platform Service を実行するすべてのノードで、このインストールを実行する必要があります。それらのノードは、Runtime Repository に対して有効にできます。

注意： 既存のスキーマにインストールする場合は、ここで説明した設定のいくつかがすでにスキーマ内で定義されており、Oracle9i Warehouse Builder では変更できません。ユーザーのストレージ・パラメータの変更方法は、『Oracle9i SQL リファレンス』を参照してください。

Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository と Runtime Access User をインストールするには：

1. Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant を起動します。

Windows の場合：「スタート」→「プログラム」→「OWB_HOME」→「Warehouse Builder」→「OWB Runtime Assistant」を選択します。

UNIX の場合：シェルを起動し、次のロケーションに移動します。

OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix。たとえば、次のように入力します。

```
cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix
```

次に runtimeinst.sh を実行します。

2. 「OWB Runtime Assistant: ようこそ」ページで、「次へ」をクリックします。
3. 「OWB Runtime Assistant: サーバーおよび SYSDBA 情報」ページで、Warehouse Builder ランタイム・オブジェクトをインストールするシステムに関して次の情報を入力します。

ユーザー名：SYSDBA 権限を持つユーザーの名前。Oracle9i Warehouse Builder Design Repository スキーマにアクセスするか、これを作成するには、SYS アカウントか、SYSDBA 権限を持つ任意のアカウントを使用する必要があります。Oracle9i Warehouse Builder Design Repository ユーザーには特定の動的パフォーマンス・ビューへのアクセス権が必要で、これらの権限はリポジトリ作成時に SYSDBA アカウントによって付与されます。V\$PWFILERS ユーザーには、SYSDBA 権限を持つユーザーがすべて示されます。Oracle9i パラメータの設定の詳細は、付録 A 「Oracle9i Database および Oracle8i R8.1.7 の準備」と付録 D 「診断およびデバッグ」を参照してください。

パスワード：SYSDBA ユーザーに対応するパスワード。

ホスト名：Runtime Repository をホスティングする（あるいは、ホスティングする予定の）データベースを実行しているシステムの名前。Runtime Repository をターゲット・インスタンスに初めてインストールする場合は、「ホスト名」を、Runtime Assistant の実行元の localhost にする必要があります。

ポート番号：Oracle9i Warehouse Builder がホスト・システム上のデータベースにアクセスするときに使用するポート番号。デフォルトは 1521 です。

Oracle サービス名: TNS 接続記述子に含まれるネットワーク・アドレスにマッピングされる、短縮された便利な名前。ユーザーは、該当するサービス名を知っていれば、TNS 接続を実行できます。Real Application Cluster (RAC) 環境にインストールする場合は、クラスタの各ノードにソフトウェアをインストールし、「オプションの選択」ページで RAC インスタンスを登録する必要があります。

Real Application Cluster 内のノードにインストールする場合は、ホストをノードのホスト値にし、「Oracle サービス名」をその一意のインスタンス名にする必要があります。ホスト、ポート、サービス名は、インスタンスノードごとに記録され、Runtime Audit Browser のサービス・ノード・レポートを使用して管理できます。たとえば、インストール後にインスタンス番号やインスタンス名が変更された場合に、この情報が必要になることがあります。

「次へ」をクリックします。

4. 「OWB Runtime Assistant: オプションの選択」ページで、「Runtime Repository」(2-3 ページの [図 2-1](#) の「2」)を選択します。

Real Application Cluster (RAC) 環境にインストールする場合は、クラスタ内の 1 つ目のノードに対して「Runtime Repository」を選択します。その後インストールするすべてのノードに対しては、「Register RAC Instance」を選択します。このオプションを選択すると、Runtime Repository の作成が簡単になりますが、ノードに Runtime Platform ソフトウェアがインストールされたことが記録されます。そのようなノードは、Runtime Platform Service をサポートする候補になり、Runtime Audit Browser でサービス・ノード・レポートを使用して、Runtime Repository をサポートできるようになります。

「次へ」をクリックします。

5. 「OWB Runtime Design Repository: 作成または削除」ページで「新規 Warehouse Builder Runtime Repository の作成」を選択します。

「次へ」をクリックします。

6. 「OWB Runtime Repository: 新規または既存ユーザー」ページで「新規ユーザー・スキーマを作成し、そこにインストール」を選択します (初回インストールの場合)。

初回インストールでない場合は、新しいスキーマの作成、既存のユーザー・スキーマへのリポジトリのインストールのいずれかを選択します。既存のスキーマにすでに Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository オブジェクトがある場合、インストールは失敗します。Runtime Assistant を使用して既存のリポジトリを削除してから、インストールを進めてください。

「次へ」をクリックします。

7. 「OWB Runtime Design Repository: ユーザ名およびパスワード (新規) または (既存)」ページで、新しいスキーマまたは既存のスキーマの所有者の**ユーザー名とパスワード**を指定します。

Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository にログインする際は、ここで指定したユーザー名とパスワードを使用します。既存のスキーマに以前のリポジトリ・オブジェクトが存在しない場合にのみ、新しい Runtime Repository オブジェクトをインストールできます。

Runtime Assistant は、指定されたユーザー名に基づいて、Runtime Repository へのアクセスを制御するために次の 4 つのロールを作成します。これらは、**WB_D_*** (開発者権限付き)、**WB_R_*** (ランタイム権限付き)、**WB_A_*** (管理者権限付き)、**WB_U_*** (ユーザー権限付き) です。

「次へ」をクリックします。

8. 使用しているマシンが推奨されるインストール・パラメータを満たしていない場合は、「データベース構成警告」が表示されることがあります。「OK」をクリックして先に進みます。
9. 「OWB Runtime Repository: 表領域」ページで、データベース内で使用可能な表領域から選択して、カテゴリごとの表領域を指定します。

データの表領域を選択します。: データの表領域には、表、ビュー、順序、さらに、ランタイム配布データと監査データを格納するために Oracle9i Warehouse Builder で作成される PL/SQL パッケージが格納されます。デフォルトは USERS です。

索引の表領域を選択します。: 索引のデフォルト表領域には、Oracle9i Warehouse Builder のパフォーマンスを高めるためにそのリレーショナル構造のほかに作成される索引が格納されます。デフォルトは INDX です。

一時データの表領域を選択します。: 一時表領域は、ディスク上に用意される作業領域です。ここには、大量のソートの実行に必要な一時セグメントや、Structured Query Language (SQL) 文の処理で作成される一時表または一時索引が格納されます。デフォルトは TEMP です。

「次へ」をクリックします。

10. 「OWB Runtime Repository: ランタイム・アクセス」ページで、「新規 Runtime Access User の作成」を選択します (初回インストールの場合)。

Runtime Access User は、2-3 ページの [図 2-1](#) の「1」で表されます。Runtime Repository ユーザーに直接接続せずに、Runtime Access User を中間接続として使用できます。このスキーマは、Runtime Repository ユーザー内のサービスにアクセスします。Runtime Assistant は、1 つのデフォルト・ユーザーを作成します。他のユーザーは、後で作成できます。

初回インストールではない場合は、新しいランタイム・アクセス・スキーマの作成、既存のランタイム・アクセス・スキーマへのインストールのいずれかを選択します。

「次へ」をクリックします。

11. 「OWB Runtime Repository: Runtime Access User（新規または既存）」ページで、Runtime Access User の**ユーザー名**と**パスワード**を入力します。
「次へ」をクリックします。
12. 「OWB Runtime Repository: Name and Address ポート」ページで、Name and Address Server と通信するための**ポート番号**を入力します。デフォルトは 4040 です。
「次へ」をクリックします。
13. 「OWB Runtime Repository: サマリー」ページで「終了」をクリックします。
14. インストールが成功すると、「Oracle Warehouse Builder Runtime Repository のインストールに成功しました。ターゲット・スキーマをインストールしますか？」というメッセージが表示されます。
「はい」をクリックし、次の指示に従います。

2.6.2 Oracle9i Warehouse Builder ターゲット・スキーマのインストール

このステップでは、Runtime Assistant を使用してターゲット・スキーマをインストールします。ターゲット・スキーマ（2-3 ページの図 2-1 の「3」）では、ウェアハウス・オブジェクトが格納され、ウェアハウス・ジョブが実行されます。ターゲットのインストールは、サーバーでローカルに実行できます。また、以前に Runtime Assistant を実行している場合は、リモートでも実行できます。

ターゲット・スキーマには、Runtime Repository スキーマ内の監査 / サービス・パッケージにアクセスする ETL プロセスを実行するパッケージが含まれます。ターゲット・スキーマは、実際のターゲットであり、ターゲット・データと、キューブ、ディメンション、ビュー、マッピングなどのデータ・オブジェクトを含みます。複数のターゲットを 1 つの Runtime Repository に関連付けることができます。実行情報や配布情報など、ターゲットに関連するすべての情報が、Runtime Repository に格納されます。

ターゲット・スキーマをインストールすると、Runtime Assistant で暗黙的に Create Any Directory 権限と Drop Any Directory 権限が作成されます。これにより、Oracle9i Warehouse Builder 内のディレクトリとして認識されるコネクタを作成したり削除したりできます。そのための権限を自分で明示的に作成する必要はありません。

ターゲット・スキーマを作成するには：

1. ランタイム・スキーマと Runtime Access User をインストールし、すでに Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant がアクティブであれば、ステップ 4 まで進みます。それ以外は、Runtime Assistant を起動します。

Windows の場合：「スタート」→「プログラム」→「OWB_HOME」→「Warehouse Builder」→「OWB Runtime Assistant」を選択します。

UNIX の場合: シェルを起動し、次のロケーションに移動します。

`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。

```
cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix
```

次に `runtimeinst.sh` を実行します。

2. 「OWB Runtime Assistant: ようこそ」 ページで、「次へ」をクリックします。
3. 「OWB Runtime Assistant: サーバーおよび SYSDBA 情報」 ページで、Warehouse Builder ランタイム・オブジェクトをインストールするシステムに関して次の情報を入力します。

ユーザー名: SYSDBA 権限を持つユーザーの名前。Oracle9i Warehouse Builder Design Repository スキーマにアクセスするか、これを作成するには、SYS アカウントか、SYSDBA 権限を持つ任意のアカウントを使用する必要があります。Oracle9i Warehouse Builder Design Repository ユーザーには特定の動的パフォーマンス・ビューへのアクセス権が必要で、これらの権限はリポジトリ作成時に SYSDBA アカウントによって付与されます。V\$PWFILE_USERS ビューには、SYSDBA 権限を持つユーザーがすべて示されます。Oracle9i パラメータの設定の詳細は、[付録 A 「Oracle9i Database および Oracle8i R8.1.7 の準備」](#) と [付録 D 「診断 およびデバッグ」](#) を参照してください。

パスワード: SYSDBA ユーザーに対応するパスワード。

ホスト名: Runtime Repository をホスティングする（あるいは、ホスティングする予定の）データベースを実行しているシステムの名前。Runtime Repository をターゲット・インスタンスに初めてインストールする場合は、「ホスト名」を、Runtime Assistant の実行元の localhost にする必要があります。

ポート番号: Oracle9i Warehouse Builder がホスト・システム上のデータベースにアクセスするときに使用するポート番号。デフォルトは 1521 です。

Oracle サービス名: TNS 接続記述子に含まれるネットワーク・アドレスにマッピングされる、短縮された便利な名前。ユーザーは、該当するサービス名を知っていれば、TNS 接続を実行できます。

「次へ」をクリックします。

4. 「OWB Runtime Assistant: オプションの選択」 ページで、「ターゲット・スキーマ」 (2-3 ページの [図 2-1](#) の「3」) を選択します。

「次へ」をクリックします。

5. 「OWB ターゲット・スキーマ: 作成または削除」 ページで「新規 Warehouse Builder ターゲット・スキーマの作成」を選択します。

「次へ」をクリックします。

6. 「OWB ターゲット・スキーマ : Runtime Repository」 ページで、この手順のステップ 7 で定義した Runtime Repository (2-3 ページの図 2-1 の「2」) の所有者の **ユーザー名** と **パスワード** を入力します。

同じインストール・セッションで Runtime Repository を作成した場合は、その情報がデフォルトとして表示されます。

「次へ」をクリックします。

7. 「OWB ターゲット・スキーマ : 新規または既存ユーザー」 ページで「新規ユーザー・スキーマを作成し、そこにインストール」を選択します (初回インストールの場合)。

初回インストールでない場合は、新しいターゲット・スキーマの作成、既存のユーザー・スキーマの指定 (ターゲット・スキーマとして) のいずれかを選択します。

「次へ」をクリックします。

8. 「OWB ターゲット・スキーマ : ユーザー名およびパスワード (新規) または (既存)」 ページで、新しいターゲット・スキーマまたは既存のターゲット・スキーマの **ユーザー名** と **パスワード** を入力します。

「次へ」をクリックします。

9. 「データベース構成警告」が表示される場合があります。「OK」をクリックして先に進みます。

インストールを中止します。データベース・パラメータの適切な設定は、[付録 A 「Oracle9i Database および Oracle8i R8.1.7 の準備」](#) を参照してください。

再びインストールを実行します。

10. 「OWB ターゲット・スキーマ : 表領域」 ページで、データベース内で使用可能な表領域から選択して、カテゴリごとの表領域を指定します。

データの表領域を選択します。 : この表領域には、ターゲット・スキーマに配布されたウェアハウス・オブジェクトと、ウェアハウス・ジョブの実行に使用されるオブジェクトが格納されます。デフォルトは USERS です。

索引の表領域を選択します。 : 索引のデフォルト表領域には、Oracle9i Warehouse Builder のパフォーマンスを高めるためにそのリレーショナル構造のほかに作成される索引が格納されます。この索引は、ターゲット・スキーマに配布されたウェアハウス・オブジェクトと、ウェアハウス・ジョブの実行に使用されるオブジェクトのためにあります。デフォルトは INDX です。

一時データの表領域を選択します。 : 一時表領域は、ディスク上に用意される作業領域です。ここには、大量のソートの実行に必要な一時セグメントや、Structured Query Language (SQL) 文の処理で作成される一時表または一時索引が格納されます。この一時データは、ターゲット・スキーマに配布されたウェアハウス・オブジェクトと、ウェアハウス・ジョブの実行に使用されるオブジェクトのためにあります。デフォルトは TEMP です。

「次へ」をクリックします。

11. 「OWB Runtime Repository: サマリー」 ページで「終了」をクリックします。

Oracle Universal Installer からこのアシスタントを実行した場合は、インストールの完了時に「インストールの終了」ページが表示されます。

複数のターゲット・スキーマをセットアップできます。この場合、作成するターゲット・スキーマごとに、Runtime Assistant を実行する必要があります。

12. 「終了」をクリックします。

2.7 ステップ 6. Design Browser および Runtime Audit Browser 用の Web ブラウザの構成

このステップでは、Web ブラウザ設定を構成して、Design Browser と Runtime Audit Browser を使用可能にします。

2.7.1 Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リストへの「LOCALHOST」の追加

この手順を開始する前に、Netscape または Microsoft Internet Explorer のプロキシ・サーバー・バイパス・リストに「localhost」を追加する必要があります。

Internet Explorer のプロキシ・サーバー・バイパス・リストに「localhost」を追加するには：

1. 「ツール」メニューの「インターネット オプション」を選択します。
2. 「接続」タブで、「LAN の設定」をクリックします。
3. 「ローカル アドレスにはプロキシサーバーを使用しない」オプションを選択します。
4. 「OK」をクリックします。

Netscape のプロキシ・サーバー・バイパス・リストに「localhost」を追加するには：

1. 「編集」メニューの「設定」を選択します。
2. ナビゲーション・パネルで「詳細」を展開し、「プロキシ」を選択します。
3. 「手動でプロキシを設定する」を選択し、「表示」をクリックします。
4. 画面の「例外」セクションで、自分のホスト名をプロキシの例外に追加します。
5. 「OK」をクリックします。

2.7.2 Web ブラウザのキャッシュ管理の構成

任意のクライアントで Design Browser と Runtime Audit Browser にアクセスできるように、Web ブラウザのキャッシュ管理を設定する必要があります。

Internet Explorer のキャッシュ管理を構成するには：

1. 「ツール」メニューの「インターネット オプション」を選択します。
2. 「全般」タブで、「インターネット一時ファイル」セクションの「設定」をクリックします。
3. 「保存しているページの新しいバージョンの確認」オプションの「ページを表示するごとに確認する」を選択します。
4. 「OK」をクリックします。

Netscape のキャッシュ管理を構成するには：

1. 「編集」メニューの「設定」を選択します。
2. ナビゲーション・パネルで「詳細」を展開し、「キャッシュ」を選択します。
3. 「キャッシュにあるページとネットワーク上のページの比較」オプションで、「セッション毎」を選択します。
4. 「OK」をクリックします。

2.7.3 ネット・サービス名を使用した Oracle9i Warehouse Builder の構成

ネット・サービス名を追加すると、Runtime Audit Browser の「ログイン」画面で、「ネット・サービス名」オプションを使用できるようになります。ネット・サービス名は、Net Manager で追加したり、tnsnames.ora ファイルを編集して手動で追加したりできます。

Net Manager を使用してネット・サービス名を追加するには：

1. Net Manager を起動します。
Windows の場合：「スタート」→「プログラム」→「OWB_HOME」→「Configuration and Migration Tools」→「Net Manager」を選択します。
UNIX の場合：OWB_HOME/bin/netmgr を起動します。
2. 「ローカル」→「サービス・ネーミング」を選択し、新しいローカルのサービス名を追加します。

ネット・サービス名を手動で追加するには：

1. `OWB_HOME/network/admin/tnsnames.ora` を編集し、新しいエントリを追加します。たとえば、次のエントリを追加します。

```
DWSUN42 =
(DESCRIPTION =
  (ADDRESS_LIST =
    (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP) (HOST = dwsun42) (PORT = 1521))
  )
  (CONNECT_DATA =
    (SERVICE_NAME = dev920.us.oracle.com)
  )
)
```

2. このファイルを保存し、閉じます。

2.7.4 UNIX 上の Netscape の場合 : `displayURL.sh` の権限の設定

UNIX マシンで Netscape を使用している場合は、次のステップを実行して、Oracle9i Warehouse Builder Client で Design Browser を使用可能にします。

`$ORACLE_HOME/owb/bin/unix/displayURL.sh` の権限を 555 に設定します。

2.8 ステップ 7. (オプション) Oracle9iAS への Oracle9i Warehouse Builder Browser の統合

Oracle9i Warehouse Builder では、Design Browser と Runtime Audit Browser のクライアント・バージョンが用意されているため、Oracle9i Application Server (Oracle9iAS) へのこれらのブラウザの統合はオプションになります。統合は、Oracle9i Warehouse Builder Browser Assistant の実行と、ブラウザの構成の 2 ステップで構成されます。このオプションは、2-3 ページの [図 2-1](#) の下部に示されています。

2.8.1 Design Browser と Runtime Audit Browser を Oracle9iAS に統合する理由

Design Browser と Runtime Audit Browser を Oracle9iAS に統合する場合の利点は、次のとおりです。

- ポートレットを使用して、Oracle9i Warehouse Builder Design Browser と Runtime Audit Browser の機能にアクセスできます。ポートレットを使用すると、ポータル・ページを必要に応じて柔軟にレイアウトできます。たとえば、Oracle9i Warehouse Builder のポートレットと Oracle Reports のポートレットを並べて配置できます。これにより、エンド・ユーザーは、使用するすべてのアプリケーションを一箇所から起動したり、各自が専用のリストを使用したりできます。

- Design Browser と Runtime Audit Browser は、Single Sign-On (SSO) サーバーに統合されます。Oracle9i Warehouse Builder のブラウザ管理者ポートレットを使用すると、選択されたリポジトリやロールへのアクセス権を SSO ユーザーまたはグループに付与できます。特定のロールでは、他のロールより多くのレポートにアクセスできます。
- Oracle9iAS Portal を使用すると、Oracle9i Warehouse Builder メタデータに対して独自のレポートを作成し、そのレポートを Oracle9i Warehouse Builder Design Browser や Runtime Audit Browser のポートレット内で表示できます。
- Oracle9i Warehouse Builder Design Browser や Runtime Audit Browser から他の関連ドキュメントへのハイパーリンクを作成できます。それらのドキュメントがホスティングされるロケーションは関係ありません。1 人のユーザーがそれらのリンクを作成して、パブリックにすると、他のユーザーもアクセスできます。

2.8.2 Browser Assistant での Oracle9i Warehouse Builder Browser のインストール

Oracle9i Warehouse Builder Browser Assistant では、Oracle9i Warehouse Builder Browser のインストールを順を追って指示します。Oracle9i Warehouse Builder Browser を使用して、メタデータの表示、Web レポートの実行、およびメタデータでの系統および影響分析を実行できます。Oracle9i Warehouse Builder Browser の使用方法の詳細は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Oracle9i Warehouse Builder Browser をインストールする際には、Oracle9iAS Portal がインストールされた Oracle 9iAS が稼働中であることを確認します。また、Runtime Audit Browser を統合する場合は、Oracle Container for J2EE (OC4J) も稼働中であることを確認します。

既存の Oracle9i Warehouse Builder Browser オブジェクトをスキーマから削除する場合は、このガイドの第 4 章「Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントの削除」を参照してください。

Oracle9i Warehouse Builder Browser をインストールするには：

1. Oracle9i Warehouse Builder Browser Assistant を起動します。

Windows の場合：「スタート」→「プログラム」→「OWB_HOME」→「Warehouse Builder」→「OWB Browser Assistant」を選択します。

UNIX の場合：シェルを起動し、次のロケーションに移動します。
`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。
`cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix`
 次に `browserasst.sh` を実行します。

2. 「Oracle9i Warehouse Builder Browser Assistant: ようこそ」ページでインストール手順を確認し、「次へ」をクリックします。

3. 「OWB Browser Assistant: 操作の選択」 ページで「Oracle Warehouse Builder Design Browser と Runtime Audit Browser をインストールします。」を選択し、「次へ」をクリックします。

既存の Oracle9i Warehouse Builder Browser オブジェクトを削除する場合は、「OWB Design Browser と OWB Runtime Audit Browser を削除します」を選択し、[第 4 章「Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントの削除」](#)の手順に従ってください。

4. 「OWB Browser Assistant: スキーマの選択」 ページで、Oracle9i Warehouse Builder Browser を新規スキーマまたは既存スキーマのどちらに作成およびインストールするかを選択します。

「次へ」をクリックします。

5. 「OWB Browser Assistant: サーバ情報」 ページで、次の接続情報を指定します。

ホスト名 : Oracle9iAS Metadata Repository がインストールされているホスト・マシンの名前 (server8 など)。

ポート番号 : Oracle9iAS Metadata Repository がインストールされているマシンの TNS ポート番号 (1521 など)。

Oracle サービス名 : TNS 接続記述子に含まれるネットワーク・アドレスにマッピングされる、短縮された便利な名前。ユーザーは、該当するサービス名を知っていれば、TNS 接続を実行できます。

「次へ」をクリックします。

6. 「OWB Browser Assistant: SYSDBA 情報」 ページで、次の追加接続情報を指定します。

Sys ユーザー名 : SYS ユーザーの名前。

Sys パスワード : SYS ユーザーのパスワード。

Oracle Portal スキーマ名 : Oracle9iAS のインストール時に設定された Oracle9iAS Portal ユーザー名。これは、Oracle9iAS Portal をインストールしたスキーマです。

「次へ」をクリックします。

7. 「OWB Browser Assistant: 表領域およびスキーマの入力」 ページで、データを格納する表領域を選択します。

デフォルトの表領域を選択します。: ブラウザ・データを格納するデフォルトの表領域です。

一時データの表領域を選択します。: ブラウザ・データに対する大量のソートに必要な一時セグメントを格納します。

Warehouse Builder Design Browser のスキーマ名とパスワードを入力します。

「次へ」をクリックします。

8. 「OWB Browser Assistant: Oracle9iAS Single Sign-On (SSO) サーバー情報」 ページで、Oracle9iAS の情報を入力します。
「次へ」をクリックします。
9. 「OWB Browser Assistant: OWB Design Repository の詳細 (オプション)」 ページの情報はオプションです。

このページに入力しなくても、後で「Warehouse Builder Browser Administration」ウィンドウに直接入力できます。ここで Design Browser の情報を入力する場合は、「はい」をクリックし、2-3 ページの図 2-1 の「C₁」に関して、次の情報を入力します。ここで入力しない場合は、「いいえ」をクリックします。

OWB Design Repository ユーザー : Oracle9i Warehouse Builder Design Repository にログインする際のユーザー名。

OWB Design Repository パスワード : Oracle9i Warehouse Builder Design Repository にログインする際のパスワード。

ホスト名 : Oracle9i Warehouse Builder Design Repository があるコンピュータの名前。

ポート番号 : Oracle9i Warehouse Builder Design Repository があるデータベースの TNS リスナー・ポートの番号。

Oracle サービス名 : TNS 接続記述子に含まれるネットワーク・アドレスにマッピングされる、短縮された便利な名前。ユーザーは、該当するサービス名を知っていれば、TNS 接続を実行できます。

「次へ」をクリックします。

10. 「OWB Browser Assistant: OWB Runtime Repository の詳細」 ページの情報はオプションです。

このページに入力しなくても、後で「Warehouse Builder Browser Administration」ウィンドウに直接入力できます。

ここで Runtime Audit Browser の情報を入力する場合は、「はい」をクリックし、2-3 ページの図 2-1 の「D₁」に関して、次の情報を入力します。ここで入力しない場合は、「いいえ」をクリックします。

OWB Runtime Repository ユーザー : Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository にログインする際のユーザー名。

OWB Runtime Repository パスワード : Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository にログインする際のパスワード。

ホスト名 : Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository があるコンピュータの名前。

ポート番号 : Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository があるデータベースの TNS リスナー・ポートの番号。

Oracle サービス名: TNS 接続記述子に含まれるネットワーク・アドレスにマッピングされる、短縮された便利な名前。ユーザーは、該当するサービス名を知っていれば、TNS 接続を実行できます。

「次へ」をクリックします。

11. 「サマリー」 ページで「終了」をクリックします。

Oracle9i Warehouse Builder Browser の構成方法は、2-35 ページの「[Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser の構成](#)」を参照してください。

2.8.3 Oracle9i Warehouse Builder Design Browser の構成

Oracle9i Warehouse Builder Browser を使用するには、次の構成手順を実行します。

- [Oracle9iAS Portal へのログイン \(Portal 管理者として\)](#) (2-34 ページ)
- [ポートレット・プロバイダの追加](#) (2-34 ページ)
- [ポートレット・リポジトリのリフレッシュ](#) (2-35 ページ)

2.8.3.1 Oracle9iAS Portal へのログイン (Portal 管理者として)

Portal 管理者として Oracle9iAS Portal にログインするには:

1. Web ブラウザを開きます。
2. Oracle9iAS Portal にアクセスします。

たとえば、次のように入力します。http://*server*:7778/pls/portal/。

server は Web サーバーのホスト名、7778 は Web サーバーのポート番号、portal は DAD 名です。

「Oracle Portal へようこそ」 ページが表示されます。

3. 「ログイン」 (右上) をクリックします。

「シングル・サインオン」 ページが表示されます。

4. ポータル管理者のユーザー名とパスワード (たとえば、portal) を入力します。

2.8.3.2 ポートレット・プロバイダの追加

Oracle9iAS にポートレット・プロバイダを追加するには:

1. 管理者として Oracle9iAS Portal にログインし、「プロバイダ」ポートレットから「ポートレット・プロバイダの登録」ページに移動します。このポートレットは、「Portal 設計時」 ページで表示できます。

2. 次の情報を入力します。

名前: Portal Provider で使用する名前です。スペースは使用できません。たとえば `sso_username_owb_browser` を入力します。

表示名: たとえば「Warehouse Builder Portal」と入力します。

タイムアウト: 100 秒以上を入力します。

タイムアウト・メッセージ: たとえば「プロバイダがタイムアウトしました。」と入力します。

実装スタイル: データベースです。

所有スキーマ: Oracle9i Warehouse Builder のスキーマ名を入力します。

パッケージ名: `wmp_provider` です。

その他のフィールドは、デフォルトの値を使用してください。

「OK」をクリックしてプロバイダを作成します。

2.8.3.3 ポートレット・リポジトリのリフレッシュ

ポートレット・リポジトリをリフレッシュするには:

1. Oracle9iAS Portal ホームページの「管理」タブをクリックします。
2. 「ポートレット・リポジトリ」というポートレットまでスクロールします。
3. 「ポートレット・リポジトリの更新」をクリックします。
4. 「リフレッシュ」をクリックします。

Oracle9i Warehouse Builder Browser のポートレットが、ポートレット表示モードで表示されます。これで、Oracle9i Warehouse Builder Design Repository を表示して SSO ユーザーにロールを割り当てることができます。

2.8.4 Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser の構成

Oracle9iAS Portal 内で Runtime Audit Browser を構成する手順は、この後の項で説明する 4 つの一般的なタスクで構成されます。

Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser を構成するための一般的なステップは、次のとおりです。

1. [OC4J インスタンスの作成](#) (2-36 ページ)
2. [Runtime Audit Browser アプリケーションの配布](#) (2-37 ページ)
3. [スキーマへのアプリケーションのバインド](#) (2-38 ページ)
4. [Portal での Runtime Audit Browser の表示](#) (2-40 ページ)

5. ネット・サービス名を使用した Oracle9i Warehouse Builder の構成 (2-41 ページ)

2.8.4.1 OC4J インスタンスの作成

Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser を構成するには、まず、Oracle Container for Java (OC4J) インスタンスを作成します。

OC4J インスタンスを作成するには：

1. 管理者として、Oracle9iAS 上の Oracle Enterprise Manager Web Site にログインします。

EM のデフォルトのポート番号は 1810 です。Oracle Application Server 10g がインストールされている場合は、1812 も使用できます。

デフォルトの EM 管理者ユーザーは、ias_admin です。

通常のパスワードは welcome1 です。

最初のページには、2 つのスタンドアロン・インスタンスが表示されます。1 つは Oracle9iAS インフラストラクチャのインストール時に作成され、もう 1 つは、中間層のインストール時に作成されています。

2. インスタンス名のリンクをクリックして、Application Server インスタンス（中間層）を選択します。

既存の OC4J インスタンスがすべて、ページ上に表示されます。

「OC4J インスタンスの作成」をクリックします。

3. 「OC4J インスタンスの作成」ページで、OC4J インスタンスの名前を指定します（owbb など）。

「作成」をクリックします。

作成された OC4J インスタンスは、該当する Application Server の「システム・コンポーネント」に表示されます。OC4J インスタンスは停止状態です。この後の手順で EAR ファイルを配布してから、OC4J インスタンスを起動します。

Oracle Application Server 10g がインストールされている場合は、ここで OC4J インスタンスの作成を終了できます。Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) がインストールされている場合は、この手順の他のステップを実行します。

4. **Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のみ：**自分の OC4J インスタンスのページで、「配布済みアプリケーション」→「デフォルト・アプリケーション」→「名前 default」を選択します。

「default」をクリックします。

5. **Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のみ：**この OC4J インスタンスの「アプリケーション default」ページで、「管理」→「プロパティ」を選択します。

「一般」をクリックします。

6. **Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のみ:** 「プロパティ」 ページの 「ライブラリ・パス」 見出しの下で、次の jar ファイルを削除します。

../../jlib/uix2.jar

../../jlib/share.jar

2.8.4.2 Runtime Audit Browser アプリケーションの配布

OC4J インスタンスを作成したら、Runtime Audit Browser アプリケーションを配布します。Runtime Audit Browser アプリケーションは、Oracle HTTP Server ポートとは異なるポートに配布します。

Runtime Audit Browser アプリケーションを配布するには:

1. OC4J インスタンスのページに戻ります。
「EAR ファイルの配布」をクリックします。
2. 配布ウィザードで、「次へ」をクリックします。
3. 「アプリケーションの選択」 ページで「参照」をクリックし、\$oracle_home/browserasst/ ディレクトリにある次のファイルを開きます。

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の場合: owbb.ear

Oracle Application Server 10g の場合: owbb_v904.ear

「アプリケーション名」 フィールドで、Warehouse Builder Browser に付けるアプリケーション名を入力します (My OWBB など)。

「親アプリケーション」 フィールドは、値 default のままにします。

「次へ」をクリックします。

4. 「Web モジュールの URL マッピング」 画面で、ブラウザ・アプリケーションの URL パインドを入力します。「/owbb」と入力します。これにより、ブラウザには、http://hostname:port/owbb/ でアクセスできます。

Oracle9i Warehouse Builder では、owbb の使用が予約されています。Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser の OC4J インスタンスが複数ある場合でも、一度にアクティブにできるのは 1 つだけです。

「終了」をクリックします。

5. 「サマリー」 画面で「配布」をクリックします。
6. owbb.ear が配布されたら、OC4J インスタンスのページに戻り、配布したばかりのアプリケーションの名前をクリックします。

2.8.4.3 スキーマへのアプリケーションのバインド

Runtime Audit Browser アプリケーションを配布した後、それをスキーマにバインドする必要があります。インストール先の Oracle9iAS のリリースに応じて、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) 用と Oracle Application Server 10g 用の 2 通りの手順があるので注意してください。

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のスキーマにアプリケーションをバインドするには：

1. OC4J インスタンスの、[第 2.8.4.2 項](#)で配布したアプリケーションの「アプリケーション」ページで、「管理」→「リソース」を選択します。
「データ・ソース」をクリックします。
2. 「データ・ソース」ページで「データ・ソースの追加」をクリックします。
3. 「データ・ソースの追加」ページで、次の情報を入力してデータ・ソースを作成します。
「名前」、「説明」、「スキーマ」、「ユーザー名」、「パスワード」のみ、値を変更できます。

名前：名前を入力します (owbb_demo など)。

説明：説明を入力します (My Oracle Warehouse Builder Browser demo など)。

データ・ソース・クラス名：「com.evermind.sql.OrionCMTDataSource」と入力します。「com.evermind.sql.DriverManagerDataSource」も入力できますが、これは Linux では動作しません。

スキーマ：Browser をインストールしたスキーマです (owbb_demo など)。

ユーザー名：Browser Assistant の実行後に作成したユーザー名です (通常はスキーマ名。owbb_demo など)。

パスワード：Warehouse Builder Browser スキーマのパスワードです (owbb_demo など)。

JDBC URL：jdbc:oracle:thin:@host_name_of_the_database_into_which_you_put_your_owbb_schema:database_port_number:database_SIDを入力します。

たとえば、

「jdbc:oracle:thin:@dwsun21.us.oracle.com:1521:iasdb」と入力します。

SID ではなく Oracle サービス名を指す JDBC URL の場合は、次の形式を使用します。

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=your_host) (PORT=1521)) (CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=your_oracle_service_name)))
```

JDBC ドライバ：oracle.jdbc.driver.OracleDriver を入力します。

ロケーション：「jdbc/owbb」と入力します。

トランザクション関連 (XA) バージョンの場所: 「jdbc/owbb」と入力します。

EJB 対応バージョンの場所: 「jdbc/owbb」と入力します。

「作成」をクリックします。

4. 入力した情報が正しければ確認ページが表示され、データ・ソースを有効にするためにサーバーを再起動するかどうか尋ねられます。

「はい」をクリックします。

OC4J インスタンスが再起動します。

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.4) のスキーマにアプリケーションをバインドするには:

1. OC4J インスタンスの、[第 2.8.4.2 項](#)で配布したアプリケーションの「アプリケーション」ページで、「管理」→「リソース」を選択します。

「データ・ソース」をクリックします。

2. 「データ・ソース」ページで「作成」をクリックします。

3. 「データ・ソースの追加」ページで、次の情報を入力してデータ・ソースを作成します。

「名前」、「説明」、「スキーマ」、「ユーザー名」、「パスワード」のみ、値を変更できます。

名前: 名前を入力します (owbb_demo など)。

説明: 説明を入力します (「My Oracle Warehouse Builder Browser demo」など)。

データ・ソース・クラス名: 「com.evermind.sql.OrionCMTDataSource」と入力します。

JDBC URL: jdbc:oracle:thin:@host_name_of_the_database_into_which_you_put_your_owbb_schema:database_port_number:database_SIDを入力します。

たとえば、

「jdbc:oracle:thin:@dwsun21.us.oracle.com:1521:iasdb」と入力します。

SID ではなく Oracle サービス名を指す JDBC URL の場合は、次の形式を使用します。

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=your_host) (PORT=1521)) (CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=your_oracle_service_name)))
```

JDBC ドライバ: oracle.jdbc.driver.OracleDriver を入力します。

スキーマ: このフィールドは空白のままにします。

ユーザー名: 「クリアテキストの使用」 オプションを選択します。Browser Assistant の実行後に作成したユーザー名を入力します (通常はスキーマ名。owbb_demo など)。

パスワード: Warehouse Builder Browser スキーマのパスワードです (owbb_demo など)。

「JNDI の場所」の下に次のように入力します。

ロケーション: 「jdbc/owbb」と入力します。

トランザクション関連 (XA) の場所: 「jdbc/owbb」と入力します。

EJB 対応バージョンの場所: 「jdbc/owbb」と入力します。

他のフィールドには、デフォルト値を使用します。

「作成」をクリックします。

4. 入力した情報が正しければ確認ページが表示され、データ・ソースを有効にするためにサーバーを再起動するかどうか尋ねられます。

「はい」をクリックします。

OC4J インスタンスが再起動します。

2.8.4.4 Portal での Runtime Audit Browser の表示

OC4J インスタンスの再起動後、Runtime Audit Browser を Oracle9iAS Portal からアクセスできるようにします。

Portal で Runtime Audit Browser を表示するには:

1. ポートレットを Oracle9iAS Portal に登録するには、管理者として Oracle9iAS Portal にログインします。
2. 「ビルダー」をクリックし、「プロバイダ」ポートレットの「ポートレット・プロバイダの登録」をクリックします。
3. 次の情報を入力します。

名前: 任意の名前を入力します (owb_runtime_audit_viewer など)。空白は使用できません。

表示名: 表示する名前を入力します (OWB Runtime Audit Browser など)。

タイムアウト: この値は、秒単位の大きな数に設定します (10000 秒など)。

タイムアウト・メッセージ: 通常のタイムアウト・メッセージは「RAB portlet provider has timed out」です。

実装スタイル: デフォルト (web) を使用します。

4. 「一般プロパティ」 ページで、次の情報を入力します。

「URL」に入力します。プロバイダ URL は、ステップ 4 の URL マッピングで入力した値によって決まります。たとえば、ステップ 4 で URL バインドを /owbb にすると、プロバイダ URL は http://hostname:port/owbb/providers/ になります。

URL 入力ボックスの下「Portal と同じ Cookie ドメインの Web プロバイダ」オプションを選択します。

「ユーザーは、Web プロバイダ・アプリケーション内とシングル・サインオン認証内とで、同じ識別情報を保持します。」を選択します。

「ユーザー / セッション情報」で、「ユーザー」を選択し、「ログイン頻度」を「ユーザー・セッションごとに 1 回」に設定します。

「Portal ユーザー固有のセッション情報が必要です。」を選択します。

「次へ」をクリックします。

5. プロバイダへのアクセス権をポータル・ユーザーに付与するには、「アクセスを許可」ページで「権限付与者」ボックスにユーザー名を入力し、権限を選択して、「追加」をクリックします。

「終了」をクリックします。

6. ポータルの標準的な手順に従い、作成したばかりのプロバイダのページに **Oracle Warehouse Builder Runtime Audit Browser** ポートレットを追加します。

2.8.4.5 ネット・サービス名を使用した Oracle9i Warehouse Builder の構成

Oracle9iAS に Runtime Audit Browser を統合した場合は、次の手順に従い、Runtime Audit Browser の「データベース・リンクの作成」ページで「ネット・サービス名」オプションを使用可能にします。まず、ネット・サービス名を追加してから、中間層で Oracle9iAS OPMN プロセスを開始します。

Net Manager を使用してサービス名を追加するには：

1. インフラストラクチャの ORACLE_HOME と中間層の ORACLE_HOME の両方から、サービス名を追加する必要があります。

まず、インフラストラクチャの ORACLE_HOME に移動し、この後の手順に従います。

次に、中間層の ORACLE_HOME に移動し、この後の手順を繰り返します。

2. Net Manager を起動します。

Windows の場合：「スタート」→「プログラム」→「Oracle9iAS のインストール先ディレクトリ名」→「Configuration and Migration Tools」→「Net Manager」を選択します。

UNIX の場合: `ORACLE_HOME/bin/netmgr` を起動します。

3. 「ローカル」 → 「サービス・ネーミング」を選択します。
4. 新しいローカルのサービス名を追加します。

サービス名を手動で追加するには:

1. `ORACLE_HOME/network/admin/tnsnames.ora` を編集し、新しいエントリを追加します。次に例を示します。

```
DWSUN42 =
(DESCRIPTION =
  (ADDRESS_LIST =
    (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP) (HOST = dwsun42) (PORT = 1521))
  )
  (CONNECT_DATA =
    (SERVICE_NAME = dev920.us.oracle.com)
  )
)
```

2. このファイルを保存し、閉じます。

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) がインストールされている場合は、次の手順を実行して、中間層のホストでのみ OC4J インスタンスを再起動します。Oracle Application Server 10g がインストールされている場合は、次の手順は必要ありません。

中間層のホストで OC4J インスタンスを再起動するには (Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のみ):

1. `$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall` を実行して、OPMN プロセスを停止します。
2. デフォルトの OC4J ライブラリ・パスを OWBB インスタンスに渡すように、`$ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml` を編集します。

```
<ias-instance xmlns="http://www.oracle.com/ias-instance">
.....
<process-manager>
.....
<oc4j maxRetry="3" instanceName="home" numProcs="1">
.....
</oc4j>
.....
</oc4j>
<oc4j instanceName="owbb" gid="owbb">
<config-file path="/usr/iasv2_portal/j2ee/owbb/config/server.xml"/>
<oc4j-option value="-properties"/>
<port ajp="3001-3100" rmi="3101-3200" jms="3201-3300"/>
<environment>
<prop name="%LIB_PATH_ENV%" value="%LIB_PATH_VALUE%"/>
```

```
<prop name="LD_LIBRARY_PATH" value="/usr/iasv2_portal/lib"/>
</environment>
</oc4j>
<log-file path="/usr/iasv2_portal/opmn/logs/ipm.log" level="3"/>
</process-manager>
</ias-instance>
```

この例では、ハイライトされたテキストが opmn.xml に追加されます。これは、Oracle9i Warehouse Builder インスタンスの作成後に、OC4J によって作成されます。

この例では、**/usr/iasv2_portal** が中間層の ORACLE_HOME です。

3. Windows の場合のみ、ORACLE_HOME/opmn/config/opmn.xml ファイルにある、関連の Oracle9i Warehouse Builder Browser インスタンスに、次のコードを追加します。

```
<environment>
<prop name="%LIB_PATH_ENV%" value="%LIB_PATH_VALUE%"/>
<prop name="PATH" value="<path to oracle home>/bin"/>
</environment>
```

4. ホスト・マシンを再起動します。
5. \$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall を実行して、OPMN プロセスを再び開始します。

Oracle Application Server 10g がインストールされている場合は、次の手順を実行して構成を確認します。

構成を確認するには (Oracle9iAS リリース 2 (9.0.4) のみ) :

1. オンラインで Oracle Enterprise Manager にアクセスします。
2. 新しく作成した OWBB インスタンスを選択し、「サーバー・プロパティ」→「環境変数」を選択します。
3. 対応する中間層の ORACLE_HOME のライブラリ・ディレクトリを指す、新しい環境変数 LD_LIBRARY_PATH を追加します (/usr/iasv2_portal/lib など)。

2.9 ステップ 8. (オプション) サードパーティの Name and Address データのインストール

Oracle9i Warehouse Builder では、Name and Address 演算子を使用して、データの Name and Address のクレンジングを実行できます。Name and Address 演算子は、Name and Address ソース・データにあるエラーや不整合を識別し、修正します。この演算子は、入力データを、Name and Address クレンジング・ソフトウェアのサードパーティ・ベンダーから提供されたデータ・ライブラリと比較し、不整合を識別します。このデータ・ライブラリは、ベンダーから直接購入してください。

データ・ライブラリをインストールする場合は、ベンダーから提供される、Name and Address クレンジング・ソフトウェアのインストール手順を参照してください。Name and Address クレンジング・ソフトウェアの認定プロバイダのリストは、1-13 ページの第 1.6 項「動作要件」を参照してください。Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.0.3 または 9.0.4 を Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 にアップグレードする場合は、『Oracle9i Warehouse Builder リリース・ノート』を参照してください。

Name and Address のクレンジングを利用するには：

1. 1-13 ページの第 1.6 項「動作要件」で紹介された認定ベンダーからデータ・ライブラリを購入します。
2. このガイドの手順に従い、Oracle9i Warehouse Builder をインストールします。
3. ベンダーから提供された手順に従い、データ・ライブラリをインストールし、このライブラリにアクセスします。
4. Name and Address 演算子を使用してマッピングを設計し、Name and Address データをクレンジングします。Name and Address 演算子を使用したマッピングの設計方法は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

リリース 9.2 へのアップグレードとデータの移行

この章では、Oracle9i Warehouse Builder の旧バージョンを使用して構築された既存システムを Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 にアップグレードする手順を説明します。現行バージョンにアップグレードする場合、ソフトウェアのアップグレード、メタデータのアップグレード、ランタイム・システムの移行の3つの主なタスクが必要です。Oracle9i Warehouse Builder の旧バージョンとそのリポジトリを削除する前に、新しいバージョンをテストします。

この章では、次の項目について説明します。

- [概要 \(3-2 ページ\)](#)
- [別の ORACLE_HOME への Oracle9i Warehouse Builder のインストール \(3-3 ページ\)](#)
- [既存の Oracle9i Warehouse Builder Design Repository からのメタデータのエクスポート \(3-3 ページ\)](#)
- [設計メタデータのインポートまたはアップグレード \(3-4 ページ\)](#)
- [新しいターゲット・スキーマへのデータの移行 \(3-7 ページ\)](#)
- [新しいターゲット・スキーマへのマッピングの配布 \(3-11 ページ\)](#)
- [新機能を利用するためのマッピング構成の更新 \(3-11 ページ\)](#)
- [オプション: Oracle9i Warehouse Builder の旧バージョンの削除 \(3-12 ページ\)](#)

3.1 概要

現在のリポジトリをアップグレードする場合の一般的な手順を次に示します。

1. 3-3 ページの第 3.2 項「別の ORACLE_HOME への Oracle9i Warehouse Builder のインストール」の手順を確認してから、既存のソフトウェアを削除せずに、別の ORACLE_HOME に Oracle9i Warehouse Builder の新バージョンをインストールします。

インストール手順の詳細は、第 2 章「Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのインストール」を参照してください。これらの手順に従うと、Design Repository、Runtime Repository、および 1 つ以上のターゲット・スキーマも新しく作成できます。移行のために、これらの新しいリポジトリとスキーマが必要です。
2. 3-3 ページの第 3.3 項「既存の Oracle9i Warehouse Builder Design Repository からのメタデータのエクスポート」の手順に従い、既存の Oracle9i Warehouse Builder プロジェクトをすべて、Metadata Loader (MDL) ファイルにエクスポートします。
3. 3-4 ページの第 3.4 項「設計メタデータのインポートまたはアップグレード」の手順に従い、設計メタデータをアップグレードします。Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.0.3 以下からアップグレードする場合は、MDL ファイルを Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 にインポートする必要があります。これらは、インポートの一環として自動的にアップグレードされます。
4. 以前のランタイム環境から、ステップ 1 で作成した新しいターゲット・スキーマにデータを移行します。移行には 3 つの方法があります。3-7 ページの第 3.5 項「新しいターゲット・スキーマへのデータの移行」の手順に従ってください。
5. 3-11 ページの第 3.6 項「新しいターゲット・スキーマへのマッピングの配布」の手順に従い、Oracle9i Warehouse Builder の新しいバージョンですべてのマッピングを再配布し、テストします。
6. Oracle9i Warehouse Builder の新しいバージョンで、各マッピングの構成を更新し、このリリースの新機能を使用できるようにします。3-11 ページの第 3.7 項「新機能を利用するためのマッピング構成の更新」の手順に従ってください。
7. オプション：旧システムで使用していたバージョンの Oracle9i Warehouse Builder の削除手順を使用して、旧システムを段階的に削除します。この手順は、ステップ 6 と並行して実行できます。3-12 ページの第 3.8 項「オプション：Oracle9i Warehouse Builder の旧バージョンの削除」の手順に従ってください。

3.2 別の ORACLE_HOME への Oracle9i Warehouse Builder のインストール

既存の Oracle9i Warehouse Builder システムと並行して新しい Oracle9i Warehouse Builder システムをインストールするには：

1. Oracle9i Warehouse Builder ソフトウェアの新しいバージョンを別の ORACLE_HOME にインストールします。

第 2 章「Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのインストール」のインストール手順に従ってください。

ORACLE_HOME の詳細は、1-13 ページの第 1.7 項「共存 : ORACLE_HOME に関する考慮事項」を参照してください。

2. Oracle9i Warehouse Builder の Design Repository、Runtime Repository、および既存システムに現在ある数と同数のターゲット・スキーマを新しく作成します。

3.3 既存の Oracle9i Warehouse Builder Design Repository からのメタデータのエクスポート

古いリポジトリは、アップグレード処理がすべて実行され、テストが終了するまで残しておきます。移行する各プロジェクトまたはコレクションを Metadata Loader (MDL) ファイルにエクスポートします。メタデータのエクスポートの詳細は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

注意： アップグレードの際は、Metadata Loader (MDL) を使用してメタデータのエクスポートとインポートを実行する必要があります。
Oracle9i Warehouse Builder のアップグレードでは、バック・エンド・データベース・コマンドを使用してエクスポートまたはインポートされたファイルはサポートされません。

メタデータを MDL ファイルにエクスポートするには：

1. Oracle9i Warehouse Builder Client の旧バージョンを使用して、エクスポートするプロジェクトを選択します。
2. 「プロジェクト」メニューの「メタデータのエクスポート」を選択します。

Metadata Loader によって、エクスポートされた MDL ファイルにパスとファイル名が割り当てられます。エクスポートしたすべてのデータについて、パスとファイル名を記録します。メタデータのエクスポートの詳細は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

3.4 設計メタデータのインポートまたはアップグレード

この後のアップグレードおよび移行の処理内容は、アップグレードする Oracle9i Warehouse Builder のバージョンによって異なります。Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.0.3 以下からアップグレードする場合は、次の手順に従います。

Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.0.3 以下からアップグレードする場合：

1. 第 3.4.1 項「新しい Oracle9i Warehouse Builder Design Repository へのメタデータのインポート」の手順に従ってください。
2. 「監査データをリリース 9.0.4 からリリース 9.2 の Runtime Repository に移行するには：」の手順を省略します。
3. 第 3.5 項「新しいターゲット・スキーマへのデータの移行」に進みます。

この手順は、Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.0.4 からアップグレードする場合のオプションです。Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.0.3 以下からアップグレードする場合は、第 3.4.1 項「新しい Oracle9i Warehouse Builder Design Repository へのメタデータのインポート」に進んでください。

Oracle9i Warehouse Builder には、既存のリリース 9.0.4 の Design Repository に対して実行できるスクリプトが用意されています。このスクリプトによって、Design Repository のバージョンだけでなく、設計メタデータもアップグレードされます。このスクリプトを実行すると、Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 から既存の Design Repository に接続できます。

リリース 9.0.4 の Design Repository をアップグレードするには：

1. SQL*Plus で、SYSDBA として SYS アカウントに接続します。次に例を示します。

```
connect sys/password@db_connect_string as sysdba;
```

2. 次のスクリプトを実行します。

Windows の場合： ORACLE_HOME\owb\reposasst\upg\upg904to905.sql

UNIX の場合： ORACLE_HOME/owb/reposasst/upg/upg904to905.sql

この文で、ORACLE_HOME は、Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 をインストールした ORACLE_HOME のパスです。

3. リリース 9.0.4 の Design Repository に関する値を入力します。

ホスト名：Design Repository をホスティングする（あるいは、ホスティングする予定の）データベースを実行しているシステムの名前。

ポート番号：Oracle9i Warehouse Builder がホスト・システム上のデータベースにアクセスするときに使用するポート番号。デフォルトは 1521 です。

Oracle サービス名: TNS 接続記述子に含まれるネットワーク・アドレスにマッピングされる、短縮された便利な名前。ユーザーは、該当するサービス名を知っていれば、TNS 接続を実行できます。

既存リポジトリのユーザー名: リリース 9.0.4 の Design Repository のユーザー名。

既存リポジトリのパスワード: リリース 9.0.4 の Design Repository のパスワード。

索引の表領域: リリース 9.0.4 の Design Repository の索引データのデフォルト表領域。

4. 次のアップグレード・ログで、エラーがないかどうか確認します。

```
ORACLE_HOME\owb\reposasst\upg\log.txt
```

5. メタデータのアップグレードが完了すれば、Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 でこの既存の Design Repository に接続できるようになります。第 3.4.1 項の手順を省略し、「[監査データをリリース 9.0.4 からリリース 9.2 の Runtime Repository に移行するには:](#)」に進みます。

3.4.1 新しい Oracle9i Warehouse Builder Design Repository へのメタデータのインポート

新しいソフトウェアをインストールしたら、設計メタデータを新バージョンの Oracle9i Warehouse Builder にアップグレードおよびインポートする必要があります。メタデータのインポートの詳細は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

注意: Oracle9i Warehouse Builder のアップグレードでは、バック・エンド・データベース・コマンドを使用してエクスポートまたはインポートされたファイルはサポートされません。

新しい Oracle9i Warehouse Builder Design Repository にメタデータをインポートおよびアップグレードするには:

1. 新しい Oracle9i Warehouse Builder コンソールで、「プロジェクト」メニューから「メタデータのインポート」→「ファイル」を選択します。
2. 以前のリポジトリからエクスポートしたデータのパスとファイル名を指定します。「インポート」を選択します。

このファイルが現行バージョンの Oracle9i Warehouse Builder のものであれば、「メタデータのインポート進行状況」パネルが表示されます。このダイアログには、インポートまたはスキップされたオブジェクト・タイプとそのタイプごとの数が表示されます。インポート処理の詳細を表示するには、「ログ・ファイルの表示」をクリックします。

ファイルが Oracle9i Warehouse Builder の旧バージョンのものであることが検出されると、「Metadata のアップグレードの確認」ダイアログが表示されます。この場合、Oracle9i Warehouse Builder は自動的に、MDL ファイルを現行バージョンにアップグレードしてからインポートします。

3. 「OK」をクリックすると、ファイルが自動的に現行バージョンにアップグレードされ、Oracle9i Warehouse Builder にインポートされます。「Metadata Loader のアップグレード・ユーティリティ」ダイアログが表示されます。ここにファイル名とログ名を入力します。

移行済ファイル名: アップグレードされた新しい MDL ファイルのパスと名前を指定します。「参照」ボタンをクリックして、ファイルの移行先を指定します。

ログ・ファイル: アップグレード処理中に MDL で作成されるログのパスと名前を指定します。「参照」ボタンをクリックして、ファイルの移行先を指定します。

アップグレードとインポートを続行する場合は、「OK」をクリックします。

ファイルのアップグレードとインポートを中止する場合は、「取消」をクリックします。MDL File Upgrade Utility を使用すると、ファイルを手動でアップグレードできます。詳細は、[付録 C 「MDL File Upgrade Utility を使用したメタデータのアップグレード」](#)を参照してください。

Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.0.4 から現行リリースにアップグレードする場合のみこの手順を実行します。リリース 9.0.3 以下からアップグレードする場合は、この項の手順を省略して第 3.5 項「[新しいターゲット・スキーマへのデータの移行](#)」に進みます。

Oracle9i Warehouse Builder には、監査データをリリース 9.0.4 の Runtime Repository からリリース 9.2 の Runtime Repository に移行するスクリプトが含まれます。このスクリプトは、配布監査データを含むすべての監査データを移行します。したがって、新しい Runtime Repository のデプロイメント・マネージャでは、Oracle9i Warehouse Builder の旧バージョンを使用して配布されたオブジェクトについて正しいステータスが表示されます。さらに、Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.0.4 で実行した、以前の結果の監査データにもアクセスできます。

この手順では、新しい Runtime Access User を使用するか、既存のリリース 9.0.4 の Runtime Access User を指定できます。アップグレード・スクリプトは、リリース 9.0.4 の Runtime Repository に関連付けられたすべてのユーザーを変換して、リリース 9.2 の Runtime Repository に関連付けられるようにします。

監査データをリリース 9.0.4 からリリース 9.2 の **Runtime Repository** に移行するには：

1. SQL*Plus で、SYSDBA として SYS アカウントに接続します。次に例を示します。

```
connect sys/password@db_connect_string as sysdba;
```

2. 次のスクリプトを実行します。

Windows の場合：ORACLE_HOME¥owb¥rtp¥sql¥upgrade_9_0_4_runtime_repos_to_9_0_5.sql 904_repository_schema 92_repository_schema

UNIX の場合：ORACLE_HOME/owb/rtp/sql/upgrade_9_0_4_runtime_repos_to_9_0_5.sql 904_repository_schema 92_repository_schema

この文で、ORACLE_HOME は、Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 をインストールした ORACLE_HOME のパスです。

たとえば、リリース 9.0.4 の Runtime Repository スキーマが RTR904 であり、新しいスキーマが RTR92 であれば、次のスクリプトを実行します。

```
ORACLE_HOME¥owb¥rtp¥sql¥upgrade_9_0_4_runtime_repos_to_9_0_5.sql RTR904  
RTR92
```

UNIX の場合は、バックスラッシュ (¥) をスラッシュ (/) に置き換えます。

3. データを移行した後は、Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 を使用してすべてのオブジェクトを配布したかのように、リリース 9.2 で配布監査を使用できます。

3.5 新しいターゲット・スキーマへのデータの移行

以前のランタイム環境から、新しいソフトウェアのインストール時に作成した新しいターゲット・スキーマにデータを移行する方法は、次のように 3 つあります。

- オプション 1. Oracle9i Warehouse Builder インタフェースでのデータベース・オブジェクトの再生成
- オプション 2. Oracle データベース・サーバーでのデータベース・オブジェクトのエクスポートとインポート
- オプション 3. 新しいターゲット・スキーマでの元のオブジェクトのシノニムの作成

3.5.1 オプション 1. Oracle9i Warehouse Builder インタフェースでのデータベース・オブジェクトの再生成

この方法では、1 回の移行に Oracle9i Warehouse Builder インタフェースを使用します。この方法は、Oracle9i Warehouse Builder の初級および中級ユーザーにお勧めします。ただし、古い Oracle9i Warehouse Builder 環境が推奨セットアップに準拠していることが前提です。

表 3-1 では、この方法の利点と欠点を示します。

表 3-1 オプション 1 の利点と欠点

結論	説明
利点	■ 完全性 : この方法では、移行が完全に行われます。古いシステムを完全に削除できます。 ■ 簡単明瞭 : 完全に移行するための最も簡単な方法です。 ■ 配布監査が最新です。
欠点	■ 時間がかかる : 手間がかかります。 ■ コピー環境が必要 : 古いシステムを削除するまで、データを複製しておく必要があります。

Oracle9i Warehouse Builder インタフェースを使用してデータを移行するには：

1. アップグレードされた Oracle9i Warehouse Builder Client のデプロイメント・マネージャで、データベース・オブジェクトの新しいロケーションを登録します。
2. 一度に 1 つずつ、各ターゲット・モジュールを選択し、「デフォルト・アクション」をクリックします。各オブジェクトはこのバージョンに対しては新規なので、デフォルト・アクションは作成です。
3. 「生成 / 配布」をクリックします。ステップ 4 ～ 7 を実行して、データを移行します。
4. 古いターゲット・スキーマを指すソース・モジュールを作成します。
5. ソースである古いターゲット・スキーマから抽出し、新しいターゲット・スキーマ・オブジェクトにロードする、単純なマッピングを作成します。
6. これらの移行マッピングを配布し、1 回だけ実行します。1 対 1 の移行が行われたことをテストで確認します。
7. テストの結果に問題がなければ、その 1 回だけの移行マッピングと、古いターゲット・スキーマを指すソース・モジュールを削除します。

ロケーションの登録、ソース・モジュールとターゲット・モジュールの作成、マッピングの作成および実行などの詳細な手順は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

3.5.2 オプション 2. Oracle データベース・サーバーでのデータベース・オブジェクトのエクスポートとインポート

この方法は、Oracle9i Warehouse Builder の上級ユーザーにお勧めします。Oracle9i Warehouse Builder の適切なデータベース・オブジェクトをエクスポートおよびインポートすることにより、データ移行をバック・エンドで実行します。

表 3-2 では、この方法の利点と欠点を示します。

表 3-2 オプション 2 の利点と欠点

結論	説明
利点	■ 完全性: この方法では、移行が完全に行われます。古いシステムを完全に削除できます。 ■ 高速: 最短時間で完全に移行できます。
欠点	■ 複雑性: Oracle9i Warehouse Builder データベース・オブジェクトについての詳細な知識が必要です。 ■ 配布監査結果が不正確: 正確な配布監査データが得られません。既存のデータベース・オブジェクトが新規であるように示されます。この欠点は、Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.0.3 以下からアップグレードする場合にのみ当てはまります。

バック・エンドでデータベース・オブジェクトをエクスポートおよびインポートすることによって移行を実行するには:

Oracle データベース・サーバーのドキュメントの指示に従い、データベース・オブジェクトをエクスポートおよびインポートします。

自分で作成したデータベース・オブジェクトだけを使用し、Oracle9i Warehouse Builder で生成された Oracle9i Warehouse Builder オブジェクトは使用しないようにします。そのためには、データを単純に移行してから、制約、索引、ディメンションなど、データベースで生成できるオブジェクトを再生成します。

次のようなオブジェクトは、エクスポートまたはインポートしないでください。

- ランタイム監査表やランタイム監査パッケージ。古い Oracle9i Warehouse Builder 環境が標準に準拠していれば、監査データに関連する表やパッケージは自分のランタイム・スキーマにあります。
- 名前が **WB** で始まるオブジェクト。このようなオブジェクトは、Oracle9i Warehouse Builder で生成されます。

データの移行後、すべてのマッピングを再生成します。

3.5.3 オプション 3. 新しいターゲット・スキーマでの元のオブジェクトのシノニムの作成

この方法を使用すると、元のデータベース・オブジェクトを指すシノニムを新しいターゲット・スキーマに簡単に作成できます。新しいターゲット・スキーマには、実際のデータのかわりに、再生成されたマッピングと、データを格納するデータベース・オブジェクトのポインタだけが格納されます。

表 3-3 では、この方法の利点と欠点を示します。

表 3-3 オプション 3 の利点と欠点

結論	説明
利点	■ 高速: 完全な移行が不要であれば、短時間で実行できます。
欠点	■ 不完全性: この方法では移行が完全には行われないので、古いシステムを完全に削除できません。 ■ 配布監査結果が不正確: 正確な配布監査データが得られません。既存のデータベース・オブジェクトが新規であるように示されます。この欠点は、Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.0.3 以下からアップグレードする場合にのみ当てはまります。

既存のオブジェクトのシノニムを作成して移行するには：

Oracle データベース・サーバーのドキュメントの指示に従い、古い環境にある既存のデータベース・オブジェクトを指すシノニムを新しいターゲット・スキーマに作成します。

自分で作成したデータベース・オブジェクトだけを使用し、Oracle9i Warehouse Builder で生成された Oracle9i Warehouse Builder オブジェクトは使用しないようにします。そのためには、データベース・オブジェクトのシノニムを単純に作成してから、マッピングを再生成します。

たとえば、監査表や監査パッケージのシノニムは作成しないでください。古い Oracle9i Warehouse Builder 環境が標準に準拠していれば、監査データに関連する表やパッケージは自分のランタイム・スキーマにあります。

3.6 新しいターゲット・スキーマへのマッピングの配布

Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.0.3 以下からアップグレードする場合は、マッピングを再配布する必要があります。アップグレードされた Oracle9i Warehouse Builder のバージョンでは、ランタイム・アーキテクチャが変更されます。この変更を生成コードに反映するには、マッピングを再配布します。マッピングの再配布後は、古いマッピングを使用しないでください。

たとえば、再配布によって、マッピングは確実に、正しい監査パッケージを参照するようになります。さらに、再配布によって、Oracle9i Warehouse Builder の新しいバージョンで新しいコード生成機能を利用できるようになります。

マッピングの配布手順は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。再配布後、マッピングをテストして、引き続き動作することを確認してください。

3.7 新機能を利用するためのマッピング構成の更新

マッピングの再配布後、各マッピングの構成を更新して、アップグレードされた Oracle9i Warehouse Builder のバージョンで新機能を利用できるようにします。

この項の手順を省略するかどうかは、次の基準で判断してください。

- Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.0.3 以下からアップグレードする場合は、この項の手順を実行する必要があります。

マッピング構成を更新するには、Oracle9i Warehouse Builder インタフェースを使用するか、Oracle Metabase (OMB) Plus スクリプト・ユーティリティで、すべてのマッピングを更新するスクリプトを実行します。

Oracle9i Warehouse Builder インタフェースを使用して各マッピングの構成を更新するには：

1. アップグレードされた Oracle9i Warehouse Builder Client で、各マッピングを右クリックし、「構成」を選択します。
2. 「構成プロパティ」ボックスで、「ソースとターゲット」ノードを展開します。
3. 「ソースとターゲット」ノードで、次の操作を実行します。
 - 「スキーマ」構成パラメータ・フィールドの内容を削除します。
 - 「データベース・リンク」構成パラメータ・フィールドの内容を削除します。
4. 構成プロパティを変更した各マッピングを再配布して、新しいコードを生成します。マッピングの配布手順は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Oracle Technology Network に用意されている、すべてのマッピングを更新するスクリプトを実行することもできます。この更新スクリプトの名前は UpdMapConfig.tcl です。

スクリプトを使用して各マッピングの構成を更新するには：

1. http://otn.oracle.co.jp/sample_code/index.html から Oracle9i Warehouse Builder のサンプルコード UpdMapConfig.tcl ファイルをダウンロードします。
2. Oracle Metabase (OMB) Plus を起動します。
3. 新しい設計リポジトリに接続します。
4. OMB Plus のコンテキストを、正しいプロジェクトとモジュールに変更します。このスクリプトは、モジュールごとに実行する必要があります。
5. OMB Plus でスクリプトを実行します。

OMB Plus プロンプトで source を入力し、その後にスクリプトのロケーションを二重引用符で囲んで入力します。各バック・スラッシュに対し、2 つ目のバック・スラッシュを入力して、1 つ目のバック・スラッシュをエスケープします。たとえば、スクリプトが c:¥temp にある場合は、次のように入力します。

```
source "c:¥¥temp¥¥UpdMapConfig.tcl"
```

6. OMB Plus で次のコマンドを実行して、マッピングを更新し、設計リポジトリに変更をコミットします。

```
owb_reset_mapping_conns
```

```
OMBCOMMIT
```

OWBCC コマンドを使用して他のターゲット・モジュールに移動し、owb_reset_mapping_conns コマンドを再び実行して、この手順を繰り返します。

7. 構成プロパティを変更した各マッピングを再配布して、新しいコードを生成します。マッピングの配布手順は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

3.8 オプション : Oracle9i Warehouse Builder の旧バージョンの削除

アップグレードのテストが完了し、動作に問題がなければ、古いシステムを段階的に削除できます。この手順は、[第 3.7 項「新機能を利用するためのマッピング構成の更新」](#)の手順と並行して実行できます。

注意：「新しいターゲット・スキーマへのデータの移行」で「[オプション 3. 新しいターゲット・スキーマでの元のオブジェクトのシノニムの作成](#)」の手順を実行した場合は、古いシステムをむやみに削除しないでください。作成したシノニムが指しているデータベース・オブジェクトを削除しないでください。

古いシステムを段階的に削除するには：

1. バック・エンドで作成したデータベース・オブジェクトを削除します。詳細は、Oracle データベース・サーバーのドキュメントを参照してください。
2. 旧バージョンの Oracle9i Warehouse Builder ソフトウェアを削除します。削除するバージョンの Oracle9i Warehouse Builder に付属している削除手順を実行してください。

Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントの削除

この章では、Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントを削除する手順を説明します。複数またはすべてのコンポーネントを削除する場合は、この章で説明する順序に必ず従ってください。

この章では、実際の順序に合わせて削除ステップを記載します。

- [ステップ 1. Oracle9iAS からの Design Browser および Runtime Audit Browser の削除 \(4-2 ページ\)](#)
- [ステップ 2. Oracle9i Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・オブジェクトの削除 \(4-3 ページ\)](#)
- [ステップ 3. Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository オブジェクトの削除 \(4-4 ページ\)](#)
- [ステップ 4. Oracle9i Warehouse Builder Design Repository オブジェクトの削除 \(4-5 ページ\)](#)
- [ステップ 5. Oracle9i Warehouse Builder や他の Oracle ソフトウェアの削除 \(4-5 ページ\)](#)

4.1 ステップ 1. Oracle9iAS からの Design Browser および Runtime Audit Browser の削除

Oracle9i Warehouse Builder Design Browser または Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser を Oracle9iAS に統合した場合のみ、この手順を実行します。Oracle9i Warehouse Builder Browser Assistant を実行してこれらのブラウザをインストールしていない場合は、この項の手順を実行する必要はありません。

これらのブラウザを Oracle9iAS にインストールするための第 2.8 項「[ステップ 7. \(オプション\) Oracle9iAS への Oracle9i Warehouse Builder Browser の統合](#)」の手順を実行していない場合は、Design Browser と Runtime Audit Browser のクライアントのみを実行しています。これらのブラウザ・クライアントのインストールおよび削除は、Oracle Universal Installer で Design Time をインストールするときに自動的に行われます。

Oracle9iAS から Oracle9i Warehouse Builder Browser オブジェクトを削除するには：

1. Oracle9i Warehouse Builder Browser Assistant を起動します。
Windows の場合：「スタート」→「プログラム」→「OWB_HOME」→「Warehouse Builder」→「OWB Browser Assistant」を選択します。
UNIX の場合：シェルを起動し、次のロケーションに移動します。
`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。
`cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix`
次に `browsersasst.sh` を実行します。
2. 「Warehouse Builder Browser Assistant: ようこそ」 ページで「次へ」 をクリックします。
3. 「OWB Browser Assistant: 操作の選択」 ページで「OWB Design Browser と OWB Runtime Browser を削除します」を選択します。

ウィザードの指示に従って、データベースから Oracle9i Warehouse Builder Browser オブジェクトを削除します。

4.2 ステップ 2. Oracle9i Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・オブジェクトの削除

ターゲット・スキーマ・ユーザーを削除する場合は、まずそのユーザーからターゲット・スキーマ・オブジェクトを削除する必要があります。その後、SQL*Plus を使用してユーザーを削除できます。

警告： ターゲット・スキーマを削除すると、ウェアハウス・オブジェクトと、ウェアハウス・ジョブを実行するオブジェクトが削除されます。ターゲット・スキーマ・オブジェクトを削除する場合は、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant ではなく、Oracle Enterprise Manager の使用をお勧めします。

Oracle9i Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・オブジェクトを削除するには：

1. Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant を起動します。

Windows の場合：「スタート」→「プログラム」→「OWB_HOME」→「Warehouse Builder」→「OWB Runtime Assistant」を選択します。

UNIX の場合：シェルを起動し、次のロケーションに移動します。
OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix。たとえば、次のように入力します。
cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix
次に runtimeinst.sh を実行します。

2. 「OWB Runtime Assistant: ようこそ」ページで「次へ」をクリックします。
3. 「OWB Browser Assistant: 操作の選択」ページで「既存の Warehouse Builder ターゲット・スキーマの削除」を選択します。

ウィザードの指示に従って、データベースから Oracle9i Warehouse Builder ターゲット・スキーマ・オブジェクトを削除します。

注意： Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant では、ユーザー定義のオブジェクトはターゲット・スキーマから削除されません。

4.3 ステップ 3. Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository オブジェクトの削除

Runtime Repository ユーザーを削除するには、この項で説明するように、まず、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant を実行して既存の Runtime Repository 自体を削除します。その後、SQL*Plus を使用してユーザーを削除できます。

Oracle9i Warehouse Builder ランタイム・オブジェクトを削除するには：

1. Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant を起動します。

Windows の場合：「スタート」→「プログラム」→「OWB_HOME」→「Warehouse Builder」→「OWB Runtime Assistant」を選択します。

UNIX の場合：シェルを起動し、次のロケーションに移動します。
`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。
`cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix`
次に `runtimeinst.sh` を実行します。

2. 「OWB Runtime Assistant: ようこそ」ページで「次へ」をクリックします。
3. 「OWB Browser Assistant: 操作の選択」ページで「既存の Warehouse Builder ランタイム・オブジェクトの削除」を選択します。

ウィザードの指示に従って、データベースから Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository オブジェクトを削除します。

注意： Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant では、ユーザー定義のオブジェクトは Runtime Repository スキーマから削除されません。

4.4 ステップ 4. Oracle9i Warehouse Builder Design Repository オブジェクトの削除

Oracle9i Warehouse Builder Design Repository を削除するには:

1. Oracle9i Warehouse Builder Repository Assistant を起動します。
Windows の場合: 「スタート」 → 「プログラム」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB Repository Assistant」を選択します。
UNIX の場合: シェルを起動し、次のロケーションに移動します。
`OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix`。たとえば、次のように入力します。
`cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix`
 次に `reposinst.sh` を実行します。
2. 「OWB Repository Assistant: ようこそ」 ページで「次へ」をクリックします。
3. 「OWB Browser Assistant: 操作の選択」 ページで「既存の Warehouse Builder リポジトリの削除」を選択します。
 ウィザードの指示に従って、データベースから Oracle9i Warehouse Builder Design Repository オブジェクトを削除します。

4.5 ステップ 5. Oracle9i Warehouse Builder や他の Oracle ソフトウェアの削除

他の Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントを削除するには、Oracle Universal Installer を再起動する必要があります。リポジトリを削除する場合は、必ず Oracle9i Warehouse Builder Client ソフトウェアより先に削除してください。

このマシンに Oracle9i Warehouse Builder Server Side Install を実行した場合は、Oracle ソフトウェアを削除する前に、次の手順を実行する必要があります。

- 作成したすべての Runtime Repository をこのマシンから削除します。
- 次のようにして、Name and Address Server (NAS) を停止します。

Windows の場合: `ORACLE_HOME\owb\bin\win32\NASStop.bat` を実行します。

UNIX の場合: `ORACLE_HOME/owb/bin/unix/NASStop.sh` を実行します。

コンピュータから Oracle9i Warehouse Builder を削除する場合は、必ず Oracle Universal Installer を使用してください。ディレクトリを手動で削除して Oracle9i Warehouse Builder を削除しようとする、Oracle Universal Installer の操作に被害を与える可能性があります。

既存の Oracle ソフトウェアを削除するには:

1. Oracle Universal Installer を起動します。

1-19 ページの第 1.9 項「[Oracle Universal Installer について](#)」で、インストール要件、CD のマウント手順、各種プラットフォームでの Oracle Universal Installer の実行方法を参照してください。

「Oracle Universal Installer: ようこそ」ページが表示されます。「ようこそ」画面には、Oracle Universal Installer の情報が表示されます。「ようこそ」画面とそれ以降のインストール画面に、次の機能ボタンが表示されます。

終了: インストール処理を中止し、インストーラを終了します。

ヘルプ: 各画面の機能に関する詳細情報が表示されます。

インストール済みの製品: 現在インストールされている製品が表示されます。この一覧は、削除する製品を確認および選択する場合にも使用します。

前: 前の画面に戻ります。

次: 次の画面に進みます。

「ようこそ」画面には次の 2 つのボタンもあります。

製品の削除: 個々の製品またはすべての製品を削除します。

バージョン情報: 使用中のインストーラのバージョン番号が表示されます。

2. OUI の「ようこそ」ページで「インストール済みの製品」をクリックすると、そのシステムにインストールされているすべての Oracle 製品の一覧が表示されます。

「インベントリ」ページには、システムにあるすべての Oracle 製品の一覧が表示されます。

3. 削除する既存の Oracle 製品を、そのコンポーネントとともに選択します。

4. 「削除」をクリックします。

Oracle9i Warehouse Builder を削除しても、パス `OWB_HOME\owb\j2ee\owbb` が残っている場合は、`owbb` ディレクトリを削除します。

Oracle9i Database および Oracle8i R8.1.7 の 準備

Oracle9i Warehouse Builder をインストールする前に、次の構成パラメータを設定して Oracle9i Database を準備する必要があります。

この付録では、次の項目について説明します。

- [Design Repository データベース・インスタンスの初期化パラメータ](#) (A-2 ページ)
- [Runtime Repository データベース・インスタンスの初期化パラメータ](#) (A-3 ページ)

A.1 Design Repository データベース・インスタンスの初期化パラメータ

Oracle9i Warehouse Builder Design Repository データベースは、標準の Oracle9i Database 初期化パラメータで実行されます。

表 A-1 は、パフォーマンスを保証するための最初の目安となる初期化パラメータを示しています。

表 A-1 Design Repository インスタンス用初期化パラメータ

初期化パラメータ	設定値	コメント
GLOBAL_NAMES	FALSE	Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser クライアントを使用するには、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository インスタンス上でこのパラメータを設定します。
REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE	EXCLUSIVE	この設定は、次の connect 文を動作させるために必要です。 connect sys/(<<sys_password>>@TNS_NAME_OF_DB as sysdba; ただし、このパラメータを EXCLUSIVE ではなく NONE に設定した場合は、07_DICTIONARY_ACCESSIBILITY パラメータを次のように設定します。
07_DICTIONARY_ACCESSIBILITY	TRUE	前述で推奨したように、REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE を EXCLUSIVE ではなく NONE に設定した場合は、このパラメータ設定が代替になり、SYS ユーザーに接続したときに次の文が動作できます。 connect sys/(<<sys_password>>@TNS_NAME_OF_DB
OPEN_CURSORS	300	これより高い値も設定できます。
DB_BLOCK_SIZE	8192	このパラメータはデータベースの作成時に設定され、変更できません。 Oracle9i Warehouse Builder では、8192 を超える値は、Design Repository にはお薦めしません。
DB_CACHE_SIZE	104877600	これは 100MB です。
COMPATIBLE	9.0	初期化パラメータにこのパラメータがない場合は、最後に追加してください。

A.2 Runtime Repository データベース・インスタンスの初期化パラメータ

Oracle9i Warehouse Builder ランタイム・コンポーネントをサポートするには、データ・ウェアハウスを配置するシステムの Oracle9i Database Enterprise Edition インスタンスを変更する必要があります。

表 A-2 は初期化パラメータを示しています。

表 A-2 ランタイム・インスタンスの初期化パラメータ

初期化パラメータ	設定値	コメント
GLOBAL_NAMES	FALSE	Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser Client を使用するには、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository インスタンス上でこのパラメータを設定します。
REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE	EXCLUSIVE	Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository スキーマにアクセスするか、スキーマを作成するには、SYSDBA 権限を持つ SYS アカウントを使用する必要があります。Oracle9i Warehouse Builder Design Repository ユーザーには特定の v_\$ ビューへのアクセス権が必要で、これらの権限はリポジトリ作成時に SYSDBA アカウントによって付与されます。この設定により、SYSDBA 権限が必ず SYS に付与されます。
JAVA_POOL_SIZE	20MB	最小の推奨値です。
OPEN_CURSORS	500	複数のセッションを起動する場合や、1 つのセッションで複数のマッピングか複雑なマッピングを実行する場合は、より高い値を指定できます。
DB_BLOCK_SIZE	16384	このパラメータはデータベースの作成時に設定されます。変更しないでください。 推奨値は 16384 です。サーバーで使用できるブロック・サイズがこれより小さい場合は、使用可能な最大サイズを設定してください。コンピュータの RAM が 512MB より少ない場合は、9600 をお勧めします。
COMPATIBLE	9.0	初期化パラメータにこのパラメータがない場合は、最後に追加してください。

表 A-2 ランタイム・インスタンスの初期化パラメータ (続き)

初期化パラメータ	設定値	コメント
OPTIMIZER_MODE	CHOOSE	使用可能な他のオプティマイザ・モードは、『Oracle8i パフォーマンスのための設計およびチューニング』、『Oracle9i データベース・パフォーマンス・チューニング・ガイドおよびリファレンス』、『Oracle8i データ・ウェアハウス』および『Oracle9i データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。
QUERY_REWRITE_ENABLED	TRUE	マテリアライズド・ビューをクエリー・リライト・オプションで生成する予定がある場合は、TRUE に設定します。
DB_CACHE_SIZE	314632800	これは 300MB です。この値は、システムの許容限度まで高くすることができます。
DB_FILE_MULTIPLE_BLOCK_READ_COUNT	16	16 は推奨値です。可能であれば 32 をお勧めします。
DBWR_IO_SLAVES	<i>n</i>	<i>n</i> = CPU の数 (最低) または <i>n</i> = 2 * CPU の数 (推奨)
LOG_BUFFER	<i>n</i>	<i>n</i> = 20 * DB_BLOCK_SIZE (最低) または 40 * DB_BLOCK_SIZE (推奨)
PGA_AGGREGATE_TARGET	314572800	これは 300MB です。ソートや集計を頻繁に行う場合は、この値を増やすことができます。ただし、DB_CACHE_SIZE と PGA_AGGREGATE_TARGET は、空き物理メモリー・サイズより小さくする必要があります。
UTL_FILE_DIR	*	PL/SQL でファイル I/O に使用できるディレクトリを指定します。UTL_FILE_DIR = * と設定すると、すべてのディレクトリをファイル I/O に使用できます。個別のディレクトリを指定するには、それぞれのディレクトリに対して、このパラメータを連続した行に繰り返し指定します。Oracle9i Warehouse Builder でフラット・ファイル・ターゲットを作成する場合は、このパラメータをフラット・ファイル・ターゲットを作成するディレクトリに設定し、データベース・エンジンからアクセスできるようにする必要があります (詳細は、下記の説明を参照してください)。
AQ_TM_PROCESSES	1	OWB/OWF Advanced Queueing System: Workflow Engine のみ。

表 A-2 ランタイム・インスタンスの初期化パラメータ (続き)

初期化パラメータ	設定値	コメント
ENQUEUE_RESOURCES	大きなサイズの MDL ファイルをインポートする場合は 3000 以上。	エラーなしでインストールを完了するには、最小設定の「1」が必要です。
PARALLEL_AUTOMATIC_TUNING	TRUE	これは、パラレル問合せのパラメータです。 Oracle8i または Oracle9i Database のパラレル処理管理に対する知識によって、設定値が異なります。初級ユーザーには、この設定をお勧めします。 この設定によって、パラレル処理のチューニングがサーバーで実行されます。
LARGE_POOL_SIZE	0	これは、パラレル問合せのパラメータです。 Oracle8i または Oracle9i Database のパラレル処理管理に対する知識によって、設定値が異なります。上級のデータベース管理者 (DBA) には、この設定をお勧めします。 この設定によって、サーバーで LARGE_POOL_SIZE が自動的に設定されます。

フラット・ファイル・ターゲットに対するターゲット・データ・ファイルのパスを設定するには、ウェアハウス・インスタンスの初期化パラメータにこのパスを設定します。UTL_FILE_DIR パラメータをフラット・ファイル・ターゲットのディレクトリに設定し、データベースからアクセスできるようにします。

たとえば、出力ファイルが D:¥Data¥FlatFiles¥File1.dat の場合、init.ora 内の UTL_FILE_DIR パラメータを次のように設定します。

```
UTL_FILE_DIR = D:¥Data¥FlatFiles
```

有効なファイルのロケーションが複数ある場合、たとえば、D:¥Data¥FlatFiles と

E:¥OtherData の両方が有効な場合は、init.ora 内のパラメータを次のように設定します。

```
UTL_FILE_DIR = D:¥Data¥FlatFiles
```

```
UTL_FILE_DIR = E:¥OtherData
```

この 2 行は初期化パラメータ内で連続している必要があります。

次のように設定すると、ディレクトリのチェックを省略できます。

```
UTL_FILE_DIR = *
```

Oracle9i Warehouse Builder 検証では、このパラメータを初期化パラメータ内で設定する必要がありますという警告が返されます。

A.3 Oracle9iAS Metadata Repository の初期化パラメータ（オプション）

Oracle9i Warehouse Builder Design Browser および Runtime Audit Browser を Oracle9iAS に統合する場合は、[表 A-3](#) に示すパラメータを設定します。

表 A-3 Oracle9iAS Metadata Repository の初期化パラメータ

初期化パラメータ	設定値
GLOBAL_NAMES	FALSE
OPEN_CURSORS	300
OPEN_LINK	100

Oracle Enterprise Manager および Oracle Workflow のインストール

Oracle Enterprise Manager (OEM) は、Oracle9i Database の CD に含まれているスケジューリング・ツールです。Oracle Enterprise Manager を Oracle9i Warehouse Builder とともに構成すると、データ・ウェアハウスのデータのロードまたはリフレッシュを行うジョブを手動でスケジュールできます。Oracle Workflow では、Oracle Enterprise Manager ジョブ・ライブラリにあるジョブの依存性を管理できます。

この付録では、Oracle Enterprise Manager と Workflow をサーバーおよびクライアント・システム上で有効にする手順を説明します。

この付録では、次の項目について説明します。

- [Oracle Enterprise Manager の構成](#) (B-2 ページ)
- [Oracle Workflow のインストール](#) (B-8 ページ)

この構成ガイドには、重要なインストール手順のみが記載されています。インストール手順の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』、『Oracle Workflow Server インストレーション・ノート』および『Oracle Workflow Client インストレーション・ノート』を参照してください。

B.1 Oracle Enterprise Manager の構成

Oracle9i Database とともにインストールされている Oracle Enterprise Manager のクライアントおよびサーバー・ソフトウェアを、次の手順で構成します。

B.1.1 ステップ 1: Oracle Enterprise Manager リポジトリの作成

Oracle Enterprise Manager リポジトリを作成するには：

1. Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を開始します。

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を起動するには、次の操作を行います。

- Windows NT の場合：

Windows の「スタート」メニューから Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を起動できます。

また、コマンドラインから次のコマンドを使用しても、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を起動できます。

```
emca
```

- UNIX の場合：

コマンドラインから次のコマンドを使用して、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を起動します。

```
emca
```

emca コマンドを実行するには、\$ORACLE_HOME/sysman/config ディレクトリの omsconfig.properties ファイルに対する書込みアクセスが必要です。

このウィザードでは、Oracle Enterprise Manager リポジトリを作成します。

2. 「構成操作」 ページで「ローカルの Oracle Management Server を構成します」を選択します。
3. 「リポジトリのデータベースの選択」 ページで、次の情報を入力します。

ユーザー名 : system

パスワード : manager (または適切な system パスワード)

サービス : oemrepos

4. 「リポジトリへのログイン情報」 ページで、次の情報を入力します。

ユーザー名 : Oracle Enterprise Manager リポジトリをインストールするスキーマ

パスワード : Oracle Enterprise Manager リポジトリをインストールするスキーマのパスワード

5. 「リポジトリ・ユーザの表領域の選択」ページでは、新しい表領域を作成するかデフォルトの表領域を使用するかを選択できます。「次へ」をクリックします。
6. 「終了」をクリックして、この処理を終了します。
7. インストールが完了したら、次の手順で OMS を開始します。

Windows の場合: 「スタート」 → 「コントロール パネル」 → 「サービス」をクリックします。

UNIX の場合: \$ORACLE_HOME/bin ディレクトリにアクセスし、コマンド `oemctl start oms` を入力します。

8. Oracle9i Warehouse Builder ランタイムをインストールしたデータベースで、Oracle Agent サービスを開始します。
9. Oracle9i Warehouse Builder Client をインストールしたコンピュータで、Oracle Enterprise Manager Console を開始します。

生成されたスクリプトをジョブ・ライブラリに格納するには、Oracle9i Warehouse Builder で Oracle Management Server (OMS) にログオンする必要があります。このサーバーではジョブ・ライブラリを管理します。

10. Oracle Enterprise Manager の構成が終了したら、「Management Server の追加」をクリックして新規の Oracle Enterprise Management Server を設定する必要があります。

サービスを新たに構成している場合、「Management Server の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。Oracle9i Warehouse Builder Design Repository サーバーのホスト名を入力します。

「Management Servers」ページで「OK」をクリックします。

「Oracle Manager Server にログイン」ページで、次の情報を入力します。

管理者: sysman (Oracle Enterprise Manager Console の最初のログイン・ユーザー名)

パスワード: oem_temp (Oracle Enterprise Manager Console の最初のログイン・パスワード)

「セキュリティの警告」画面で、次の情報を入力します。

パスワード: sysman

パスワード確認: sysman

11. ナビゲーション・ツリーから「ノード」を選択します。右クリックし、ポップアップ・メニューから「ノードの検出」を選択します。
12. 検出ウィザードの「ノードの指定」ページで、Oracle9i Warehouse Builder のターゲット・ウェアハウスがあるコンピュータの名前を入力し、「次へ」をクリックして結果を表示します。

B.1.2 ステップ 2: Windows ユーザーの作成

Oracle Enterprise Manager で必要な権限を持つ Windows NT ユーザーを作成するには、Oracle9i Warehouse Builder ランタイムのデータベース・インスタンス・ホストに対して Windows NT ユーザー・マネージャを実行します。

注意： Oracle9i Warehouse Builder ランタイム・スキーマをホスティングするノードが UNIX システムである場合は、この手順を省略してください。UNIX 上の ORACLE ユーザーは、ジョブ・システムから要求されるすべてのジョブを実行できる権限を持つ必要があります。

OEM Agent 9.2 を通して Windows ユーザーにアクセスする場合は、ユーザーをローカルの管理者グループに追加する必要があります。

Windows ユーザーを作成するには：

1. 「スタート」→「管理ツール」→「ユーザー マネージャ」を選択します。
2. 「ユーザー マネージャ」ウィンドウの「ユーザー」メニューから「新しいユーザー」を選択します。
3. 「新しいユーザー」ウィンドウで、次の情報を入力します。

ユーザー名 : OEM

フルネーム : OEM Administrator

説明 : バッチ・ジョブとして実行します。

パスワード : パスワードを入力します。

パスワードの確認入力 : 再びパスワードを入力します。

「OK」をクリックします。ユーザー名のリストに新しいユーザー名が挿入されます。

4. Windows NT の場合は、ユーザー・マネージャ・コンソールから新しいユーザー名を選択し、「原則」→「ユーザーの権利」を選択します。「ユーザー権利の原則」パネルが表示されます。

Windows 2000 および XP の場合は、「管理ツール」フォルダから **ローカル・セキュリティ・ポリシー・アプレット** を起動します。

5. Windows NT の場合 :

「ユーザー権利の原則」 パネルで「高度なユーザー権利の表示」 ボックスを選択します。

「権利」 フィールドのドロップダウン・リストから「バッチ ジョブとしてログオン」 オプションを選択します。

「追加」 をクリックします。「ユーザーとグループの追加」 パネルが表示されます。

Windows 2000 および XP の場合 :

「ローカル ポリシー」 → 「ユーザー権利の割り当て」 に移動します。

ユーザーを「バッチ ジョブとしてログオン」 権限に追加します。

6. 「ドメインまたはコンピュータ」 ドロップダウン・リストからこのユーザーに対するドメインを選択します。
7. 「ユーザーの表示」 をクリックし、作成した新規 Enterprise Manager ユーザーの名前を選択します。
8. 「追加」 をクリックしてから「OK」 をクリックし、権限を追加します。

B.1.3 ステップ 3: 優先接続情報の構成

Oracle Enterprise Manager では、Oracle9i Warehouse Builder ランタイム・スキーマをホスティングするシステム上のジョブをスケジュールします。Oracle Enterprise Manager でジョブをスケジュールするには、次の 2 セットのユーザー名とパスワードを構成する必要があります。

- ホスト用のセット : OEM/ パスワード
- 対応するデータベース用のセット : system/manager

これらの接続情報を初期化するには :

1. Oracle Enterprise Manager Console を開始します。
2. 「システム」 メニューから「作業環境」を選択します。
「管理者作業環境」 ウィンドウが表示されます。
3. 「優先接続情報リスト」 タブを選択します。

ターゲット名とタイプのリストがパネルに表示されます。各リソース・ノードには、ノード、データベースおよびリスナーの 3 つのターゲット・タイプがあります。

4. Runtime Repository スキーマをホスティングするターゲット名を選択します（ターゲット・タイプはノードです）。

「接続情報」パネルが表示されます。

5. Oracle Enterprise Manager ホストへのアクセスを提供するユーザー名とパスワードを入力します。

Windows NT ホスト・システムを実行している場合は、これは前の項で Windows NT ホスト用に作成したユーザーになります。

UNIX ホスト・システムを実行している場合は、これはステップ 2 で指定した UNIX 上の ORACLE ユーザーになります。

6. Runtime Repository スキーマのターゲット名を選択します（ターゲット・タイプはデータベースです）。これは、Oracle Enterprise Manager によってデータベースに割り当てられたターゲット名です。

7. このデータベースへのアクセスを提供するユーザー名とパスワードを入力します。

8. 「OK」をクリックして入力内容をコミットします。

これで、Oracle Enterprise Manager で Oracle9i Warehouse Builder を実行するように構成されました。Oracle Enterprise Manager にロード・ジョブ（TCL スクリプト）またはスケジュール・ジョブを登録する前に、Oracle Enterprise Manager をホスティングするマシンおよびターゲット・ウェアハウスをホスティングするマシン上の必要なサービスをすべて開始する必要があります。

Oracle Enterprise Manager のホスト上では、次のサービスを開始する必要があります。

- Oracle Enterprise Manager Server
- Oracle Agent

ターゲット・ウェアハウスのホスト上では、次のサービスを開始する必要があります。

- Oracle Agent

[Oracle Workflow のインストール](#)に進んでインストールを続行します。

B.1.4 Oracle Enterprise Manager と Intelligent Agent のデータベース互換性マトリックス

表 B-1 は、Oracle Enterprise Manager と Intelligent Agent の互換性マトリックスを示しています。

表 B-1 Oracle Enterprise Manager と Intelligent Agent のデータベース互換性マトリックス

Oracle Enterprise Manager リリース	リポジトリの作成をサポートするデータベース・リリース	サポートされる Intelligent Agent リリース	管理するデータベース・リリース
9.2	9.2	9.2	9.2
	9.0.1.x	9.0.1.x	9.0.1.x
	8.1.7.x	8.1.7.x	8.1.7.x
	8.1.6.x	8.1.6.x	8.1.6.x
	8.0.6.x	8.0.6.x	8.0.6.x
9.0.1	9.0.1.x	9.0.1.x	9.0.1.x
	8.1.7.x	8.1.7.x	8.1.7.x
	8.1.6.x	8.1.6.x	8.1.6.x
	8.0.6.x	8.0.6.x	8.0.6.x

次は、表 B-1 に対する注意点です。

- Intelligent Agent は、同一リリース以下のデータベースを監視および管理します。たとえば Intelligent Agent リリース 8.1.7 は、リリース 8.1.7 以下のデータベースを監視および管理します。管理されるデータベースのリリースよりも Intelligent Agent のリリースが新しい場合、Intelligent Agent 独自の ORACLE_HOME または Intelligent Agent とバージョンが一致する ORACLE_HOME に Intelligent Agent をインストールする必要があります。
- 上の表で、「データベース・リリース」はすべての Edition のデータベース（Enterprise Edition、Standard Edition および Personal Edition）に適用されます。Personal Edition には、Oracle Enterprise Manager のジョブとイベント、または Intelligent Agent のサポートは含まれません。

B.2 Oracle Workflow のインストール

Oracle Workflow が Oracle9i Warehouse Builder と必ず統合されるようにするには、次のインストール手順に従います。

- [Oracle Workflow Server のインストール](#)
- [Oracle Workflow Client のインストール \(オプション\)](#)

B.2.1 Oracle Workflow Server のインストール

使用しているオペレーティング・システムの『Oracle Workflow Option Server インストレーション・ノート』に記載されている手順を注意して実行します。このインストレーション・ノートには、Workflow Monitor のセットアップに必要な手動の手順が記載されています。Workflow Monitor が使用できることを確認して、次の手順に進みます。

注意： Oracle Workflow Server で Oracle9i Warehouse Builder ランタイム・サービスを通してアクティビティを起動できるようにするには、Oracle Workflow リポジトリ・ユーザーに EXECUTE ANY PROCEDURE システム権限を付与する必要があります。

B.2.2 Oracle Workflow Client のインストール (オプション)

Oracle9i Warehouse Builder での Oracle Workflow Client のインストールはオプションです。これは、Oracle Workflow Client の機能が Oracle9i Warehouse Builder のプロセス・フロー・エディタに置き換えられているためです。ただし、Oracle Workflow に配布済の Oracle9i Warehouse Builder プロセスを表示する場合は、Oracle Workflow Client をインストールできます。

Oracle9i Warehouse Builder Client をインストールしたコンピュータに、Microsoft Windows NT 用の Oracle Workflow Client リリース 2.6.2 の CD から Oracle Workflow Client をインストールします。『Oracle Workflow Client インストレーション・ガイド』に記載されているインストール手順に従ってください。

MDL File Upgrade Utility を使用したメタデータのアップグレード

以前のバージョンの Oracle9i Warehouse Builder から Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 にメタデータをアップグレードする場合、Metadata Loader File Upgrade Utility を使用する必要はありません。MDL ファイルをリリース 9.2 にインポートすると、Oracle9i Warehouse Builder で自動的にファイルのエクスポート元のバージョンが検出され、現行バージョンにアップグレードされます。ただし、以前のように MDL File Upgrade Utility を手動で実行して、メタデータを個別にアップグレードすることもできます。この章では、MDL File Upgrade Utility の使用方法について説明します。

MDL File Upgrade Utility を使用すると、Oracle9i Warehouse Builder の本稼動バージョンから作成された MDL ファイルを Oracle9i Warehouse Builder の最新バージョンにアップグレードできます。MDL File Upgrade ウィザードまたは MDL Command Line Utility のいずれかを使用します。

この付録では、次の項目について説明します。

- [MDL File Upgrade Utility について](#) (C-2 ページ)
- [MDL File Upgrade Utility の使用](#) (C-2 ページ)

C.0.1 MDL File Upgrade Utility について

以前の本来稼働バージョンの Oracle9i Warehouse Builder から Oracle9i Warehouse Builder にメタデータをアップグレードするには、Oracle9i Warehouse Builder Metadata Loader File Upgrade Utility を使用します。このツールを使用すると、Oracle9i Warehouse Builder リリース 2.0.4.78 以上のリポジトリから作成された MDL ファイルを最新バージョンの Oracle9i Warehouse Builder にアップグレードできます。

MDL File Upgrade Utility を使用すると、次の本来稼働バージョンの Oracle9i Warehouse Builder から Oracle9i Warehouse Builder にメタデータをアップグレードできます。

- Oracle Oracle9i Warehouse Builder 2.0.4 および 2.05
- Oracle Oracle9i Warehouse Builder 2.1.1
- Oracle Oracle9i Warehouse Builder 3.0 および 3.1
- Oracle Oracle9i Warehouse Builder 9.0.2 および 9.0.3

C.0.2 MDL File Upgrade Utility の使用

次のいずれかの方法でメタデータをアップグレードできます。

- **MDL File Upgrade ウィザード**: 各プロジェクトを 1 つの MDL ファイルとしてエクスポートした場合は、MDL File Upgrade ウィザードを使用します。MDL File Upgrade Utility ウィザードを実行すると、ファイルは直接現行バージョンの Oracle9i Warehouse Builder に変換されます。
- **MDL Command Line Utility**: 1 つのプロジェクトを複数の MDL ファイルとしてエクスポートした場合は、コマンドラインを使用します。また、中間のバージョンにアップグレードする場合も、コマンドライン・ユーティリティを使用します。詳細は、『Oracle9i Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

C.0.2.1 旧バージョンからのリポジトリ・オブジェクトのアップグレード

旧バージョンの Oracle9i Warehouse Builder から現行バージョンの Oracle9i Warehouse Builder にアップグレードする場合、MDL File Upgrade Utility によりリポジトリのオブジェクトが次のように変更されます。

- **My Project**: Oracle9i Warehouse Builder であらかじめパッケージングされているサンプル・オブジェクトは、物理名の要件に合わせて名前が My Project から MY_PROJECT に変更されます。
- **外部プロセス**: 外部プロセスは、プロセス・フロー内の外部プロセス・アクティビティにアップグレードされます。以前のリリースのマッピングで外部プロセスを定義している場合は、MDL Upgrade Utility によりプロセス・フロー内の外部プロセスとしてオブジェクトが再定義されます。

- **ビジネス・エリア**: ビジネス・エリアは、コレクションにアップグレードされます。以前のリリースでビジネス・エリアを定義している場合は、MDL File Upgrade Utility によりビジネス・エリア名の前にモジュール名が付けられ、コレクションとして再定義されます。たとえば、REGION1 というモジュールの ORDERS というビジネス・エリアは、REGION1_ORDERS というコレクションにアップグレードされます。
- **外部プロセスのマッピング**: 外部プロセスのマッピングは、プロセス・フローに移行されます。

以前のリリースは、すでに独立した機能カテゴリではないが Warehouse モジュールの一部である場合、以前のリリースからスタンドアロンの変換を実行すると、次の警告が表示される場合があります。

- Transformation name renamed from "old name" to "new name".
- Transformation business name renamed from "old name" to "new name".

分割してエクスポートされたマッピングにはアップグレード制限があります。マッピングがファクト 1 とファクト 2 でソースとして使用されている場合、アップグレードの順番は次のようになります。

1. ファクト 1
2. ファクト 2
3. マッピング

C.0.2.2 MDL File Upgrade ウィザードの使用

各プロジェクトを 1 つの MDL ファイルとしてエクスポートした場合は、MDL File Upgrade ウィザードを使用します。MDL File Upgrade Utility ウィザードを実行すると、ファイルは直接現行バージョンの Oracle9i Warehouse Builder に変換されます。

MDL File Upgrade ウィザードにアクセスするには:

1. MDL File Upgrade Utility を起動します。

Windows の場合: 「スタート」 → 「OWB_HOME」 → 「Warehouse Builder」 → 「OWB MDL File Upgrade Utility」を選択します。

UNIX の場合: シェルを起動し、次のロケーションに移動します。

OWB_ORACLE_HOME/owb/bin/unix。たとえば、次のように入力します。

```
cd /private/home/OWB92/owb/bin/unix
```

次に、mdlconvertui.sh を実行します。

2. 「Oracle Warehouse Builder MDL ファイル・アップグレード・ユーティリティ・ウィザード: ようこそ」 ページで「次へ」をクリックします。
3. 「参照」をクリックし、最新バージョンの Oracle9i Warehouse Builder に変換する MDL ファイルを選択します。

注意： 複数の MDL ファイルを同時にアップグレードするには、MDL Command Line Utility を使用します。MDL File Upgrade ウィザードでアップグレードするファイルを複数選択するとエラー・メッセージが表示されます。

4. 「次へ」をクリックします。
「ターゲット」ページが表示されます。
5. 「参照」をクリックし、システムに格納する出力ファイルのディレクトリを選択します。
6. 「次へ」をクリックします。
ログ・ファイルのロケーションを選択します。デフォルトのパスを選択するか、「参照」をクリックして新しいロケーションを選択します。
7. 「次へ」をクリックします。
「サマリー」ページが表示されます。
8. アップグレードの対象に選択したファイルのソースとターゲットなどのアップグレード情報を確認します。
9. 「終了」をクリックして、選択したファイルをアップグレードします。
「変換の進行状況」パネルに、アップグレードの状況が表示されます。処理が終了すると、「Upgrade に成功しました。」というメッセージが表示されます。

C.0.2.3 警告およびエラーの確認

メタデータのアップグレードが完了したら、ログ・ファイルで警告およびエラーを確認します。

- アップグレード中に警告が発生した場合、MDL File Upgrade Utility は最後まで続行されログに警告が記録されます。エラーが発生した場合、MDL File Upgrade Utility は中断されログにエラーが記録されます。
- アップグレード後に警告とエラーが表示された場合は、「Warning」および「Error」という単語でログ・ファイルを検索し、問題を確認してください。
- 予想外のエラーが発生してアップグレードが中断した場合、ログ・ファイルにはメッセージの詳細が表示されます。ログ・ファイルを確認するか、オラクル社カスタマ・サポート・センターまでご連絡ください。

C.0.3 コマンドラインからの MDL File Upgrade Utility の実行

コマンドラインを使用する前に、次の点に注意してください。

- 複数の MDL ファイルをアップグレードする場合、すべてのファイルが同じ Oracle9i Warehouse Builder プロジェクトに属している必要があります。
- ファイルをアップグレードする順番は重要です。たとえば、エンティティはマッピングの前にアップグレードする必要があります。

以前のバージョンの Oracle9i Warehouse Builder Design Repository から MDL ファイルをアップグレードするには、次のコマンドラインを使用します。

- **Windows の場合:** `ORACLE_HOME\owb\bin\win32\mdlconvert sourcefile parameterfile`
- **UNIX の場合:** `ORACLE_HOME/owb/bin/unix/mdlconvert.sh sourcefile parameterfile`

ソース・ファイルにはソース・ファイル、ターゲット・ファイルおよびログ・ファイルの名前が記載されています。パラメータ・ファイルには、変換のための差分属性が記載されています。

次はソース・ファイルのフォーマット例です。

```
SOURCE
Mdl21Sample1.mdl
Mdl21Sample2.mdl
TARGET
Mdl21Sample1_9i.mdl
Mdl21Sample2_9i.mdl
LOGFILE
Mdl21Sample1.log
Mdl21Sample2.log
```

次はパラメータ・ファイルのフォーマット例です。

```
verbose= true/false (default: false)
tempdir = some directory (default: .\temp)
sourceversion = 3.0/3.1/9.1/9.1.1 (default: 9.1.1)
targetversion = 3.0/3.1/9.1/9.1.1 (default: 9.1.1)
```

診断およびデバッグ

この付録では、インストール時にエラーや問題が発生した場合に使用する参照情報を記載します。この付録では、次の項目について説明します。

- [デバッグ](#) (D-2 ページ)
- [診断](#) (D-6 ページ)

D.1 デバッグ

この項では、次の項目について説明します。

- [ログ・ファイルのロケーション](#) (D-2 ページ)
- [Oracle9i Warehouse Builder のフリーズまたはハングアップ](#) (D-2 ページ)
- [エラーおよびその他の予期せぬ動作についての詳細なエラー・ロギング](#) (D-3 ページ)
- [Runtime Platform Service の管理](#) (D-5 ページ)

D.1.1 ログ・ファイルのロケーション

- **Oracle9i Warehouse Builder Repository Assistant:**
`ORACLE_HOME\owb\reposasst\log.txt.0`
- **Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant:**
`ORACLE_HOME\owb\rtasst\log.txt.0`
- **Oracle9i Warehouse Builder Browser Assistant:**
`ORACLE_HOME\owb\browserasst\owbb_browser_install_log.txt.0`
- **Oracle9i Warehouse Builder Runtime Platform Service:**
Server Side `ORACLE_HOME\owb\log\Runtime_Repository_Name\log.0`
- **Oracle9i Warehouse Builder Design Client:** 「作業環境」画面でロケーションを指定します。

D.1.2 Oracle9i Warehouse Builder のフリーズまたはハングアップ

Oracle9i Warehouse Builder がフリーズまたはハングアップしているようならば、次の手順でスタックのトレースを実行します。

1. DOS コマンド・プロンプトで、次のように入力します。
`cd ORACLE_HOME\owb\bin\win32\`
2. `owbclient.bat` を実行します。
3. プログラムがハングアップしたら、[Ctrl] キーを押しながら [Break] キーを押します。

これによりスレッドダンプが生成されます。この情報は、オラクル社カスタマ・サポート・センターで問題を特定するのに役立ちます。

D.1.3 エラーおよびその他の予期せぬ動作についての詳細なエラー・ロギング

Oracle9i Warehouse Builder でエラーが生成された場合、または他の予期せぬ結果が示された場合は、詳細なエラー・ロギングを使用すると、ユーザーやオラクル社カスタマ・サポート・センターが原因を特定できることがあります。

詳細なエラー・ロギングを行うには：

1. コマンド・プロンプトで次のディレクトリに移動します。

Windows の場合： `ORACLE_HOME\owb\bin\win32`

UNIX の場合： `ORACLE_HOME/owb/bin/unix`

2. 次の実行ファイルのいずれかを実行し、パイプを通して出力をログ・ファイルに書き出します (`owbclient.bat > owbclient.log` など)。

Oracle9i Warehouse Builder Browser Assistant

Windows の場合： `browserinst.bat`

UNIX の場合： `browserinst.sh`

Oracle9i Warehouse Builder Design Client

Windows の場合： `owbclient.bat`

UNIX の場合： `owbclient.sh`

Oracle9i Warehouse Builder Design Browser

Windows の場合： `openDB.bat`

UNIX の場合： `openDB.sh`

Oracle9i Warehouse Builder MDL File Upgrade Utility

Windows の場合： `mdlconvertui.bat`

UNIX の場合： `mdlconvertui.sh`

Oracle9i Warehouse Builder OMB Plus

Windows の場合： `OMBPlus.bat`

UNIX の場合： `OMBPlus.sh`

Oracle9i Warehouse Builder Repository Assistant

Windows の場合： `reposinst.bat`

UNIX の場合： `reposinst.sh`

Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant

Windows の場合: runtimeinst.bat

UNIX の場合: runtimeinst.sh

Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser

Windows の場合: openRAB.bat

UNIX の場合: openRAB.sh

Start Local RTP Service

Windows の場合: スクリプト `ORACLE_HOME\owb\bin\win32\local_service_login.bat` の実行 (パラメータとして `-startup ORACLE_HOME` を使用)

UNIX の場合: `local_service_login.sh -startup ORACLE_HOME`

Start Oracle9i Warehouse Builder OC4J Instance

Windows の場合: startOwbbInst.bat

UNIX の場合: startOwbbInst.sh

Stop Local RTP Service

Windows の場合: スクリプト `ORACLE_HOME\owb\bin\win32\local_service_login.bat` の実行 (パラメータとして `-closedown ORACLE_HOME` を使用)

UNIX の場合: `local_service_login.sh -closedown ORACLE_HOME`

Stop Oracle9i Warehouse Builder OC4J Instance

Windows の場合: stopOwbbInst.bat

UNIX の場合: stopOWBBInst.sh

3. 結果として生成されたログ・ファイルを調べます。

オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡する際には、このログを使用します。

D.1.4 Runtime Platform Service の管理

Runtime Platform Service は、Oracle データベース・サーバーにより自動的に管理されます。ただし、このサービスを手動で開始および停止する場合は、Oracle9i Warehouse Builder に付属のスクリプトを使用します。

このスクリプトは、`ORACLE_HOME\owb\rtpl\sql` ディレクトリにあります。これらのスクリプトを手動で実行するには、Runtime Repository の所有者としてランタイム・プラットフォームにログオンします。次のようなスクリプトがあります。

- **start_service.sql**: Runtime Platform Service を開始するために使用します。
- **stop_service.sql**: Runtime Platform Service を停止するために使用します。
- **show_service.sql**: Runtime Platform Service が利用可能かどうかをチェックするために使用します。
- **service_doctor.sql**: Runtime Platform Service コンポーネントのインストール・ステータスをチェックするために使用します。

Runtime Platform Service を手動で開始、停止、およびチェックするには:

1. Runtime Repository の所有者としてランタイム・プラットフォームにログオンします。
2. 次のうち必要なスクリプトを実行します。

Runtime Platform Service を開始するには: `ORACLE_HOME\owb\rtpl\sql\start_service.sql` スクリプトを実行します。

Runtime Platform Service を停止するには: `ORACLE_HOME\owb\rtpl\sql\stop_service.sql` スクリプトを実行します。

Runtime Platform Service が利用可能かどうかをチェックするには: `ORACLE_HOME\owb\rtpl\sql\show_service.sql` スクリプトを実行します。

Runtime Platform Service コンポーネントのインストール・ステータスをチェックするには: `ORACLE_HOME\owb\rtpl\sql\service_doctor.sql` スクリプトを実行します。

D.1.5 HP-UX へのインストール時に発生するデータベース・サーバー問題の検出

HP-UX オペレーティング・システムに Oracle9i Warehouse Builder ランタイム・コンポーネントをインストールするときに、「INS0022: 起動したプログラムでエラーが発生しました。」というエラーが発生する場合があります。これはデータベース・サーバーの問題である可能性があります。

データベース・サーバー問題を特定するには:

1. SQL*Plus で、SYS ユーザーに接続します。

```
Create user test_lj identified by test_lj;  
Grant connect, resource to test_lj;
```

2. 次の内容を含む `ORACLE_HOME/owb/bin/unix/test.sh` を作成します。

```
../unix/loadjava -thin -verbose -order -resolve -user  
'test_lj/test_  
lj@(DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=hpdgpa3) (PORT=1522)) (CONNECT_  
DATA=(SERVICE_NAME=dgpadw)))'  
../../lib/int/rtpserver.jar
```

3. ディレクトリを `ORACLE_HOME/owb/bin/unix/` に変更します。
4. `test.sh` を実行します。

D.2 診断

この項では、次の項目について説明します。

- [SYSDBA 権限を持たない SYS ユーザー](#) (D-7 ページ)
- [INS0034: Runtime Repository オプションをローカルで実行して、データベース・サーバーを構成する必要があります。](#) (D-7 ページ)
- [ORA-04021: オブジェクト SYS_DBMS_AQADM. をロック待ちしていてタイムアウトが発生しました。](#) (D-7 ページ)
- [API5022: 指定されたリポジトリに接続できません。](#) (D-8 ページ)
- [LoadJava エラーによる Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant の障害](#) (D-9 ページ)
- [SYSDBA ユーザーの指定時におけるエラー](#) (D-9 ページ)
- [系統および影響分析のレポート: マテリアライズド・ビューの広範な表領域要件](#) (D-11 ページ)
- [バッチ操作中の Java のメモリー不足エラー](#) (D-11 ページ)

- **ORA-01925:** 使用可能なロールの最大数 30 を超えました。(D-11 ページ)
- **java.lang.UnsatisfiedLinkError: no ocijdbc9 in java.library.path** (D-12 ページ)
- **Internal Server Error** (D-12 ページ)
- **INS0009:** データベースに接続することができません。接続情報を確認してください。(D-13 ページ)
- **ORA-12154:** TNS: サービス名を解決できませんでした。(D-13 ページ)
- **ORA-12514:** TNS: サービス名を解決できませんでした。(D-14 ページ)

SYSDBA 権限を持たない SYS ユーザー

標準のデータベースのインストールでは、SYS ユーザーは SYSDBA 接続情報を持ちます。これは SQL*Plus で、次の connect 文を発行することにより確認できます。

```
connect sys/(<<sys_password>>@TNS_NAME_OF_DB as sysdba;
```

標準のデータベースのインストールでは、REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE=EXCLUSIVE およびデフォルトのパスワード・ファイルがインストール・プロセスで作成されるため、前述の connect 文が機能します。

データベースが REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE=NONE を使用して構成されている場合は、connect sys/(<<sys_password>>@TNS_NAME_OF_DB as sysdba; 文が失敗します。この場合は、次のいずれかの操作を実行できます。

- REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE=EXCLUSIVE を使用してデータベースを再構成し、パスワード・ファイルを作成します (パスワード・ファイルがない場合)。
- 前述の操作が不可能な場合は、O7_DICTIONARY_ACCESSIBILITY=TRUE を使用してデータベースを再構成します。
この設定を使用すると、connect sys/(<<sys_password>>@TNS_NAME_OF_DB が機能し、Oracle9i Warehouse Builder Assistant で SYS ユーザーに接続できるようになります。

INS0034: Runtime Repository オプションをローカルで実行して、データベース・サーバーを構成する必要があります。

このメッセージは、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant の実行時に表示されます。

原因: Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant を実行するマシンに対してローカルでデータベース・サーバーが用意されていません。

処置: Oracle データベース・サーバーがあるマシン上に Oracle9i Warehouse Builder Server Side をインストールし、Runtime Assistant を起動します。

ORA-04021: オブジェクト SYS_DBMS_AQADM. をロック待ちしていてタイムアウトが発生しました。

このエラーは Runtime Repository Assistant の実行時に表示されます。この問題に対して可能な解決策は 2 つあります。

原因：Runtime Assistant では、作成される Runtime Repository ユーザーに、SYS ユーザーの dbms_aq パッケージに対する 'Execute' 権限が付与されます。データベース・サーバーでは、dbms_aq パッケージがロックされてから、この権限が適用されます。別のユーザーがこのパッケージを使用中である場合、Runtime Repository にはデータベース・サーバーからエラー ORA-04021 が返されます。

処置：Oracle Enterprise Manager を使用して、データベース・サーバーに接続し、dbms_aq を使用しているセッションを識別します。ロックを行っているアプリケーションを終了し、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository ユーザーの新規セットを再作成します。

処置：ロックを行っているアプリケーションの実行が終了するまで待ちます。

1. SQL*Plus で、SYS ユーザーに接続し、次の SQL 文を実行します。

```
grant execute on sys.dbms_aq to scott;
grant execute on sys.dbms_aqadm to scott;
```

2. 前述の文が成功したら、次の SQL 文を実行します。

```
revoke execute on sys.dbms_aq from scott;
revoke execute on sys.dbms_aqadm from scott;
```

3. Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository ユーザーの新規セットを再作成します。

4. ORACLE_HOME\owb\rtpl\sql\start_service.sql スクリプトを実行して、Runtime Platform Service を再起動します。

API5022: 指定されたリポジトリに接続できません。

このエラーは、Oracle9i Warehouse Builder Design Repository スキーマからデータベースをエクスポートまたはインポートした後に、Design Repository に接続を試みたときに表示されます。

原因：パッケージの NAMESPACESERVICEIMPL が無効になっている可能性があります。この問題は、リポジトリの所有者が SYS.V_\$SESSION に対する SELECT 権限を持たない場合に、Oracle9i Warehouse Builder Design Repository スキーマからデータベースをエクスポートまたはインポートすると、その後発生します。この問題の原因は、次の手順で診断できます。

1. SQL*Plus で、Oracle9i Warehouse Builder Design Repository スキーマに接続します。
2. SQL プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
ALTER PACKAGE NAMESPACESERVICEIMPL compile body;
```

3. 「Warning: Package body altered with compilation errors」というメッセージが表示された場合は、SQL プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
show errors;
```

4. 次のエラーは、Oracle9i Warehouse Builder Design Repository の所有者が SYS.V_\$SESSION に対する SELECT 権限を持たないことを意味します。

```
PL/SQL: SQL statement ignored
PLS-00201: 識別子 'SYS.V_$SESSION' を宣言してください
```

処置:

1. SQL*Plus で、SYS ユーザーとして接続します。
2. SQL プロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
grant select on V_$SESSION to Warehouse Builder_Repository_Owner;
```

3. Design_Repository_Owner に接続します。
4. SQL プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
alter package NAMESPACESERVICEIMPL compile;
```

LoadJava エラーによる Oracle9i Warehouse Builder Runtime Assistant の障害

原因: この問題は、Oracle データベースに JServer オプションがインストールされていない場合に発生する可能性があります。

処置: Oracle データベースに JServer オプションがインストールされていることを確認します。

SYSDBA ユーザーの指定時におけるエラー

Oracle9i Warehouse Builder Assistant では、Oracle9i Warehouse Builder Design Repository またはランタイム・コンポーネントをインストールするときに、SYSDBA 接続情報を指定する必要があります。

原因: 標準のデータベースのインストールでは、SYS ユーザーは SYSDBA 接続情報を持ちます。これは SQL*Plus で次の connect 文を発行することにより確認できます。

```
connect sys/sys_password@TNS_NAME_OF_DB as sysdba;
```

標準のデータベースのインストールでは、REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE=EXCLUSIVE およびデフォルトのパスワード・ファイルがインストール・プロセスで作成されるため、前述の connect 文が機能します。

データベースが REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE=NONE を使用して構成されている場合は、connect sys/sys_password@TNS_NAME_OF_DB as sysdba; 文が失敗します。この場合は、次のいずれかの操作を実行できます。

処置: REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE=EXCLUSIVE を使用してデータベースを再構成し、パスワード・ファイルを作成します (パスワード・ファイルがない場合)。

処置: 前述の操作が不可能な場合は、O7_DICTIONARY_ACCESSIBILITY=TRUE を使用してデータベースを再構成します。この設定を使用すると、connect sys/sys_password@TNS_NAME_OF_DB 文が機能し、Oracle9i Warehouse Builder Assistant で SYS ユーザーに接続できるようになります。

Name and Address リージョン・データ・ライブラリが使用不可能

原因: Name and Address リージョン・データ・ライブラリが、正しい位置にインストールされていない可能性があります。

処置: NAS_DATA ディレクトリへのリージョン・データの抽出が成功していることを確認します。

1. ORACLE_HOME から、Name and Address Server を起動します。

Windows の場合: owb¥bin¥win32¥NASTart.bat を実行します。

UNIX の場合: owb/bin/unix/NASTART.sh を実行します。

2. ログ・ファイル owb¥bin¥admin¥NASvr.log を開きます。

このログには、インストールされた国のリストが含まれます。

このようなリストがない場合は、リージョン・ライブラリ・データが正しいロケーションに抽出されていることを確認します。不適切なロケーションにデータを抽出していた場合は、データを再インストールするか、または owb¥bin¥admin¥NameAddr.properties ファイルを変更して、適切なファイル・パスを示します。NameAddr.properties ファイルを変更する場合は、次の手順で Name and Address Server を停止し、再起動します。

Windows の場合: サーバーを起動するには、owb¥bin¥win32¥NASTart.bat を実行します。サーバーを停止するには、owb¥bin¥win32¥NAStop.bat を実行します。

UNIX の場合: サーバーを起動するには、owb/bin/unix/NAStart.sh を実行します。サーバーを停止するには、owb/bin/unix/NAStop.sh を実行します。

3. インストールの確認後は、必要に応じて Name and Address Server を停止できます。これは、このサーバーが、Name and Address 演算子を使用するマッピングの実行時に自動的に起動されるためです。

系統および影響分析のレポート: マテリアライズド・ビューの広範な表領域要件

初めてマテリアライズド・ビューをリフレッシュするときには、ビューが Oracle9i Warehouse Builder Design Repository から移入されます。マテリアライズド・ビューは、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository 全体に割り当てられている容量の 2 倍までの領域を占める場合があります。

処置: 専用の表領域で Oracle9i Warehouse Builder Runtime Repository スキーマが作成される場合は、このような問題を簡単に監視できます。表領域の拡張に備えて物理ドライブに十分な空き領域があるかどうかを確認します。Oracle Enterprise Manager 内で、表領域が Autoextend On に設定されていることを確認します。

バッチ操作中の Java のメモリ不足エラー

大量のメモリを必要とする操作では、システム・リソース（仮想メモリなど）に制限がある場合、Java のメモリ不足エラーが発生する可能性があります。

原因: 仮想メモリの割当てが十分ではありません。Oracle9i Warehouse Builder Client は、owbclient.bat ファイルの -mx パラメータで定義されているように、最大ヒープ・サイズが 384MB で実行されます。owbclient.bat ファイルの -Dlimit パラメータにより、OWB メモリ・マネージャで Java のガベージ・コレクションのサポートを開始するメモリのしきい値（Dlimit の 80%）が指定されます。-mx パラメータ値を変更する場合は、-Dlimit パラメータを同じ値か、または少なくともその値の 90% に設定します。-Dlimit を低い値に設定すると、Oracle9i Warehouse Builder のパフォーマンスに悪影響を与えます。

処置: Oracle9i Warehouse Builder の -Dlimit パラメータの値を次の手順で増やします。

1. Oracle9i Warehouse Builder を終了します。
2. テキスト・エディタで次のファイルを開きます。
Windows の場合: %OWBHOME%\bin\win32\ombplus.bat
UNIX の場合: %OWBHOME%\bin\win32\owbclient.sh
3. -Dlimit パラメータを 334 に変更します。
4. ファイルを保存し、閉じます。
5. Oracle9i Warehouse Builder を再起動します。

ORA-01925: 使用可能なロールの最大数 30 を超えました。

このエラーは、Design Repository、Runtime Repository、ターゲット・スキーマ、またはランタイム・ユーザーのインストール中に発生します。

原因: データベースで有効なロールが最大数を越えています。Design Repository、Runtime Repository、ターゲット・スキーマ、またはランタイム・ユーザーを作成すると、そのスキーマに割り当てられているデータベースに新規ロールが作成されます。ロール数が MAX_ENABLED_ROLES パラメータの値を越えると、このエラーが発生します。

処置: 初期化パラメータの MAX_ENABLED_ROLES の値を増やします。Design Repository、Runtime Repository、ターゲット・スキーマ、またはランタイム・ユーザーを削除するときには、関連するロールも削除します。

java.lang.UnsatisfiedLinkError: no ocijdbc9 in java.library.path

Internal Server Error

```
java.lang.UnsatisfiedLinkError: no ocijdbc9 in java.library.path
at java.lang.ClassLoader.loadLibrary(ClassLoader.java:1349)
at java.lang.Runtime.loadLibrary0(Runtime.java:749)
```

このエラーは、Runtime Audit Browser (Oracle9iAS 統合バージョン) の「リポジトリの選択」ページで、ネット・サービスベースのデータベース・リンクを使用して Runtime Repository のレポートを表示しようとするると発生します。

原因: OWB Browser OC4J インスタンスが、正しい追加環境変数を使用して構成されていません。

処置: 第2章「Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのインストール」で説明されている手順をすべて実行したかどうか確認します。

Internal Server Error

これは、リスナーにより返された Runtime Audit Browser ポートレット・エラーです。

原因: このエラーは、データ・ソースの定義またはポートレット・プロバイダの定義が原因で、Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser ポートレット・プロバイダが機能していない場合に発生します。

処置: Oracle9i Warehouse Builder Runtime Audit Browser ポートレット・プロバイダが機能しているかどうかを、次の URL で確認します。

```
http://hostname:port_number/owbb/providers/
```

次に例を示します。

```
http://dwlin12.us.oracle.com:7778/owbb/providers/
```

次のテキストが表示されます。

```
"Congratulations! You have successfully reached your Provider's Test Page."
Checking for components:
Portlets are:
Warehouse Builder Runtime Audit Browser
```

前述のテキストが表示されたかどうかにかかわらず、次のデータ・ソースの定義を確認します。

- * **Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のみ: 第 2 章「Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのインストール」**で説明されているように、デフォルトのアプリケーション・ライブラリ・パスから uix2.jar および shar.jar を削除します。
- * Oracle9i Warehouse Builder データ・ソースは、デフォルトのアプリケーションではなく、OWBB アプリケーションを使用して定義する必要があります。
- * **データ・ソース・クラス**の場合は、Oracle データ・ソースの com.evermind.sql.OrionCMTDataSource を使用します。
- * JDBC URL を調べます。通常、「jdbc:oracle:thin:@dwlin12:1521:iasdb」のような URL を使用した場合は、JDBC Thin ドライバを使用し、「iasdb」にはサービス名ではなく既存の SID のみを使用します。また、「@」記号の前にコロンが付きます。JDBC URL でサービス名を使用する必要がある場合は、「(DESCRIPTION =(ADDRESS_LIST =(ADDRESS = (PROTOCOL = TCP)(HOST = dwlin16)(PORT = 1521))) (CONNECT_DATA = (SERVICE_NAME = ora920.us.oracle.com)))」などの完全な TNS 文字列で試します。
- * データ・ソースの定義を変更した場合やアプリケーションを再配布した場合は、アプリケーションを再起動する必要があります。
- * ポートレット・プロバイダの定義を調べます。第 2 章「Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのインストール」の手順に従って正確に定義されていることを確認します。
- * Oracle9iAS Portal の ORACLE_HOME で OC4J ログを調べます。たとえば、OWBB という名前の配布済 OWBB アプリケーションの場合、UNIX での一般的なパスは次のとおりです。/usr/iasv2_portal/j2ee/owbb/log/owbb_default_island_1:
 default-web-access.log
 global-application.log
 jms.log
 rmi.log
 server.log

INS0009: データベースに接続することができません。接続情報を確認してください。

ORA-12514: TNS: サービス名を解決できませんでした。 (D-14 ページ) を参照してください。

ORA-12154: TNS: サービス名を解決できませんでした。

ORA-12514: TNS: サービス名を解決できませんでした。 (D-14 ページ) を参照してください。

ORA-12514: TNS: サービス名を解決できませんでした。

このエラーは、データベースへの接続を試みる際に発生します。

原因：Net8 Easy Configuration または Net8 Assistant ツールを使用してネット・サービス名エントリを作成し、新しく作成したネット・サービス名でデフォルトのオプション（サービス名）を使用した場合、パラメータ `SERVICE_NAME` が、ネット・サービス名エントリ内の `CONNECT_DATA` セクションの副次句として `TNSNAMES.ORA` に追加されます。この副次句は、Oracle8 の旧バージョンで (`SID=<SIDname>`) 副次句と入れ替わります。

処置：`TNSNAMES.ORA` ファイルを次の手順で実装します。

1. 個別のサービスとして識別する各 `SID` に対して、`LISTENER.ORA` で `GLOBAL_DBNAME` パラメータを使用します。このパラメータの値を、`SERVICE_NAME` パラメータの値として使用します。リスナー・プロセスの停止と再起動を行い、`LISTENER.ORA` で変更した内容をすべて有効にする必要があります。
2. `INIT.ORA` に存在するパラメータ（すなわち、`SERVICE_NAMES` および `DB_DOMAIN`）の値を使用して、`TNSNAMES.ORA` で使用する必要のある `SERVICE_NAME` の値を決定します。この値の有効な構成は `<SERVICE_NAMES>.<DB_DOMAIN>` で、ピリオドにより 2 つの `INIT.ORA` 値が分けられています。`SERVICE_NAMES` が `BIKES` で、`DB_DOMAI` が `COM` の場合、`SERVICE_NAME` は `BIKES.COM` となります。
3. `INIT.ORA` で設定されている `DB_DOMAIN` パラメータがない場合、または `LISTENER.ORA` に `GLOBAL_DBNAME` がない場合は、`SERVICE_NAME` パラメータ用に `TNSNAMES.ORA` 内の `INIT.ORA` から `SERVICE_NAMES` を使用できます。
たとえば、`INIT.ORA` に `SERVICE_NAMES = "TEST817"` が含まれており、`db_domain` が設定されていない場合、`TNSNAMES.ORA` エントリは `CONNECT_DATA = (SERVICE_NAME = "TEST817")` となります。
4. `init.ora` の `SERVICE_NAMES` パラメータで複数の値が指定されている場合は、これらの値のうち 1 つを使用できます。`SERVICE_NAMES` が設定されていない場合は、`INIT.ORA` ファイルから `DB_NAME.DB_DOMAIN` パラメータを使用できます。
5. `INIT.ORA` で `SERVICE_NAMES` および `DB_DOMAIN` が設定されておらず、`LISTENER.ORA` に `GLOBAL_DBNAME` が存在しない場合、`TNSNAMES.ORA` ファイルの `SERVICE_NAME` は、`DB_NAME` となります。

索引

A

AIX

ソフトウェア要件, 1-8

B

Browser Assistant

Design Browser を Oracle9iAS に統合する場合のインストール手順, 2-31

C

CD-ROM

Oracle Universal Installer (OUI) CD-ROM のマウント, 1-20

CD-ROM のマウント, 1-20

CLASSPATH 環境変数

文字の長さ, 1-15

Create Any Directory 権限, 2-25

Create Public Database Link 権限, 2-10

Custom

概要, 2-7

D

Design Browser

Oracle9iAS からの削除, 4-2

Oracle9iAS との統合, 2-34

Oracle9iAS との統合、要件, 1-13

Oracle9iAS との統合、インストール・インスタンス, 1-6

クライアント、インストール要件, 1-13

クライアント、概要, 1-7

クライアント、有効化, 2-16

Design Browser Client

インストール要件, 1-13

概要, 1-7

有効化, 2-16

Design Repository

Oracle9iAS でのデフォルトの登録, 1-5

Repository Assistant, 2-10

SYSDBA, 2-11

言語, 2-13

削除, 4-5

表領域, 2-12

Design Time

インストール要件, 1-12

Design Time Install

概要, 2-4

手順, 2-8

DISPLAY 環境変数

UNIX の要件, 1-16

Drop Any Directory 権限, 2-25

H

HP-UX

ソフトウェア要件, 1-8

J

JDBC

EJB のロケーション, 2-39, 2-40

JDBC URL, 2-38, 2-39

JDBC ドライバ, 2-38, 2-39

トランザクション (XA) のロケーション, 2-39, 2-40

ロケーション, 2-38, 2-40

L

LD_LIBRARY_PATH 環境変数

文字の長さ, 1-15

Linux

要件, 1-8

localhost

Web ブラウザのプロキシ・サーバー・バイパス・リストへの「localhost」の追加, 2-28

M

MDL File Upgrade Utility

概要, C-2

Metadata Loader (MDL)

File Upgrade ウィザード, C-3

N

Name and Address

インストール, 2-44

演算子、概要, 2-44

データ・ライブラリ, 2-44

ベンダー, 2-44

Name and Address Server

Runtime Assistant, 2-25

インストール手順, 2-20

NLS_LANG

ロケールの設定, 1-15

O

OC4J

OC4J インスタンスの作成, 2-36

Oracle Enterprise Manager (OEM)

インストール, B-1

概要, 1-7

構成, B-2

Oracle HTTP Server

Oracle データベース, 1-6

Oracle JVM, 2-20

java_pool_size, 2-20

Oracle Metalink

保証されたソフトウェア, 1-13

Oracle Universal Installer (OUI)

Custom, 2-7

Design Time Install, 2-4, 2-8

Design Time、インストール要件, 1-12

Oracle9i Warehouse Builder の削除, 4-5

orainstRoot.sh, 2-8

OUI でインストールされるコンポーネント, 2-4

OUI の起動, 1-20

root.sh, 2-10

Server Side、インストール要件, 1-12

Server Side のインストール, 2-7, 2-17

インベントリ・ディレクトリ, 1-19

概要, 1-19

ベース・ディレクトリ, 2-8

他の Oracle ソフトウェアの削除, 4-5

Oracle Workflow (OWF)

インストール, B-1

概要, 1-7

ORACLE_HOME

Oracle9i Warehouse Builder の削除, 1-14

Oracle9iDS および Oracle9i Warehouse Builder, 1-14

ORACLE_HOME 環境変数

UNIX の要件, 1-16

共存に関する考慮事項, 1-13

Oracle9i Application Server (Oracle9iAS)

インストールするコンポーネント, 1-6

Oracle9i Database および Oracle8i R8.1.7

Warehouse Builder Design Repository, 1-6

Warehouse Builder Runtime Repository, 1-6

Oracle9i Warehouse Builder

Client、概要, 1-7

インストールの概要, 2-2

概要, 1-4

コンポーネント, 1-4

削除, 4-1, 4-5

診断およびデバッグ, D-1

Oracle9i Warehouse Builder Client

概要, 1-7

Oracle9iAS

Design Browser、要件, 1-13

Design Browser と Runtime Audit Browser の統合, 2-30

Design Browser の削除, 4-2

Runtime Audit Browser、要件, 1-13

Runtime Audit Browser の削除, 4-2

データ・ソース・クラス、定義, 2-38

デフォルト・リポジトリの登録, 1-5

Oracle9iDS

9.0.2 から Oracle Developer Suite 10g へのアップグ

- レード, 1-14
- Oracle データベース
 - Design Browser Client, 1-6
 - Design Repository, 1-6
 - OEM リポジトリ, 1-6
 - Oracle HTTP Server, 1-6
 - OWF 表, 1-6
 - Runtime Audit Browser Client, 1-6
- orainstRoot.sh
 - Design Time Install, 2-8
- owbrt_sys
 - Runtime Assistant, 2-20

P

PATH 環境変数
文字の長さ, 1-15

R

RAM
ハードウェア要件, 1-8

Repository Assistant
Design Repository の削除, 4-5
SYSDBA, 2-11
インストール手順, 2-10
言語, 2-13
データベース構成警告, 2-12
表領域, 2-12

root.sh
Design Time Install, 2-10

Runtime Assistant
Runtime Repository の削除, 4-4
インストール手順, 2-20
ターゲット・スキーマ, 2-25
ターゲット・スキーマの削除, 4-3
データベース構成警告, 2-24, 2-27
表領域、Runtime Repository, 2-24
表領域、ターゲット・スキーマ, 2-27
ランタイム・アクセス・スキーマ, 2-24

Runtime Audit Browser
Oracle9iAS からの削除, 4-2
Oracle9iAS との統合, 2-35
Oracle9iAS との統合、要件, 1-13
Oracle9iAS との統合、インストール・インスタンス, 1-6
クライアント、インストール要件, 1-13

クライアント、概要, 1-7
「データベース・リンクの作成」ページ、ネット・サービス名, 2-41

Runtime Audit Browser Client
インストール要件, 1-13
概要, 1-7

Runtime Repository
Oracle9iAS でのデフォルトの登録, 1-5
SYSDBA, 2-22, 2-26
インストール手順, 2-20
削除, 4-4
データベース構成警告, 2-24
表領域, 2-24

S

Server Side
インストール要件, 1-12

Server Side のインストール
Oracle Universal Installer (OUI), 2-17
概要, 2-7

Solaris
ソフトウェア要件, 1-8

SYSDBA
Repository Assistant, 2-11
Runtime Assistant, 2-22, 2-26
Runtime Repository, 2-22, 2-26
事前, 2-7

SYS アカウント, 2-11, 2-22, 2-26

T

TMP 環境変数
UNIX の要件, 1-17

U

UNIX
DISPLAY 環境変数, 1-16
「Group Name」画面、Design Time Install, 2-8
ORACLE_HOME 環境変数, 1-16
ORACLE_HOME での共存に関する考慮事項, 1-14
Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントの起動, 2-4
orainstRoot.sh, 2-8
root.sh, 2-10

TMP 環境変数, 1-17
UNIX アカウントおよびグループの作成, 1-17
環境変数, 1-16
要件, 1-8

W

Windows

Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントの起動
, 2-4
Windows NT ユーザー・マネージャ、Oracle
Enterprise Manager (OEM), B-4
環境変数, 1-15
ソフトウェア要件, 1-8

あ

アーキテクチャ

Oracle9i Warehouse Builder コンポーネント, 1-4
Oracle9i Warehouse Builder の概要, 2-2

アカウント

UNIX アカウントおよびグループの作成, 1-17

アップグレード

Metadata Loader (MDL) File Upgrade ウィザード
, C-3

Oracle Warehouse Builder の新しいバージョンのイ
ンストール, 3-3

Oracle9iDS 9.0.2 から Oracle Developer Suite
10g, 1-14

アップグレードされたメタデータのインポート
, 3-5

外部プロセス, C-2

ビジネス・エリア, C-3

メタデータ, 3-1

メタデータ、エクスポート, 3-3

移行

データ, 3-1

インストール

Name and Address, 2-44

Oracle Enterprise Manager (OEM), B-1

Oracle Workflow (OWF), B-1

Oracle9i Warehouse Builder、詳細手順, 2-1

Oracle9i Warehouse Builder のアップグレード
, 3-3

インストール準備作業, 1-14

クイック・ステップ, 1-2

診断およびデバッグ, D-1

要件, 1-1

インストール準備

インストール準備作業, 1-14

インストール要件, 1-1

インストール要件

Design Browser Client, 1-13

Design Time, 1-12

RAM, 1-8

Runtime Audit Browser Client, 1-13

Server Side, 1-12

オペレーティング・システム, 1-8

ディスク領域, 1-8

ハードウェア要件, 1-8

ページ・ファイル・サイズ, 1-8

インベントリ・ディレクトリ

Oracle Universal Installer (OUI), 1-19

インポート

アップグレードされたメタデータ, 3-5

ウィザード

Metadata Loader File Upgrade ウィザード, C-3

エクスポート

メタデータ、アップグレードの準備, 3-3

オペレーティング・システム

Oracle9i Warehouse Builder の動作保証, 1-8

必須ソフトウェア, 1-8

か

環境

環境のコンポーネントに関する推奨事項, 1-5

コンポーネント (必須、オプション), 1-4

環境変数

Windows 環境変数, 1-15

文字の長さ, 1-15

外部プロセス

ユーザー定義のプロセスへのアップグレード, C-2

概要

インストール・コンポーネント, 2-2

インストールのクイック・ステップ, 1-2

起動

Oracle Universal Installer (OUI), 1-20

Oracle9i Warehouse Builder コンポーネント, 2-4

クイック・ステップ

インストール, 1-2

グループ

UNIX アカウントおよびグループの作成, 1-17

グループ名

- Design Time Install, 2-8
- 権限
 - Create Any Directory, 2-25
 - Create Public Database Link, 2-10
 - Drop Any Directory, 2-25
 - SYSDBA, 2-7
- 言語
 - Design Repository, 2-13
 - Repository Assistant, 2-13
- 構成
 - Oracle Enterprise Manager (OEM), B-2
 - Oracle9iAS での Design Browser の構成, 2-34
 - Oracle9iAS での Runtime Audit Browser の構成, 2-35
 - ネット・サービス名, 2-41
- コネクタ
 - 自動作成された権限, 2-25
- コマンドライン・ユーティリティ
 - メタデータのアップグレード, C-5
- コレクション
 - ビジネス・エリアからのアップグレード, C-3
- コンポーネント
 - Oracle Universal Installer (OUI) でインストールされる Oracle9i Warehouse Builder コンポーネント, 2-4
 - Oracle9i Warehouse Builder 環境のコンポーネント (必須、オプション), 1-4
 - Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのソフトウェア要件, 1-12
 - Warehouse Builder のインストールの概要, 2-2
 - 環境に関する推奨事項, 1-5
 - 概要, 1-4

さ

- 削除
 - Oracle Universal Installer (OUI) での Oracle Warehouse Builder の削除, 4-5
 - Oracle Universal Installer (OUI) での他の Oracle ソフトウェアの削除, 4-5
 - Oracle9i Warehouse Builder、ORACLE_HOME ディレクトリ, 1-14
 - Oracle9i Warehouse Builder 削除時のディレクトリ, 1-14
 - Oracle9i Warehouse Builder ソフトウェア, 4-1
 - Oracle9iAS の Design Browser, 4-2
 - Oracle9iAS の Runtime Audit Browser, 4-2

- Repository Assistant での Design Repository の削除, 4-5
- Runtime Assistant での Runtime Repository の削除, 4-4
- Runtime Assistant でのターゲット・スキーマの削除, 4-3
- コネクタ、権限, 2-25
- 作成
 - OC4J インスタンス, 2-36
 - コネクタ、権限, 2-25
 - データ・ソース, 2-38, 2-39
- 診断, D-1
- ソフトウェア
 - Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントの要件, 1-12
 - Oracle9i Warehouse Builder のコンポーネント, 1-4
 - 保証されたソフトウェア, 1-13

た

- ターゲット・スキーマ
 - Runtime Assistant, 2-25
 - インストール手順, 2-20
 - 削除, 4-3
 - データベース構成警告, 2-27
 - 表領域, 2-27
- 定義
 - データ・ソース, 2-38, 2-39
 - データ・ソース・クラス, 2-38
- ディスク領域
 - ハードウェア要件, 1-8
- ディレクトリ
 - Oracle9i Warehouse Builder 削除時の削除, 1-14
- データ
 - 移行, 3-1
- データ・ソース
 - 作成, 2-38, 2-39
- データ・ソース・クラス
 - 定義, 2-38
- データベース構成警告
 - Repository Assistant, 2-12
 - Runtime Assistant, 2-24, 2-27
 - ターゲット・スキーマ, 2-27
- データベース・リンク
 - 作成された権限, 2-10
- デバッグ, D-1

登録

- Oracle9iAS のデフォルト・リポジトリ, 1-5
- ポートレット・プロバイダ, 2-40
- トラブルシューティング
- 診断およびデバッグ, D-1

な

- ネット・サービス名
- 構成, 2-41

は

- ハードウェア要件, 1-8
 - RAM, 1-8
 - ディスク領域, 1-8
 - ページ・ファイル・サイズ, 1-8
- バージョン
- 移行, 3-1
- パブリック・データベース・リンク
- 作成された権限, 2-10
- 表領域, 2-12, 2-24, 2-27
 - Design Repository, 2-12
 - Repository Assistant, 2-12
 - Runtime Assistant, Runtime Repository, 2-24
 - Runtime Assistant、ターゲット・スキーマ, 2-27
 - Runtime Repository, 2-24
 - ターゲット・スキーマ, 2-27
- ビジネス・エリア
- コレクションへのアップグレード, C-3
- ファイルのロケーション
- Oracle Universal Installer (OUI)、ファイルのロケーション, 2-9
- ベース・ディレクトリ
- Design Time Install, 2-8
- ページ・ファイル・サイズ
- ハードウェア要件, 1-8
- 保証されたソフトウェア
- Oracle Metalink, 1-13
- ポートレット・プロバイダ
- 登録, 2-40
- プロバイダ URL, 2-40

ま

- メタデータ
- アップグレード, 3-1

- アップグレードされたメタデータのインポート, 3-5
- アップグレードのためのエクスポート, 3-3
- メモリー
- ハードウェア要件, 1-8

や

- ユーザー定義のプロセス
- 外部プロセスからのアップグレード, C-2
- 要件
- Oracle9i Warehouse Builder コンポーネントのソフトウェア要件, 1-12
- インストール要件, 1-1
- 動作環境, 1-8
- ハードウェア要件, 1-8

ら

- ランタイム・アクセス・スキーマ
- Runtime Assistant, 2-24
- インストール手順, 2-20
- ロケール
- NLS_LANG, 1-15
- ロケールの設定, 1-15